船蟲は今晩阿佐谷に拘留し、小文吾は即時語路五郎同道して參れといふ口頭の指圖であつた。語路五郎は指圖通りに船蟲を村長に預けて、小文吾を將て石濱へ行くと、小文吾一人を客座敷に案内させてから、暫くすると常武自身左闘脇の小座敷へ來て、語路五郎を見るとイキナリ汝は何を耄碌けてるかと一喝した。船蟲は大切の囚人にて女ながらも腕に覺えがあるシタ、カ者なれば一晩たりとも、百姓原に任して置くは險谷ゆゑ直ぐ石濱へ引いて來よ、小文吾は大功ある客人なれば今宵は村長の家にてユル〳〵と休息させてから明朝召伴れ參れと命じたのを、何を狼狽へてアベコベの取計らひをしたかと常武は以ての外の顏色であつた。語路五郎は縮み上つて平蜘のやうに詫まり閉口して、ホウ〳〵の體で取つて返すと、阿佐谷では船蟲が奪はれたといふ變な騒ぎで、莊官どもは泣出さぬばかりであつた。語路五郎が石濱へ行つてから暫くすると、阿佐谷へ語路五郎の使丁が來て、俄に評定が變つたから船蟲を即刻石濱へ將て參れといふ命令であつた。ツイ今方馬加どのの指圖で今宵は村預けと定つたものを復た石濱へ引連れよといふは合點の行かぬ沙汰とは思つたが、命令とあらば是非が無いので莊官が先へ立つて、十數人で嚴重に警固して船蟲を引率して行くと、彼是半ば過ぎまで行つた頃、道傍の森から一發の鐵砲を合圖に七八名の覆面の曲者が現はれ、各々拔刀して斬込んだので、鋤鍬持つより外、何も知らない百姓どもは刀の光に肝を冷して我を先にと命からゞ〳〵逃出した。繩取役の莊官だけは暫らく踏留まつたが、切捲られて敵し兼ね、仕方が無しに逃延びて再び加勢を驅集めて取つて返

した時は、囚人を縛つた捕索が切り棄てられて殘つてゐるばかりで、船蟲も曲者、も影も形も無かつた。

扨ては同類の盜賊が奪つて行つたに間違無いと、語路五郎は足摺して口惜しがり、即時に手配して八方へ手分けして追跡させたが、喧嘩過ぎての棒ちぎれ、ヂダンダ踏んでも甲斐が無かつた。が、皆くわ手掛り無いものを穿議のしやうも無いので、その夜は明けて翌る朝、空身で常武の前へ出るのも面伏であるが、默して止むべき事で無いから、切めてもの申譯に莊官初め十數人を珠數繋ぎにして石濱の問注所へ出頭し、前夜の事件の顚末を細さに常武へ具申した。

「それッ見ろ、大切の囚人を無智無力の百姓どもに預けて萬一取逃してはと慮かつて即時に石濱へ引けと命じたものを、その方勝手なる取計ひをして案の定なる間違を仕出來し、今更何の面下げて常武に顏合すか、大癡呆奴が！」と、常武は以ての外の立腹で、「その方元來出過者である。嵐山の笛が出たなら一應は常武へ屆くべきが當然であるを、偶然殿へお目通りしたにしろ直接に殿へ返上し、敵の間者か何か解らぬ身許不明の他國者を碌々糺しもしないで、その方一存を以て殿へ推擧する如き長臣を無視する僭越の沙汰ぢや。左樣な心掛なればこそ大罪人を取逃すので、無知なる百姓どもを縛り上げてその方の役目は濟んだつもりでをるか。原因を糺せば同罪ぢや。身の程知らずの不屆者！誰か有る、語路五郎に繩打て！」

「と下知すれば、組子どもはバラ〳〵と現はれ、ツイ唯つた今まで頭人と仰いだ語路五郎を縁から引き卸して縄を掛け、百姓諸侶、荒々しく獄舎へ引き立つて投げ込んでしまつた。（莊官ばらの投獄は村の者らが心配して、金を遣つて幾何もなく赦免されたが、憐むべし語路五郎は間もなく牢死してしまつた。）

斯くて後、常武は自胤の御前へ出仕し、先づ名笛嵐山の無事に戻つた喜びを述べ、語路五郎の不覺から女賊船蟲を同類に奪はれた遺憾をも言上して、扨て曰く、さりながら嵐山の紛失したは十數年も以前であつて、初めの賊が十數年間も贓物を持堪へてゐやうとも思はれないから、品物を所持するだけで斷罪するは早計で御座る。船蟲が服罪したといふも、女の弱さから嚴しい糾彈に堪へかねて、心にもない白狀をしたかも計られない。疑へば小文吾が贓品を持餘して、竝四郎に寄托るために故意に殘して置いたとも解せられないことは無いので、片言を取上げて直ちに曲直邪正を速斷するは輕率で御座ると、言葉巧みに言瞞めた。且つかの小文吾なるものは行德の住人と稱すれど素性確かならず、第一、彼ほどの武術鍛錬の士が、四方の諸大名爭つて文武の豪傑を求める亂世に主取りせずして浪人してゐるといふが、抑もの不思議、未熟の語路五郎が利口振つて君に推舉し奉るは出過者の嗚呼の所業、或は隣國の間者で無い乎とも疑はれる。一體なら獄に下し、嚴しく糺問して處刑するが君の御威勢を示す所以で御座るが、さるわけにも參らざれば暫らくそれがしの邸に留め、彼が心術を試して後

に御推擧仕るも遲からざるべしと驚を鶏の俟辯を揮つた。自胤は能を嫉み賢を誹謗する常武の鄙しき心を快しとは思はないが、長臣の意見を無下にも斥けかねて、是非なくも善きに計らへと仰せられ、當分小文吾を常武へ預ける事にした。

斯くとは知らぬ小文吾は、語路五郎に伴れられて石濱へ來たが、その後、語路五郎は顏を見せず、主人の常武も對面しないので、底意が計り兼ねて安き心もなく、手持無沙汰に子然と過した。三日目に柚角九念次と呼ぶ郎黨が來て、主人がお目にかゝるから此方へ來ませと先へ立ち、幾間も距つた奥の小書院へ案内した。正面には主人の馬加大記常武、縮羅の單衣に精好の袴を穿き、十三四歳の小姓に大刀を持たして背後に侍らし、悠然として扇子を膝に着座する。左右には鬼とも紐まんづ屈竟の若黨居流れて、素破と言はば一挫ぎにして吳れんづといふ面構へをしてゐた。九念次が闕の際に跪いて、犬田小文吾殿と紹介す言葉の跡から、小文吾は突と進んで座に就いて、恭しく額突いて禮をしたが、常武は主君の自胤に十倍勝して尊大に構へ、膝に手を置いたまゝ、傲然として會釋をだもしなかつた。

小文吾は先づ、ゆくりなくも當家に留められて手厚き款待を受くる恩を謝して後、お尋ねの御重寶が無事納まり、犯人縛に就いた以上は、それがしには御用は無い筈、家を出でて日も久しく、道中同行に逸れて、それやこれやの用事もござるから、一刻も早くお暇を給りたいと言つた。常武は默頭い

て、御邊の訴へ道理でござる。御邊の胸中を察して一刻も速かに暇を取らしたいのだが、如何せん主君自胤御邊を敵の間者と疑はれ、獄中に下して嚴しく糺問せよとの嚴命、さま〳〵執成しても容易に聞入れなく、取留めた證據も無い旅の者を間者と誣ひて獄に繫ぐも、隣國への聞えも善くあるまいと漸く和めて、左も右くも拙者が和殿の一身を保證して當分預かる裁許を得た次第、氣の毒ながら、暫らく當家の客分となつて逗留されよ。と宛も暴慢な主君を執成して、命乞ひでもしたかのやうな顏をした。

小文吾はヒタと呆れて、ナ戯れも程こそあれ、間者などとは心外な、下總は行德の旅籠屋古那屋の小忰と言へば土地では少しは顏の賣れた男で御座る、疑はしくば行德へ人を送つて探らせ給へと怯めず臆せず申開いた。常武は莞爾と笑ひつ、それ式の事心得ぬでは無いが、行德は他領にて人を遣して探るに不便である。縱令御邊に利益ある證言を得ても、他國人の證言では主君の疑ひを解くに足りない、腹も立たうが氣を長くして時節を待ちなさい。そのうちには主君の機嫌を計つて拙者が疑ひを晴らして進ぜるから最う暫らくの間辛抱しなさい。今日からは人出入の多い母屋を離れた閑靜な乾淨房を和殿の住居と定め、朝夕の賄ひ衣服萬端不自由の無いやうに手當をして進ぜる。淋しくは有らうが我が家同樣に心得て、何まれ用事のある時、物欲しと思ふ時は、朝夕の給仕をさせる下部に遠慮なく吩咐けなさい——それでは公務の餘暇に復たユル〳〵と對面せうほどに、今日はこれで別れると、突

と身を起して左右の者を隨へつゝ悠然として奥へ退出した。

小文吾は呆氣に取られてしまつた。君命に寄托けて引留める作略とは見え透いてるが、伊はれ同樣の身となつては爭ふのも無益であるから、暫らく常武の爲んやうを見て進退を決しようと、再び九念次に誘はれて今日からの當分の住居とあてがはれた乾淨房へ行つて見た。六疊と三疊の風流の數寄屋造で、厨もあり浴室もあり、小やかなれど庭もあり、爐には釜を懸けて松風を沸らし、庭には筧樋を引いて泉水を湛へ、萬づに數寄を凝らして住み心地も惡く無ささうだが、出入口は嚴重に戸鎖し、庭の三方は垣を繞らし、中央の折戸は外から錠を卸して一歩も踏出す事が出來ないので、破るに難くはないが鐵壁の獄舍も同樣であつた。この中に獨り子燃として三度の食事を運ぶ男の子、月に二三度掃除や草刈に來る老僕の外には誰訪づる者もないから、談話對手になるものも無く、主人常武からもそれ切り何の沙汰も無く、體のいゝ牢屋住居に一年あまりを過してしまつた。

三　馬加大記の舊惡

斯くて翌る年の春も暮れた。代る〴〵に庭掃除や草刈に來る老僕の中に品七といふのがあつた。木訥で物の言ひざまも眞實だつてるので、鎌休めの折々に茶を煎れて飲ましつゝ、四方山の世間話を語らせて徒然の對手をさせた。段々聞くと現八の親の糠助の友達で、犬塚親子の事など能く知つてるの

で、それとは打明けないでも益々親みを増して能き話對手とした。

或日の事、品七は人には運不運があつて善人でも仕合せ悪く爲る事成す事外れるものもあれば、悪人でもトン〳〵拍子に榮えるものもある。高い聲では言はれないが爰の主人の馬加殿なぞも首の一つや二つは有つても足りない悪い事をしてゐるが、罰も中らず益々榮えて御領主様よりも威張つてるのは能く〳〵運勢が強いと見えると、ウツカリ口が滑らした。小文吾は膝を進めて、馬加殿がドンナ悪い事をしたと訊くと、品七は口の邊を抓つて、このお饒舌めが飛んでもない事を滑らした。馬加殿に聞えたらこの素ッ首が飛んでしまふ。穴賢々々と首をすぼめて悄氣返つた。小文吾は聲を潜めて、それがしは他國者、話したからつて大事ない。決して人には洩らさぬから眠氣ざましに話して聞かせなさいと、他事なく言つたので品七は、では爰だけの話で、決して人には洩らし給ふなと語つたのは、馬加大記の祕密の出世物語である。

元來千葉家には二流ありて、本家の千葉介孝胤といふは、千葉に在城して滸我の成氏に屬してゐた。支流の實胤と自胤の兄弟は、管領上杉の取立で武州の石濱赤塚の二城を預かつてゐた。馬加大記は本千葉の孝胤の郎黨であつたが犯せる罪あつて下總を逐電して石濱に降參し、次第に重用されて長臣に歷上つたのである。然るに石濱の實胤性來多病なので、遁世して家督を弟の自胤に讓つて石濱

赤塚二城を統轄せしめようとする素志があつた。然うなれば赤塚には粟飯原首胤度、籠山逸東太緣連といふ二老臣があつて、馬加常武も自づから下風に立たなければならないから、尋常外れて權勢慾の旺盛な馬加大記は、手を束ねて凝然としてはゐられなくなつた。實胤が家督を讓らぬうちに、少ども早く二人を追退けてしまはうと密々肝膽を碎いてゐた。

緣連は淺慮無謀の士で與し易いが、心憎いのは胤度である。もとが千葉の支流で、門地が高い上に謹嚴篤行の君子で上下の信望が厚いから容易な事では追退けられさうも無かつた。が、奸智に長けた馬加大記は早くも二人に交誼を結びつゝ窃に機會を覘つてゐるうちに、永らく反目してゐた鎌倉の管領家と滸我の公方とが和睦して、再び合體するといふ風聞が立つた。常武は忽ち思付いて、或日胤度を尋ねていふには、兩管領家と公方との和睦の風說は愈々確實であるが、當家は管領家の息の掛つる關係上、滸我殿には常から餘り快く思はれてゐないのだから、愈々遲々石濱殿が隱居されて自胤公が跡目相續されるに方つて、滸我殿の首尾の惡しきも不利益で御座れば、兩管領家との和睦の披露されないうちに滸我殿に慇懃を通じて置くが何かにつけて得策で御座らう。それには滸我御所へ使者を立てゝ敬意を表するが早道で御座るが、それに就て當家の重寶嵐山の名笛は、滸我殿も知ろし召されるゆゑ、引手物として進らせたき石濱殿のお思召である。が、石濱殿から進らせるのは管領家への聞えも影護ければ赤塚殿から使者を立てられて獻上されたらといふ御内意で、密々貴殿へ相談して取

計らへとの仰せであると、名笛嵐山を胤度に渡して言葉巧みに説示した。

忠義一圖の粟飯原胤度はマンマと一杯喝はされて、仰せ畏まりぬと甘諾し、石濱殿へは何れ使命を果して後に御禮言上に罷出るから宜しく御執成を頼むと律義眞方に思込んだ。大前が歸ると直ぐ件の名笛を携へて自胤の御前に出仕し、石濱の大記が唯今見えてお家の重器嵐山を持參し、云々斯々との石濱殿の密々の御内旨で御座りますと上聞した。大記の小細工とは夢にも知らない自胤は、兄の心遣ひを滿足して一儀に及ばず、胤度とも相談して赤塚の重寶の小笹落葉の二銘刀をも添へて、早速滸我御所へ獻上すべく胤度を使者に命ぜられた。胤度は卽時に支度を整へ、その翌る朝、件の寶物を携へて滸我へと出發した。

馬加大記は、豫て見張に附けて置いた腹心から胤度早朝滸我へ出發したと聞くと直ぐ、何喰はぬ顏をして赤塚へ出仕した。自胤は嵐山の獻上が常武から傳へられた兄實胤の内旨を聞いてるので、今朝早速胤度に嵐山を持參さして滸我へ獻上に出發したと告げると、常武は忽ち色を變へ、怪かしき仰せを承るもの哉、それがしが嵐山を持參したは、去ぬる日胤度それがしの許へ參つて赤塚殿にはマダ嵐山を御覽にならないから貴公の取計らひで御覽に入れてくれとの懇談、外ならない御舍弟樣の御懇命ゆゑ、それがし殿へ申上げて昨日持參したので、御覽濟の上は卽時御返納を固くお約束した次第。お家に懸換の無い重寶が他家へ渡つてはそれがしの越度、胤度を眞の武士と信じて裏切られたのは殘

念千萬と拳を震はして憤つて見せた。

意外の言葉に自胤は喫驚した。忠義一圖の武士で假初にも主を欺く不逞の所業は無かつたが、汝の語る如くんば誠に言語道斷の沙汰、それに就いて大記、何か思當る事は無い乎との仰せに、常武は沈吟しい〳〵太い嘆息を吐き、實はそれがし些か小耳に挾んだ事が御座ります。胤度の忠義二つなきを信ずるそれがしは、兎角に能を嫉み長を謟る小人匹夫の根も無い影言と聞棄てにして氣にも留めませんかつたが、今思へば萬更な流言と聞流されません。胤度はもとお家の支れであるを鼻に掛け、兎角に眼に餘る傲慢の振舞がありましたが、この頃君の御寵遇の渥きに馴れて非望を抱き、滸我殿に内通してアハよくば君御兄弟を推倒して武藏七鄕葛飾三十箇莊を横領せんとする逆心紛れなしといふ取沙汰、忠義無二の胤度が豈夫かに左やうな大膽不敵の陰謀を企むまいとは思ひますが、天に口無し人を以つて言はしむる專ら風說で、それがしの耳には疾くから聞及んでをりますと、ネチ〳〵とした佞辯で眞實しやかに述べ立てた。

自胤はサツと顏の色を變へた。聲厲らげて近習を呼び、緣連を召出せと眼を逆釣つて急立てる尋常ならぬ氣色に、近臣ども何事が起つたかと驚き周章てゝ安き心が無かつた。常武は仕濟ましたりと思ふ心を色にも出さず、舌を吐きつゝ遠侍に退いて窃に容子を窺つてゐた。かゝるところへ俄のお召しに倉皇として出仕した籠山逸東太緣連。自胤は近う〳〵と傍近く招き、聲を潛めて言葉忙しく胤度

の事云々斯々と手短かに語られ、最早五六里も行いたらうが他領へ入つては不便であるから、汝今より早馬を仕立て栗橋へ行着かぬうちに追着き、厲立てゝ氣取られぬやう言葉靜かに、自胤が言ふれた一大事があるに由つて速かに引返せと申して將て參れ、胤度若し命を拒みて聽かざれば逆心分明なれば方便を用ひて搦捕れ、若し敵の加勢が有つて思ふに任せぬ時は、渠を擊漏しても嵐山と名刀二口だけは必ず取返し來れと命ぜられた。逸東太は承りぬと退出するを待受けた常武は、遠侍の屏風の蔭から呼留めて、御邊胤度に追付いて君命を傳ふる時能く〳〵了簡されよ。胤度は當家第一の長老、胤度有る間は御邊は如何に手柄を顯はしてもウダツの上る希望は無いが、胤度亡き後は御邊は筆頭第一にて、斯くいふ常武も甘んじて御邊の下風に立たん、能く〳〵了簡されよと耳打した。同氣相求むる二人は以心傳心默契して互に點頭き合つた。

忠義無類の胤度は己れの心に引較べて君を欺き友を賣る佞奸邪智の白者が、背後に窺つて奸計を企んでるとも知らず、赤塚を朝立ちして七八里、栗橋街道の杉門に近き松原通りへ來掛ると、背後に聞ゆる馬蹄の響、オウイ〳〵と呼ぶ聲に振返つて見ると、籠山逸東太が汗馬に鞭打つて一散に追蒐けて來た。何事なるかと駒を留めて待つてると、喘ぎ〳〵追着いて息も急しく倒れるばかりに路邊の棄石に腰を卸した。胤度は準備の氣付を藥籠から出して與へつゝ、暫らく憩はせて後何事かと訊くと、殿様からの火急のお使、一大事を言殘したに由つて急ぎ引返せとの御諚であると言つた。遠路わざ〳〵

御邊を遣はされて召し給ふといふは能く〳〵の一大事で御座らうと、露疑ふ心もなく胤度も馬を下りて、踵を返して逸東太と肩を竝べて、四方山の世間咄をしつゝ戻るほどに、三人五人と追々駈參ずる同勢が三四十人ともなつた。一人にても事足る使者に多勢附添はせるは心得ぬと、胤度は怪訝に思つて逸東太に訊くと、逸東太は俄に聲を厲くし、御邊の陰謀露顯に及んで誅罰を加へるためであると言ひも終らず拔く手も見せずに胤度の肩先をバラリズンと斬下げた。不意を討たれた胤度は、兎角の問答する間もないので、拔合はして直ぐ切結んだが、最初の重傷に太刀先亂れ、尋常なれば逸東太如きに暗々討たれる胤度では無いが、切立て〳〵切捲くられてヅタ〳〵に斬られた。その後は從者の亂闘で、主人の最期に興奮した胤度の若黨どもは必死に闘つたが、足竝亂れて散三に切捲くられ、一人逃げ二人擊たれてイツしか殘るものは一人も無くなつた。

この亂闘の眞最中、列樹の蔭から現れた怪しの男女の曲者があつた。敵も味方も入亂れた混戰の隙を覘つて、路邊にオッポリ出される獸上の方物を抱へて逃げようとした。目早く見附けた槍持奴、それ遣つてはと遮り留めると曲者は丁々發矢と切結んだが、忽ち斫つて倒しつ造化精妙と雲を霞と逃げてしまつた。この爲體を遠くから眺めた籠山逸東太、アナヤと思へど右左に敵を引受けて苦戰の最中看す〳〵得知れぬ曲者にシテやられるを知りつゝもドウにもならず看遁してしまつた。胤度を擊漏らしても嵐山だけは必ず取戻して參れと、殿から固く命ぜられた肝腎の重器を曲者に奪はれては胤度主

從を曖昧にしても申譯が立たない。胤度にしても穩便に將て參れと仰せられたのを、欺し討にしたのが主君へ聞えたら、出世は魯か、お咎めがあらうも知れない。所詮は三十六計逃ぐるに如かずと、親も妻も無い氣安さはその儘跡を晦ましてしまつた。

取殘された追手の面々は頭人の逸東太が影を隱してしまつたので、狐に魅まれたやうに茫然として胤度主從の首級を携へて歸つて來た。もとより逸東太に隨ふ下人の身分で事の仔細は知らぬが、胤度主從が逸東太に斬られた事、亂闘の混雜紛れに横合から飛出した曲者が獻上の方物を奪つて逃げた事逸東太が往方も知らず影を隱してしまつた事を落もなく言上した。自胤は意外の齟齬に喫驚した。胤度の横死、逸東太の逃亡は一家の内紛で仔細は無いが、申譯無いのは石濱の家寶の紛失である。兄寶胤に何と陳謝したものであらうと思案に困じて常武を呼寄せた。

常武は筋書通りに事が運んで、逸東太まで逐電したのを北叟笑みつゝも面に當惑の色を見せて眉を顰め、「嵐山の紛失はそれがしにも越度が御座るが、根原はといふと胤度の逆心から起つた事、不便では御座るが胤度一家を成敗して石濱殿に陳謝する外は御座るまい、萬事はそれがしに任せ給へ。」と、自胤の當惑に乘じて飽くまで殘忍な本性を現はして、御前を退ると直ぐ實胤自胤の兩下知と稱して胤度一家を搦捕らせた。白洲へ一同を引出して胤度反叛の趣を申聞かせ、十五歳になる胤度の嫡子には腹切らせ、妻の稻城と五歳になる幼稚の女兒まで刺殺し、眷族近親まで追放し、監禁し憂悶し

て憤死したものもあれば餘罪に假托けて殺されたのもあつて、粟飯原一家は殆んど根絶やしされた。心あるものは胤度の非運を憫んで、常武の奸姦を憎んだが、胤度は亡び緣連は出奔したので、實胤が隱居して自胤が跡目に直つた後は、常武が出頭第一の權臣となつて思ひのまゝの暴威を振つた。

胤度の侍妾に調布といふのがあつた。胤度遭難の時姙娠してゐたので、常武はこれを殺さうとしたが憐むものが三年產の紐を解かないのだから血塊〻あろと執成し、醫師に證言を立てさせて命乞ひをした。疑深い常武は墮胎の藥を服ましたが、異變がないので漸く赦されて故鄕の相州足柄の犬坂へ歸つた。胤度の眷族で常武の虐殺を免かれたのは只この女一人だけであつて、鄕里へ歸つて幾月か重ねると、矢張り血塊で無かつたと見えて日出度く產の紐を解いた。この噂を聞いた常武は、早速腹心の柚角九念次を足柄へ遣つて容子を探らしたが、子を產んだのは確かでも、その時は最う親子諸侶影を隱してしまつた跡で、常武は手の下しやうが無かつた。梟惡無殘の老怪常武が折々惡夢に魘はれるは、この往方も知らない胤度の落胤であつた。

品七は長物語を語畢つて、馬加殿のこの舊惡は今までは大分知れわたつてますが、誰にも謎であつたのはお家の重寶嵐山の往方、十六七年間も丸きり解らないで忘れてしまつた今頃、旅のお客樣のお手前樣の手で盜人が捕まつて、十何年間も往方の解らなかつた品物が出て來たといふのは矢張り天の

循環で御座らう。亟飯原殿殺害の折、鳶が油揚を攫ふやうに引攫つて行つた男女の曲者が竝四郎船蟲の夫婦で、二人を影で操つた人形遣ひが誰であるかも、石濱へ引かれる途中に待受けて船蟲を引攫つて行つた狼藉者も大抵そこらと見當が附きませうと言つた。

それにつけてもお客樣、馬加殿は舊惡を知られた者や惡事の邪魔になる者を人知れず片附けるのを猫の子一匹殺すほどにも思はない恐ろしい人で、狙渡增松といふ腹心の若黨がウツカリ口を滑らして毒を飼はれた例もありますから、お客樣も御用心なさいましと注意けた。然う聞けばこれまで數度も食事後尋常ならぬ腹痛がして、その度毎に護身の靈玉を口に含みて玉液を啜つて苦痛を鬱した事があつたが、或は毒を飼はれたのではないかと思ひ當つた。

その時夕餐の膳を運んで來た者があつたのを氣附いて品七は口を緘んで早速歸つたが、その翌日も翌々日もそれぎり姿を見せなかつた。何心なく品七の代りに來た掃除番に容子を訊くと、品七はその晩中毒で吐血して暴かに死んでしまつたさうだ。小文吾は恐ろしい〳〵と益々戒慎したが、表面は何喰はぬ平氣な顏を粧つてゐた。

四　舞姫旦開野

馬加大記は品七が、己れの舊惡を小文吾に洩らしたと聞くと直ぐ品七を殺したが、小文吾も亦活かして置くのが安心出來ない氣がした。が、これまでも幾度となく小文吾を人知れず亡い者にしようと毒を盛らしたが、不思議に小文吾が一向平氣でゐるので、妖術でも使ふのでは無い乎と益々恐ろしくなつた。結局手を下すのは容易でないので、手剛けて一味に加へて主家を乘取る豫ての非望の方人としようと心機一轉した。

時も時、女田樂の色子が五六人、鎌倉から石濱の城下へ稼ぎに來た。女好き藝好きの常武は件の女田樂を召寄せて舞はせたり歌はせたりしたが、一團中の花形の旦開野といふが容色も一段勝れ藝にも秀でてゐたので氣に入つて邸へ留置いた。或日、九念次を使者として時服一着を引手物として、久々對面して御意を得たいからと小文吾を請じた。去年の秋から小一年も放たらかして置いて、俄に聘物まで贐らさして招くといふは心得ぬ、尋常事で無い、老狸奴、復た何事か計較みをるナと思つたが、何程の事が計較めやうかと腹の中で見縊つて快よく承知し、早速引出物の紋服に着換へて、九念次に案内され、飛石傳ひに廣庭を過ぎ、長廊の浮橋を渡つて、遙か〳〵奥の流れに臨んだ奥座敷へと通された。

常日頃暴慢不遜の常武が、不思議にこの夕は腰を低くして、入口まで小文吾を迎へ、手を執らぬばかりに賓客席へ押据ゑつゝ、寒暖を述べ安否を尋ねた後、

「いつぞやから一度はユル〳〵御意を得たいと存じたが、何を言ふにも公務が多忙で……」

と、初對面の尊大に反對へた慇懃な調子で、

「且つ、少々言憎いが、何分主君の疑念が晴れないので、主を惡しざまに申すでは無いが、偏狹で疑念が強く、拙者が執成せば執成すほど益々疑心を深めて、拙者までも妙に感違ひするやうな次第……イヤハヤ面目も御座らん。それやこれやの主君を憚る遠慮から、故と管なくして親しくお款待が出來ないやうなわけで、半年も一年近くも押籠同樣にしてお關ひ申さぬは武士に對する道では無いので、拙者も甚だ不本意で御座るが、誠に止むを得ない次第で、ドウカ惡しからず御了簡下され。」と白々しい實意を見せて、

「然るところ拙者の眞情も屆いて漸く主君の許諾を得、今夕は一獻差上げて、幸ひ鎌倉から女田樂が參つてをるゆゑ、女舞をも御覽に入れて些か永らく蟄居の鬱懷をお慰めしたいと思つてナ……」

老狸奴が何を吐くと、小文吾は片腹痛く思つたが去氣ない顏をして、兩刀を手挾むとはいへ何の格式も無い一介の浪人を厚遇する德を稱へてこの夜の饗應を慇ろに感謝した。

そのうちに常武の妻の戸牧、嫡男鞍彌吾、マダ六ツ七ツの季の娘の鈴子をはじめ渡部綱平以下の郎黨までも席に着き、顏好き腰元が順々に運んだ杯盤を處狹きまで列べ、常武は先づ一杯毒試して小文吾に獻した。銀燭耀くばかりに四方を照らす中に、山海の珍味を盛つた器皿の金銀五彩が豪奢の色を漂はしてゐた

やがて興闌はに耳熱した頃、次の間にて支度を整へた女田樂が眩しいやうな粧ひをしてズラリと緣に居並んだ。一番後からしづ〳〵と現れたは、摺箔繡箔した六尺袖の表衣に雜色の下襲をし、幅廣き錦の帶を竪ざまに結んだ二八ばかりの薄たき美人、奇南の薫四邊を拂ひつゝ端然かに席の中央に着座して、先づ常武夫婦に額突いてから小文吾にも復た額突いた。

「季六、季六。」

と主公の指圖に卜部季六、酒の元氣でシヤ〳〵リ出て、滑稽交りの口上に一座を哄と笑はして、逃げるが如くに次の間へ浪くと共に、笛、太鼓、鼓の囃子がヤア、ホイ、エイと天上界を羅出したやうに始まつた。日開野はヤオラ起上つて、

「抑も是は讃岐國、八島壇の浦のほとりなる弓削山の麓に住ひ候 賤婦にて候……峯の白雲、谷の水、源遠く來て見れば、げに玉鋒の三千歳になるてふ桃の林かな。」

と、囃子に伴れて朗々と謠ひつゝ、袖を翻し扇を翳して、鶴の舞ふが如く、燕の飛ぶが如く、序破急の調子に合はす差す手引く手の面白き舞の手振りの鮮かさに、常武夫婦鈴子等は眸を据ゑて瞬きもせず、障子の外に重なり合つて隙見する召使どもも、みな感に打たれて醉へるが如くウットリとした。渡邊綱平、臼井貞九郎等、舞の手振りの解らぬ面々は水の滴たる如き、艶色に看惚れて眼尻を下げた。

やがて舞畢つて舞姫たちは、俄に哄めく歡呼の聲に送られて引退つた。これを機に小文吾も暇乞ひして歸らうとすると、客人、マダ早いと常武は強に引留めて、この新亭はツイこの頃の營造で、隅田の流れに臨んでるので臨江亭、階上からは半島一圓を見晴らすので對牛樓と命名したう丁度月はいゝし夜の眺めは又ひとしほ、自慢では御座らぬが房總でも見晴らす景色を見て下されと先へ立つて案内した。小文吾は辭するに言葉なく、踵から隨いて階上へ行き、雨戸を明拂つた緣側の勾欄へ凭つて牛島から葛飾を眺め、糢糊たる雲煙を距てゝ遠く故郷を眷かしみ、暫らく望郷の思ひに閉ざされて悵然とした。

「客人、などて沈ませ給ふぞ。時に會はざれば聖人も厄に苦む、勇士の一生にも浮沈は免がれない。一年餘りの籠居は嘸や退屈もされたであらうし、又不愉快な日も過されたであらう。なれど窮達は命であるから客人、左のみ屈し給ふ勿。それに就き内密に御意得たい事がある。」

と、常武はヤオラ小文吾を身近く招寄せて聲を潛め、

「實は内密の話ぢやが、千葉の當主自胤は暗愚で一國一城を治める器で無い。例へば御邊如き勇士をも疑うてイツまでも拘留するやうな次第で、家臣は心服せず、民に怨嗟の聲が絶えない。常武不肖であるが衆の擁する處となつて享德の例に倣ひ、自胤に詰腹切らして忤鞍彌吾を赤塚石濱の主人とする一味の謀議既に熟してをるが、未だ適當の軍師を得ないので、窃に智勇拔群の士を物色してをるのぢ

やが、御邊若し一臂の力を貸し給ふならば百萬の兵を得たよりも心強い。事成るの曉は葛飾半郡を割いて些か恩に報はうと存ずるが、犬田氏賢慮如何で御座る。」

と、常武は非望を打明けて、小文吾を惡事の方人に誘はうとした。

古狸奴、到頭本音を吐いたナ、と小文吾は屹と常武の顏を看守りつゝ、以ての外の儀を承はるもの哉と開き直つてキッパリと拒絶けた。常武の佞奸邪智を知る小文吾は、主家横領の隱謀を打明けられたとて今更に驚きもせず、又釋迦が說法したとて善心に立戻る常武で無いのを百も二百も承知してゐるが、剛直一遍の眞心から諄々として君臣の道を說いて聞かせると、

「客人本氣にし給ふ勿。」と常武は呵々と大聲出して笑つた。

「御邊は餘り正直過ぎる。今のは君公に推擧するため御邊を試したので、マジメに受けられては常武迷惑を致す。」と笑ひに紛らしてそれぎりに話頭は轉じてしまつた。

それ以來小文吾は三度の食膳にも愈々注意けてゐたが何事も無くて十日餘りも經つた。六月中旬の月淸き或晩。雨戸を閉さず甲夜からトロ〳〵と假睡んで眼が攪めた途端、障子の外にアッと聲して撞と仆れる音がしたので、刀を取るより早くカタリと障子を開けると、覆面の癖者が刃を持ちながら仰向けに仆れてゐた。月の光に透かして見ると、頸筋のあたりから夥しく血潮が流れてゐる。急ぎ緣から下りて死骸を起して見ると、桃の花の添飾した銀の釵頭が盆の窪から咽喉笛深く貫いてゐた。こ

の釵頭は去ぬる日の酒宴に、心ありてか心無くてか、小文吾の袴の緒に引繋つて落ちてゐたので、見覺えのある舞姫旦開野のであつた。さるにても癖者は何人ぞと、覆面を取つて見れば、常武の四天王の一人卜部季六であつた。常武腹心を打明けて味方と頼まうとしたのが諾かれなかつた以上、亡き者としようとするは豫定の順序で、一度刺客を送つて仕損じたと知るなら、今度は多勢を以て撃捕らうとするは必定である。左も右くも死體を推隠して、常武の爲んやうを見ようと、死骸の裳に庭先の重石を結びつけて泉水深く沈めてしまつた。

斯る所から築墻の外の松ケ枝を猿の如く傳はつて身輕に垣を躍り越えて、小文吾の眼の前へスラリと下立つたものがあつた。小文吾は屹と見ると、先夜の舞姫の旦開野で、

「犬田様、御無事でおはしたか。」と忍び音で聲を掛けた。

「旦開野どのか。」

「旦開野でござります。」とつゝましやかに答へた。

「容子あつて今宵の大事を小耳に入れましたので、忍び姿で季六が垣を乘越す躅を尾けて、女だてらの手裡劍三味、お恥かしうござります。」

「天晴れなる御手練、お庇で危なく不意を打たれところを助かつた御恩は、小文吾永久に忘却しません。」

「何ぞいノウ、そんなに仰有つて下すつては恥かしくて消えてしまひたくなります。」と旦開野はポウッと顔を染めつゝ、

「それは然うと犬田様、イッまでも爰に在らしつては、お身の上が危ふい。ナゼお逃げになりませんの？」

「逃げようとは思へど城門の守りが嚴しいと聞いてるので……」

「それには手段がござります。」と旦開野は聲を潛めて、

「妾は二十日餘り馬加殿に引留められてをりましたので、内外の容子、要害一通りを見究めましたが、この城の出入をするには晝夜の門鑑があります。犬田様、明日の晩はお邸で若檀那の御誕生日のお祝ひがありますから、その混雜紛れに門鑑を手に入れて上げますほどに、ネエ犬田様、その時は妾をもお伴れ下さいまし。」と情を含んだ流眄に物を言はせつ、

「いろ〳〵お話仕たい事もありますが、このお邸では人目の關の憚りがありますから、何かの話は明日の晩、ネエ犬田様、萬事は妾がイ、鹽梅に作略しますから、アナタ様もお支度なすつてお待ち下され。」

と明夜の約束を固く番へて、旦開野は身も輕々と築墻を躍越えて姿を消してしまつた。

五　對牛樓の復讎

その翌る日は五月十五日、嫡子鞍彌吾の誕生日で、毎年客を招いて祝ひをするのを吉例としてゐた。その前夜、常武は小文吾を密かに刺させにやつた季六が歸つて來ないので、翌る朝、内々容子を探らせたところが、季六の死骸は見えぬが泉水いつになく赤くして、池の畔の草の葉に血が流れてゐるといふので、扨ては小文吾に返り討されて、死骸は泉水に沈められたのであらうと氣が付いた。今に初めぬ小文吾の武勇に益々舌を卷いて、この上は自亂の前は何とでも名をつけて多勢を以て討取る外は無いと決心したが、この日は吉例の祝日なので、今日を濟まして愈々明日は小文吾を討取らうとした。

小文吾は、また旦開野と約束を番へたものゝ、旦開野が如何に智慧才覺に敏くても、武藝の早業に長けてゐても、また如何に客來で混雜してゐても、大切の城門の門鑑をヤワカ竊まれるやうな油斷はあるまい。若し仕損じたら可惜烈女を殺すやうなもの、由なき約束をしたもの哉と一日安き心が無かつた。

そのうちに日は暮れて母屋はザンザめいてゐた。笛太鼓の響が一しきり賑はつたが、夏の夜の更け易くして早や酒宴も果てたらしく、靜まり返つて夜は段々と更けて行つた。小文吾は旦開野の約束を

心許なく思つたが、兎もあれイツでも脱出られるやう身支度しようと、行包を拵へ脚半甲掛して草鞋を着け太刀引提げて緣側に腰を掛けてゐた。

暫らくすると母屋の方に當りて人の叫ぶ聲、足踏み鳴らす音騷がしく、尋常事ならず思はれた。扨ては旦開野が仕損じて捕へられた乎、但しは家の子が喧嘩でもし始めた乎、若し旦開野なら母屋へ踏込んで助けたいが、兄弟の四犬士から預けられた曳手單節を見喪ひ、姥雪夫婦の先途をさへ見屆けない大切の身の上、滅多に生命を粗末には出來ぬと思ひ留まりながらも、心でトツオイツして耳引立てた。そのうちにこの騷ぎも一しきりで物音も靜まつたので、漸く心も沈着いて猶も四邊に氣を配つてゐると、忽ち松を傳つてヒラリと垣を躍超えたものがあつた。

「旦開野どのか。」

と小文吾は胸打騷ぎつゝ問ふ遑もなく、飛鳥の如く駈寄つたのは、右手には明晃々たる刃を持つて滿身鮮血に染みた旦開野で、

「犬田氏、約束の門鑑を持つて來た。」とパタンと緣に投出したのは馬加大記の腥々しい白髮首であつた。有繋の小文吾も、ヒタと呆れて暫らく言葉なく、旦開野の顏を眤と凝視めた。

「犬田氏、それがし實は女で御座らぬ。」と、姿貌は昨日と變らぬ嬋娟さであるが、聲の調子は雄々しく力强く變つてゐた。

「それがしは往年馬加大記に讒言され籠山逸東太縁連に欺し討された千葉の長臣粟飯原首胤度の遺子犬坂毛野胤智で御座る。」

「何粟飯原殿の――足柄の犬坂で生れたといふ……」

と小文吾はツイ先頃品七から聞いたばかりの馬加大記の舊悪を憶出した。

「犬田殿は父の横死を御存じか。そんなら素性を包むに及ばんので、それがしこそは粟飯原首の遺腹の子、毛野と名乗つて女と披露したのは、馬加の毒手の伸びるのを恐れたからで、鎌倉へ逃げて女田樂の群に入つたのも、旦開野の藝名に身を晦ましたので御座る。二年前母が歿した終焉の際に、初めての横死の顚末を聞かされ、下手人の籠山逸東太はそれぎり姿を隱したが、張本の馬加大記は悪運強く武州石濱に時めいてると知つて、直ぐにも飛んでつて一太刀報はうと逸つたが、何しろ先方は一城の老臣、數多の軍兵で固めてる中へ何一つ武藝の心得の無い女田樂風情が切込むのは、素肌で猛火へ飛込むも同樣、犬死するのは知れてるので、無念に逸るを凝つと堪へて、それからは田樂舞で糊口する傍ら、人知れず武術拳法を一心不亂に勵んだ甲斐あつて、師にも就かざるに、武藝一通りの極意を得、マダ尋常では一城の權臣を向うへ廻して何人加勢があるか解らぬ大敵と、單身渡り合ふ事は覺束ないが、奇計を用ひて不意討すれば必ずしも本望達しられない事はあるまいと、容子を探りに女田樂の一座を組織つて當城下へ參つたのが二十餘り前。天なる哉、馬加は己れの首を覘はれるとも知らず

に、それがし一座を城中に招き、剩つさへそれがしを女藝人と油斷して邸内へ引留め置いたので、勿怪の倖ひと夜更けてから窃かに家を忍び出て、内外の要害から一味郎黨の人數手配まで思ふ存分に究めて機會を待つてゐたので御座る。犬田殿、貴殿が罪無くして邸内に監禁されてるをも薄々承知し、先夜の酒宴に貴殿の人物は尋常ならぬを知つて、それがし復讐の折は貴殿を道伴に當城を脫出しようと豫ての心組でをつたところ、今晩の客振舞、この機を外してはと、昨晩それとなく貴殿に仄かした次第。宵のうちから杯盤に侍して舞の一手に酒興を助けつゝも、腹の中では油斷なく今宵の足場手掛を工風して、一同泥の如く醉つて居汚なく倒れるを待ち、寂靜まつてから不意を襲つて馬加大記を初め全家を鏖殺にして、唯今本望を遂げたので御座る。」

と言葉短く復讐の顚末を搔摘んで話した。

毛野の手練は、垣越しに簪を飛ばして、篦深に季六の頸首を貫いた昨夜の早業で、舌を卷いてゐた。が、馬加大記も不敵の古强者、打物取つても鍛へた腕を持つてゐる。渡邊綱平以下の郎黨も、武藝で取立てられた一廉の腕利揃ひ。如何に熟睡を襲はれたにしろ、僅か小半晌に十五か十六の少年に主從十數人が鏖殺にされるといふは誠に前代未聞と、有繋の小文吾も茫然として暫らくは飽氣に取られた。

「犬坂どの、お怪我は御座らぬか。」と、暫らくして小文吾は訊いた。

「御覽の通り滿身血汐を浴びたが、微傷一つだも負ひません。」と毛野は悠然と沈着濟まして、眉の毛一本動かさなかつた。

「目指す敵の張本人馬加大記の枕を蹴返して名乘を擧げつゝ、枕刀を拔かうと起上つて柄に手を掛けたところを躍蒐つて一刀に首を刎ねて血祭とし、返す刀で起上らうとする鞍彌吾の首を擊落し、妻子眷族を片端から斫り伏せ〳〵、幼い季の娘の首まで刎ねたのは些か不便に思つたが、六歳の姉を無殘に殘殺された復讐としては是非も御座るまい。父の横死の加勢をしたものでもない家の子郎黨に、傍杖喰はずは無益の殺生と思つたが、騷がれては面倒だし、ドウセ馬加の惡事に荷擔した一つ穴の鼠賊であるから、一人殘らず刃の錆にして天罰を思ひ知らしてくれようと、樓上樓下の鮪の如く睡轉けて る面々を、一々枕を蹴つて呼醒ましては斬つて棄て、全家を屠つて再び樓上へ取つて返し、仇の血汐で爲二父兄一鑒レ仇云々と五十餘文字を壁へ書殘して參つた……」

「犬田殿、」と毛野は言葉を更めて、

「お話したい事はマダ山程あるが、ウカ〳〵時を過して、城兵どもに騷がれては一大事であるから、一先爰を立退きませう、率ざ來ませ。」

と先へ立つて小庭の垣を躍越え、小文吾を嚮導して豫て見定め置いた木立深き搦手の土手へ來ると用意の鉤索を前面の水際の柳を目掛けて投げ渡し、身も輕々とスラ〳〵と渡つて、大兵の小文吾が渡

り艱むを見ると、取つて返して肩に脊負ひ、田樂舞の手練の輕業で、何の苦も無く渡り越してから直ちに索を斫つて棄てた。

これから先、陸を走るは追手の危險があるから川を渡つて落延びようと、二人はイキセキ宙を飛んで墨田河原まで來た。が、來は來たが、降續きたる五月雨に水嵩は增し浪は高く、四邊を見廻すに渡し舟は無く、城内からは追手を掛ける太鼓の音が蓼々として聞えて來たので、水際に佇立みて二人は進退に窮した。折から千住の方から柴船が下つて來たのは天の祐と二人はオーイ〳〵と聲を掛けて呼戻さうとしたが船頭は首を掉つて見向きもせず、振返つては嘲み笑ふ小面憎さに、毛野は勃然と怒り、水際を傳つて駈出したが、ヤッと聲掛け飛上ると一段ばかり距たつた小舟の中へ躍込んだ。驚き周章て、船頭は櫂を振上げ立向ふのを物々しやと蹴倒して足下に踏んまへ、漕戻さうと艪を推せど、矢よりも早き出水の勢に艪は效かないで次第に遠く離れてしまつた。

水には經驗ある小文吾、兩刀帶びたるまゝ、雙肌脫いでザンブと飛込み、拔手を切つて泳ぎ着かうとしたが、流れは早く浪は高く、進退自由を缺いて、距離は益々遠ざかつた。かゝるところへ千住の方から大平駄が漕いで來たので、これ幸ひと、小文吾は素早く舷へ手を掛けて乘移ると舟子どもは驚き騷いで、この泥棒奴がと、積荷を盜みに來たものと間違へて打つて掛つた。勢ひ據なく、小文吾は堰倒し撲倒して、ドタンバタンしてゐる音を聞きつけ、何事ぞと駈付けた舟長は小文吾を見ると

喫驚、

「ヤイ〳〵野郎ども、古那屋の若檀那だ、無禮をする勿。」と呼はつた。

古那屋の若檀那の一言に船頭どもは縮み上つてソコ〳〵に引退つたが、誰あらうこの舟長は、犬塚犬飼小文吾の三犬士を大塚へ送つた犬江屋の若い者の依助であつた。今は妙眞の姪を娶つて、犬江屋を相續した舟主で、千住へ乾鰯を送つて、代りの荷物を積んで歸る戻路であつた。絶えて久しい意外の邂逅に是は〳〵とばかり互ひに言葉も出なかつたが、何は兎もあれ今柴船で下つたのは一年越しの災難を助けてくれた恩人だから、その柴船を追蒐けてくれと依助に頼んで、小文吾も一緒になつて艪を押して、汗を流して追蒐けたが、流れは急だし舟は輕いので舟脚疾く柴船は影も形も見えなくなつた。

仕方が無しに小文吾は、毛野を追ふのを斷念し、依助の舟に乘せられて、一先犬江屋に落着いた。依助の妻の水澪にも會ひ、夫婦して管待してくれる眞情に久し振で寛座いで、石濱に拘禁された顚末から毛野に助けられて脫出して來た事まで話して、依助からは別れて後の市川の事、行德の事を聞きもしねもした。親兵衛が神隱しに會つた事、文五兵衛と妙眞とは蜑崎照文に伴れられて安房へ行き、里見殿から厚く扶持された事、文五兵衛は一度行德へ戻つて古那屋の株を人に讓つて跡始末をして再び安房へ歸つたが、この春老病で安らかに眠つた事、古那屋の株を讓つた金は小文吾へ渡してく

れと頼まれて依助が預つてゐる事、それや是やを次々に逐一物語つた。僅か一年かソコラだが人事の定なき有爲天變に驚きもし歎きもした。が、古那屋が代變りした以上は行德へ行く氣にもならず、里見殿へ御禮を申し妙眞に會ひたくても、他の兄弟に先んじ一安房へ行くのは出世を急ぐやうで後目痛いので、小文吾は暫らく市川に留つて文五兵衛を初め房八お沼蘭の佛事供養を營んでから、再び曳手單節の行方や、殘る犬士を搜しに旅の空へ立つた。

第六　庚申山の巻

一　赤岩一角

對牛楼の復讐のあつたその翌る年の文明十二年、木々の梢も徐々色づく秋の末、野州網苧の里端れの鵤平茶屋に休んだ旅の武家があつた。これなん犬飼現八信道で、荒芽山を落ちてから信濃路を過ぎ大迂回して行徳へ戻り市川を尋ね、留守居の管師と聾婆さんから、老人が安房へ行き幼兒が神隱しに會つた話を聞いて後、我より先に故郷を指して荒芽山を立退いた小文吾がマダ戻らぬを訝りつゝも再び岐蘇路を過ぎて京へ上り、暫らく滯京して武藝拳法の師範をしたが、一年餘りで道場を閉ぢ、道々犬士の行方を尋ねつゝも中仙道を下つて上野へ出で、荒芽山の跡を訪うて當時の遭難を偲び、野州へ入つて二日路の旅を暮して、今日爰の網苧の里へ來たのである。

只見ると、軒端につるした草鞋に交つて、一挺の鳥銃と半弓が六七張壁に掛けてあるので、茶屋の親仁が汲んで出す澁茶を啜りつゝ現八は、

「親仁汝の店では、弓や鐵砲や妙なものを賣つてるナ。」

「お武家様。」と親仁は恐怖の色を浮べて、

「爰から五六里、庚申山までは人家がマバラで白晝でも物騷で御座ります。それに妖怪變化が出ますさうで、度々人が殺されますので、これから先は晝間でも道案内をお備ひになるか、半弓をお持ちになるかなさらないと劍呑でござります。案内者には鐵砲を持たせ、丸と藥と火索の代まで入れて三百文を頂戴します。半弓も同じお鳥目で、ドチラでもお好みで御座ります　日ざしが徐々傾いてゐますから、山までお着きにならない中に陰りませう。これから先には宿屋が御座りませぬから、爰で宿をお取りになるのが無事でござりますが、親仁何を言ふかとお思召すなら、道案内をお備ひになるか半弓をお持ちになるか、ドチラかお勸め致します。」

「イヤ、有難う。」と現八は微笑して、

「だが親仁、俺は一年中旅をして人跡絶えた深山や妖怪が出るといふ噂の魔所に野宿したこともあるが、マダ一度も妖怪に遭逢はした事が無い。追剝や猛獸は出る處も有らうが、妖怪が出るッてのはミンナ拵へ事だ。」

「お武家様、然う仰有いますが。」と茶店の親仁の鵤平は眞顏になつて聲を潛まし、

「爰のは眞實でございますよ。」

「親仁中々咄が上手だナ。」と現八は呵々と笑つて、

「ドンナ妖怪が出る？」

「それが山猫だとか、狒々の化けたのだとか、色々申しますが。」と鴨平は愈々眞顏になつて、
「お武家様、恁ういふ咄が御座います――」
と語つたのは、この里近い赤岩村に住む鄕士赤岩一角武遠が、今から十何年前に、庚申山に一夜を徹した武勇談であつた。
赤岩一角といふは、名だたる武藝の達人で、多くの門生をも養つてゐたが、或時門人を集めて曰く、この庚申山といふは神代から聞ゆる靈山であるが、何百年來人跡途絶えて奥山を踏分けた者が無い。武遠この山の麓に住つて、マダ登つた事が無いといふは、武藝者としての恥辱であるから、翌日は登山して奥の院まで見極めようと思ふが、同行志願のなき乎と、一座を見廻すに一同は呆氣に取られて顏を見合した。
暫らくして一同は恐る〳〵、先生の武勇を以て爾か思立ち給ふは道理であるが、山路の險しきは左も右くも、かの山中には數百年を經たる怪猫あつて、神通自在變化測るべからず、偶々山路に迷ふものあれば直ちに引裂き啖ふと古老の傳說、縱令虛傳にせよ、君子危きに近寄るべからずと申せば、この儀は思留り給へと苦諫した。一角は大聲出して呵々と打笑ひ、各々方は何のために武を習はッしやる。然ういふ變化妖怪を退治る時にこそ、平生の武藝が役に立つ。各々方猫を恐れて尻込さッしやるなら、武遠は各々方の力を借りない。單身登山して怪猫に出會つたなら、一刀に仕留めて土地の禍害

を絶つて呉れようと、留めれば留めるほど、武勇に慢じて諾入れなかつた。門生らは皆由なき剛情を持てあぐんだが、その中に印可の高弟三四名は師の廣言に釣られて、如何にも師の仰せられる通り、武藝者が噂に恐れて尻込したと言はれては勇士の面目が立たない。それがしら御伴仕つて、若し變化が出たら平生の手練を現はして天晴お褒めに預からうと、力味返るに一角は機嫌よく、それでこそ武藝者である。臆病者は留守をせよと、その晩登山の支度をして、翌る日は朝まだきに高弟四人を隨へて、野裝束に身を固め、各々弓箭を携へて、割籠を從者に呑負はしつゝ、庚申山へと分入つた。
何百年來、人跡途絶えてる魔所である。殊にこの頃は益々恐れられて近づく者も無いので、登山口から茨や雜草に閉ぢられて定かに解らぬ難路である。淅く荆棘を分け、木根岩角の盤錯した隘路を辿つて、音に聞えた胎内竇を潛ると道は次第に險しくなる。魔界の門衛の如く左右に聳立する見上げるばかりの二王石を打仰ぎつゝ、胸突何丁と言ひさうな急坂を攀躋ると復下り坂となり、數丁行つて逆落しのやうな急勾配を轉がるやうに滑り落ちると著名の第一の石橋がある。この石橋を渡つて暫らくすると脚下に轟たる響を聞く瀧の上の岨路で、一方は巉巖、一方は絶壁の危い道を縫つて驀て第一の石門に達した。全山皆巖石で、造化自然の神工に成る怪巖奇石の林立する中を右顧左眄して絶景を嘆賞しつゝ足休めをしては又十數丁、第二の石門を過きて復た數度、或は絶壁を這ひ或は懸崖を攀ぢて感嘆したり冷汗を流したりして行くほどに、全山第一の危勝と聞えた長さ七丈に勝る大石橋へ出

た。爰までは時偶は柚の通ふものもあるが、これから先は魔物の棲窟と聞えた橋を渡るものは無かつた。さらぬだに中間に雲煙が漂うて、遙かの下から石に激する水聲を聞く底の知れない谷を俯瞰しては、足が竦み目が眩んで一歩も踏出せなかつた。

「先生モウお引返しになりませんか。」と門生どもは足を駐めて再ぶ忠言した。

「日脚も徐々西に傾いて來ましたし、爰までお登りになれば先生の武勇をお示しになるには十分、これから先の景色も大抵似たやうなもので御座らうから……」

「何と言はッしやる？」と一角はやゝ氣色ばんで、

「景色を見に來たばかりぢや御座らん。こゝで引返す位なら初から登らんが勝しぢや、各々方のやうな臆病者に隨いて來て貰はんでもいゝ。身共一人で奥の院を極めて參るから、各々方は爰で待たッしやい。」

と言棄てるや否、見たばかりでも魂動く危い石橋を少しも遲疑なく、平地の如くに弓を杖突いてスラ〳〵と渡つた。

「先生、先生。」

と門人達は大きな聲して呼留めたが顧眄きもせず足早に忽ち道を曲つてしまつたので、惘然として二響あまり橋の畔に待つてゐた。が、イツまで經つても一角は戻つて來ないので、師の身の上が段々

と案じられて來たが、さりとて橋を渡つて師の往方を尋ねようとする勇氣のあるものは一人も無かつた。その中に日は徐々と沈み掛つて薄ら寒くなつたので、俄に歸り風が立ち、若し日が暮れて一人も生きて歸られなくなつたら一大事と恐ろしくなり、少とも早く下山して事の顚末を内室に告げ、急ぎ人數を狩集めて再び搜索に來る外はあるまいと、評議が一決するとモウ片時も居堪まれないで逃げるが如くに下山した。

留守宅では妻の窓井をはじめ門生どもが一角の歸りの遲いのを案じてゐる折から、トツプリ日が暮れてから隨行の門生たちが慌忙しく歸つて來て、委細を話して聞かせたので青くなつた。先生ほどの武藝者が、妖怪變化に出會はうとも怪我にも命を奪られ給ふ筈は無いから、夜道に迷つて岩陰にでも休らひ給ふに相違なく、明日は必ず歸り來まして妖怪咄に興じ給ふならんと、互ひに元氣を附け合つても、窓井は勿論、門生達も沈みがちで、爰に三人彼處に四人と圍爍を作つて評議を凝らし、戸外の物音に耳を澄ましては何度となく周章てゝ門を出たり入つたりするうちに、イツしか夜は明けてしまつた。

その日は拂曉から俄に里人を狩集めて五六十人の隊伍を作つた。各々弓箭、鐵砲、竹槍と思ひ〳〵の得物を準備して一角の隨伴をした門生を先頭に繰出した。内心は恐かな慄くりでも衆を恃んで空元氣に噪いで化猫であれ何であれ飛出したら一攫みに手捕にするやうな勢ひだつたが、未の刻を過ぐる

頃魔境の第一線の石橋まで來ると俄に寒毛立つて皆逡巡ぎ、各自が逃腰で先頭の讓り合ひをし、橋の袂に屯して互ひにガヤ〳〵言罵つてばかりゐた。斯くては無益の時を消すばかりで果しが無いから、一先づ今日は切上げて明日改めて人數を增し、今度こそは橋を渡つて奥の院まで突留め、草を分けても搜す事にした。評議が斯うと決ると各自我先に下山の足の運びも輕く、飛ぶが如くに忽ちに胎内竇まで下りると、背後の方からオウイ〳〵と呼ぶ聲がした。顧眄つて見るに赤岩一角なので、これはとばかり一同は喜び勇んで周圍を取卷き、代る〴〵に無事を祝して昨夜からの心配や村の騷ぎを一通り陳べ立てた。

一角は微笑を含みつゝ、一々點頭いて、村の衆まで騷がして御苦勞ぢやつたと犒つた。昨日は橋を渡つてから奥の院まで殘る隈なく見物したが、餘りの絶景に時の移るを忘れてイツしか暮れてしまひ、暗黑の山路に足滑らして深い谷へ落ちた。幸ひ怪我もしなかつたが、鼻を摘まれても解らぬ暗闇の谷間では一歩も踏出せないので詮術無くて露宿した。が、落着いて眠られゝばこそ、終夜マンヂリともしないで、白々明けから谷間を縫うて、漸く熊笹を分け蔦葛に摑まつて絶壁を這上つて、岨路へ出るには出たが、方角は解らず、道らしい道も無いので、盲滅法に下へ〳〵と終日歩き通して、ドウヤラ本道らしい道へ出ると、ワヤ〳〵人聲が聞えたので、思はず蘇生つた心地がした。武術にはヒケを取らぬ身共ぢやが、案内知らぬ山道に踏迷つては劍術も兵法も役に立たぬワイと、カラ〳〵と笑つて、

イヤモウ懲り〳〵した。二度と再び來る處ぢや御座らん。各々方も身共に懲りて案内知らぬ深山には決して〳〵登らッしやる勿と、武術鍛錬の武家とは言ひながら疲勞の色もなく、少しも常と變らなかつた。

「この事は最う十七八年も前の咄で御座るが。」

と鴨平は二昔前の物語を昨日の出來事のやうに委しく話して、

「赤岩先生のやうな武藝の達人でも、一晩山路に迷はしやつた。そのためかドウか解りましねエが、それから後の先生の容子が少し變らしやつた。太う氣が荒々しくなつて無暗とお弟子たちを叱つたり誰彼の見界なく矢鱈と無理な叱言を言はつしやるさうだ……」

と總領の角太郎に酷く當つて到頭躰よく家を追出してしまつた顚末を話した。一角の今の妻は三度目である。初めのは正香と呼ばれた評判の賢女で、總領の角太郎の生みの母であつた。庚申山へ登つた頃の妻は二度目の窓井で、美人の噂が隱れも無かつた。その時は二十二歳でその翌月から姙娠つて翌年產んだのが次男の牙二郎であつた。繼母の繼子いびりといふのは世にある例だが、窓井は牙二郎が生れても角太郎を少しも分隔てしなかつたに拘らず、父の一角は牙二郎が生れると俄に角太郎を疎み初した。間もなく窓井が急死してからは愈々邪魔物扱ひにして邪見に當るのを見兼ねて、角太郎の實母の實家——角太郎には伯父に當る、犬村儀清が將末一人娘に妻合はして相續人とする約束で引取

つた。その時、未だ三つか四つの娘が妙齢となつたので、祝言させたのが一昨年、今では犬村角太郎禮儀と名乘つてゐる。間もなく儀清夫婦は續いて病氣づいて若夫婦の慇ろな看護を受けて安心して死んだ。

一角は二度目の妻の窓井に別れてから度々妾を抱へたが、ドウいふわけか尻が据らないで直ぐ暇を貰つたり逃出したりするものばかりだつたか・二三年前武藏の國から流れて來た船蟲といふ莫蓮が氣に入つて正妻に直した。一角の今の妻といふはこの船蟲である。親孝行の角太郎は犬村家へ養子に行つても、實の親の一角に孝道を缺かないで時折は御機嫌伺ひに行つた。妾上りの船蟲をも肉身の親のやうに尊敬してゐる。ところが角太郎の養父母が死ぬと、腹黑の船蟲は犬村の少からざる遺產に目星をつけて、俄に角太郎夫婦をチヤホヤし初し、一角をも慾で說きつけて犬村の家を曇ませて角太郎夫婦を同居さした。腹に一物の一角夫婦は當座のうちこそチヤホヤしたが、段々と爪を磨ぎ出してジリジリと角太郎夫婦をイビリ出した。擧句が角太郎の妻の雛衣が身重になつたのを、密夫の胤であると濡衣着せて角太郎に去狀書かして緣を切らした。それだけでは猶飽足らないで角太郎にも難癖つけて勘當した。孝順の角太郎は一言も爭はないで、今では犬村と赤岩の間の返壁の里に庵を結んで單身で世棄人のやうに暮してゐる。里人は皆角太郎夫婦を氣の毒がつた。一角夫婦の非道を憎まないものは無いが、

「赤岩先生はソンナ人情の無ェ解られェ人ぢやござらつしやらなかつたが、庚申山以來全で人間が變つてしまはれやした。」

と鴉平は長物語を語畢つて合點の行かない顏をした。

二　現八一角の亡靈に逢ふ

鴉平の咄に現八は興を催ほして、マダ見ぬ人ながら角太郎の身の上に同情した。變化は恐ろしく無くても大事を抱へた身の好んで危險を冒すでも無いが、この山懷を過ぎる豫ての旅程を變へる氣にもなれないので、鴉平の言ふまゝに手頃の半弓に獵箭二條を買求めて出掛けた。さらぬだに日影の徐徐傾きかけた哺時近くであつた上に、秋の日脚の短かくて、神子內村を過ぐるとトップリと日は暮れた。道不案內に加へて夜道となつたので、行けども〳〵目指す麓村へは出ないで、段々險しい爪先上りとなつた。要なき半弓よりは松明を準備した方が宜かつたと悔み、若しかしたら山路に迷ひ込んだのでは無いかと氣が付いた時は、鴉平から聞いた胎內竇らしい石門へ來た。ドウして紛れ込んだものか知らぬが、これから先は益々難路であらうし、麓村へ引返すのも最早容易で無いから、今宵はこの岩陰に露宿して日の出を待つて、山越えするなり麓村へ引返すなり進退を決する外は有るまいと岩に凭れて思案した。

が、夜寒は太と〻身に浸みて、假睡まうとしても假睡めなかつた。暫らくは別れた友の事、姥雪夫婦の事、曳手單節の事など、思出るまゝに考へつゝウツラ〳〵としてゐると、東の方から螢火ほどの光が兩三點閃々と見えたのが近づくまゝに段々大きくなるので、現八は怪んで凝と眼を据ゑて瞰視めてゐると、件の怪火は益々大きくなつて、果は松明の如く四邊を照らして異形の怪物が山を下つて來るらしかつた。

要こそあれと現八は半弓拿つて胎内竇を出で、傍の木にスル〳〵と登つて枝を盾に瞬きもせず容子を窺つてゐると、こは如何に、怪火と見たのは得知れぬ怪物の爛々たる兩眼であつた。面は怒れる虎よりも恐ろしく、口は耳まで裂けて水瓜の切口よりも赤く、銀の針を植ゑたやうな數千根の髯が口の周圍に逆立つてゐた。羽織野袴に兩刀を跨し、栗毛の駒に跨がつてゐたが、その馬らしく見えたのが節くれ立つた枯木で、處々に苔が生えてゐた。左右に隨ふは、一人は藍より青く、一人は代赭色をして諸天の如き奇怪な顏をしてゐた。鵰平が語つた變化といふは正しくこれなんめりと、木の股高く窺つてゐた現八は點頭きつゝ、急ぎ矢を番へて鞍上の怪物の眼を覘つてフッと放した。アッと叫んで落つると共に馬と見えたる枯木は散亂し、左右の妖魔は周章て〻落馬した怪物を引擔いで泡を喰つて逃出した。

首尾能く覘ひ誤たず一箭に一眼を射貫いたが、眼を傷けただけでは生命に觸らない。且つ百姓の手

作りの案山子の持つやうな弓と矢では、爲朝ほどの弓勢でも、あの老妖怪を一箭で仕留める事は出來ない。不意を喰ひつゝ周章てて逃出しても、忽ち元氣を盛返して眷族同類を狩催ほして押寄來るは必定。暫らく場所を轉じて渠等の爲んやうを見るに如くは無いと、胎内竇を拔出て澤傳ひに道を辿つて行つた。折から妖怪變化を退治た奇特にや、烏干玉の闇は晴れ、滿天の星は闌干として往方を照らすに力を得、鵰平から聞いた地理を賴りに第一の石橋を渡り、第一第二の石門を過ぎて魔境の第一線の大石橋へ出た。拳法捕物に妙を得て、險岨を涉る平地を行くが如き現八は、長さ七丈の大巖石橋をも何の苦もなくスラ〳〵と渡つて魔境の中心に突入し、怪岩奇石の間を縫つて行くと突當りの正面に奇怪の洞窟があつた。

只見ると、洞内に火を焚く怪しい者がある。人跡途絶えた深山の丑滿過ぎに人のをるべき筈は無いから、正しく變化の眷族であらうと、殘る一箭を弓に番へて屹と睨んだ。

「勇士早まり給ふ勿、御邊の來るを待つてゐた。」と、件の怪人は淋しい微笑を泛べつゝ、現八を見た。

「何者だ、汝は？

「身共はこの世の人間では御座らぬ。」と掠れたやうな皺枯聲で、

「身共は最前御邊が出會つた怪物に殺された者で、御邊が彼奴の眼を射貫いてくれた禮を述べ旁々、御邊の俠氣を見しお賴みしたい事があるので、假に姿を現はしたのぢや。」

「何者だ、汝は？」
「何を祕さう、身共はこの山の麓の赤岩村の郷士赤岩一角と申すもので御座る。最前の怪物のため非命に殺された怨みが殘つて、マダ浮ばれないで迷うてをるのぢや。勇士を見掛けての、賴み事長くも一通り聞いて下され……」
と鴅平が長物語の後談を咄した。現八が胎内竇で邂逅つて一眼を射貫いた怪物は、何百年來庚申山を棲窟とする野猫の化けたので、神通自在、山神や十隍神をさへ奴隷の如くに使役してをる。況して や木精・䑛、貂を初め全山の老獣猛獣は皆阿つて頤使されてをる。今宵渠が乘つてゐたのは木精で、左右に隨つてゐたのは山神と十隍神であつた。十七年前一角が石橋を渡つて奥の院まで登つた時、この洞窟から飛出した渠は、躍蒐つて吭に啖ひつき、唯一振で嚙殺してしまつた。豫てから一角の妻の窓井に懸想してゐたので、一角の衣類行縢までも褫ぎて身に纏ひ、神通自在の魔術で顔から聲音までも一角に化畢し、窓井を欺いて子まで産ました。窓井が幾何もなく死んでからは數多の妾を取換へ引換へした。非類の慾情の殘虐に堪へられないで、逃出すものもあれば飽かれて啖殺されるものもあつた。今の妻の船蟲は淫婦であり毒婦であるのが、同氣相求めて猫一角の氣に入つて、妾であつたを正妻に直した。不便なは角太郎、化猫とも知らずに孝を盡し、惡婆と知つても親と立てゝをる。剩つさへ嫁雛衣に無二名を負はせて、飽きも飽かれもせぬ夫婦仲を割き、角太郎は今妻とも別れ家をも追

はれて唯一人返壁に淋しく暮してをる。
「御邊にお賴みするは餘の儀で御座らぬ、角太郎をお尋ね下され、この短刀を證據に。」
と、鍔は錆び柄絲は朽ちた古墳の殘劍に等しい短刀を渡し、
「これなるは身共が片時も離さぬ護身の短刀で、その折猫を突刺さうとして誤つて地に落したのを、化猫めが氣附かず取忘れたもの、これを證據に身共の亡靈に逢つて聞いたと遭難の顚末をお話しあつて、この短刀で復讐して身共の妄執を晴らして呉れとお傳へ下さい。若し又角太郎が幼少の折で、この短刀に見覺えが無くて御邊の言葉を疑ふならば、その時は、」と亡靈は髑髏を取出して、
「これなる身共の髑髏をお示し下さい、角太郎の鮮血を沃げば忽ち凝りつくのが爭はれない親子の證據、角太郎も必ず疑ひを晴らすで御座らう。」
と言ひつゝ下山の間道から返壁の角太郎の庵室への道筋を巨細に敎へて、「勇士、去らば！」と搔消す如くに消失せてしまつた。

三　返壁の里

曉方現八は下山した。一角の亡靈が敎へた麓の澤を傳うて躋降すること彼是四五里、午時近く返壁の里へ來た。不斗何心なく只ある草の庵の柴垣から隙見すると、緣端近く經机に向つて合掌觀念する一

十餘り一つ二つを越えた有髪の行者があつた。これぞ正しく一角の遺子の角太郎の浮世を遁れた庵室と見て、折戸を叩いて聲高く案内を乞うた。聞えぬ筈は無いのに、何度聲を掛けても應答が無く、端然と目を閉ぢたまま身じろぎさへもしなかつた。扨ては勤行の半ばと推して、暫らく待つツモリで折戸を離れた樹蔭に佇立んでゐると、前面の方から來た鄙には稀な美くしい若女房、野の花の風情があるといふよりは都の上臈にも珍らしい氣品の備はる嬝娜さにて、憂に惱む歩武のタド〳〵として折戸に立ち、眞白き手にて力なく戸を叩きつゝ、

「角太樣・角太樣、コ、開けて、コ、開けて……」

と四邊憚る低音で呼んだ。

「角太樣、角太樣、開けてたべ、開けてたべ！」

と、何度呼んでも内からは何の應答も無いので身を悶え、垣の隙から覗いて見ては力を籠めて復たホト〳〵と叩きつゝ、

「角太樣・角太樣！」と繰返して呼んだ。

「あんまりだ、胴慾だ、角太樣、角太樣、女房の妾の聲が聞えぬ事もあるまいに、アンマリだ、胴慾だ。御修行も大切だせうが、纖弱い女が聲を限りに呼ぶのが聞えぬ振して看殺しにするのが御修業になりますか、角太樣、角太樣、お暇乞ひに參じました。」

とツイ鼻の頭の樹蔭に現八が聽いてゐるとも知らないで、女心の緊張めた一心に較や聲高く、

「角太樣、妾はこれから遠い〳〵旅へ行く長のお別れに來ましたっ會つて下さらぬなら御修行の御邪魔をしようとは思ひませぬが、未練なやうでも一通りは聞いて下さいまし……」

と、筒井筒振分髪の昔から親の許した從兄妹同士で、互に心を知り拔いた影も日向も無い間である、繼しい母御の誣言から何の證據も無い事を仔細も糺さで去狀附けるは曲が無いと恨み、自分は兎もあれ貴郎のためには伯父なり師なりの恩誼の厚い妾の父御に對し、それでは貴郎の義理が立ちますまいと詰り、それも赤岩の家におはすなら親御樣への義理もあらうが、貴郎も今は勘當の憚る者もあるまいに、もとの古巢の犬村家へは戻らずに、一人住みしておはすのは誰への遠慮氣兼でござんす、心強いにも程がある。尼になつても共棲せよとは、ナゼ仰有つて下さりませぬ。切めては時折の問ひおとづれぐらゐ許して下されても宜さそうなものを、きのふもけふも音づれしても、折戸を鎖して唯一言の返事をだにもして下さらぬのはアンマリだ。胴慾だと涙片手に訴へて、所詮生きて甲斐の無い身、死んで陳謝致しますが、切めては死んだ後、妻と思うて一遍の唱名回向をして給はれと、折戸に凭れ泣頽折れて割口說いた。

「角太樣、角太樣、それではお暇乞ひ致します。この世の緣は薄くても、百年後の次の世は、ワタシは天張りアナタの妻。角太樣、角太樣、お名殘惜しい！」

とワッと聲上げ泣頽れたが、力無く〳〵起上つて、垣の隙から覗込み、
「では角太樣、お暇します、御機嫌能う！」
と涙に濕れた顏を伏せつゝ雙の袂を押當てゝ、見返り〳〵歸つて行つた。
現八は最前からの雛衣の道理せめた述懷に貰泣きして、鵜平の噂咄をも思合はせ、雛衣の踵追掛けて引留めようとした時、遠寺の鐘が亭午を告げると、
「客人暫らくお待たせした。」と庵の中から聲高く、
「勤行中失禮した、唯今解行致したからお目に掛らう。」と、言ひつゝ庭下駄突掛けて折戸の錠を外しつ、
「さッ、お通り下され。」
現八は雛衣の身の上も氣遣はれ、背後に心を牽かれたが、通り掛りの旅の者が容嘴すべき筋でも無い上に、主人の慇懃な管待振りを辭ひも出來ざれば座に通つて、互ひに名乘合ひしつゝ初對面の挨拶した。
「それがしは下總滸我の浪人犬飼現八信道と申す武士のはしくれ。主家を退身して以來諸國を遊歷しツイこの頃まで暫らく京都に足を駐めて些か門弟を取立てゝをりましたが、思ふ仔細あつて道場を閉ぢ、再び旅へ上つて中仙道から奥羽を指して行く途中、網苧の里端れの茶店で不斗尊名を承はつて

俄に御意を得たくて參上致した次第。勤行のお邪魔をした無禮をお咎めなく御引見下されたのは何より大慶。」
と現八は禮儀正しく會釋しつゝ言葉靜かに、
「實はそれがしには異姓の兄弟が七人あります——と申しても餘り唐突でお解りになるまいが、委しい話は追々申上げるとして、左に右く七人の異姓の兄弟があります。その中の五人には既に邂逅つてをりますが、殘る二人の所在が今以て解り申さぬ。異姓とは申せ各犬の頭字の氏を名乘つてます。即ちそれがしは犬飼、邂逅つた五人は犬江、犬川、犬山、犬塚、犬田、皆犬何と名乘つてますから、これを賴りに殘る兄弟をも搜してをりますので、網苧の里で尊名を承つた時は、それがしらと宿緣の有るか無いかは別として、同じ犬何氏と名乘られるのが眷かしくて、厚かましくもお尋ねしたので御座る。」
「ホウ、不思議なお話を承るもの哉。」と角太郎は怪訝に堪へぬ顏をして、
「して兄弟と仰せられるのは、唯犬何と氏を名乘るだけの事で御座るか？」
「そればかりぢや御座らん。唐突に御合點が參るまいが、」と現八はヤオラ膝を進め、
「それがしら異姓の義兄弟八人は各不思議の靈玉を持つてをる。その靈玉には八行の中の一字が、雕刻されたのでも又描かれたのでもなく自然と顯れてをるので御座るが、犬村氏お心當りは御座らん

かナ？」

「ホ、ウー！」と角太郎は喫驚した。

「如何で御座る」と現八は早くも角太郎の容子を見て取つて、

「貴殿が若し御所持なら、その靈玉には多分『禮』といふ字が顯れてるで御座らう。」

角太郎は暫らく無言で現八の顔を凝視めるばかりであつた。軈て徐ろに沈吟しつゝ、

「如何にも御明察通りの玉を所持致すが、この玉の宿緣と言ひ、義兄弟と仰せられるは、ドウいふ儀で御座ろかナ？」

現八はゆくりなくも未見の犬士の一人を尋當てたのを喜びつゝ、この靈玉の因緣由來――初めを言へば云々、終を言へば斯々、里見家の事、伏姫最期の時、姫の護持の念珠の八顆の數へ玉が、姫の自害の傷口から立昇つた白氣に包まれて虛空に散亂した事から、この宿因を持つて生れた再胎の子は各靈玉を授けられてるので、里見家再興の功臣の子で伏姫と許された金碗大輔・法名、大法師は八顆の靈玉の行方を搜しに廻國行脚し、八犬士具足すれば里見家へ隨身する宿緣ある事まで、その顚末の概略を語つた。

角太郎は聞く毎に一々感嘆し、自分も亦犬士の一人である過世の因緣に結ばれてるを喜びつゝ、

「犬飼氏、實は前夜不思議な夢を見ました。七疋の黑斑の犬がドコからとなく現はれたのを手を拍つ

て呼ぶと、一疋の巨犬が飛んで來たので可愛く思つて抱緊めたところが、自分も亦犬となつたと見て眼が醒めた。今思へば、貴殿と邂逅つて犬士の一人に加はつた前兆でござつたらう。」

と手を拍つて二人は互に喜び合つた。

角太郎はやがて靈玉を感得した顚末から、度々示現された玉の奇特を語つて後、扨てと言葉を更めて、斯る奇特の靈玉ゆゑ護身の寶として片時も肌身を離さなかつたが、去ぬる日妻雛衣が腹痛堪へ難いのを訴へたので、靈玉の奇特を戴せようと水に浸して薦めたのを、繼母船蟲が玉を見せよと横合から器物を奪らうとしたので、雛衣は周章てゝ粗忽して玉を嚥下んでしまつたと言つた。尤もそれから後度々注意けさしたが、マダ體外へ排出された容子は無いといふから、今だに體内に留つてをると思ふ。客人は鴛平茶屋で聞いて來られたらうし、今も今雛衣が折戸の外で愚痴を覆したのを聞かれたらうから御承知だらうが、それがし夫婦が生木を割かれた口實となつた雛衣の腹の膨らみたるも、身重では無くて矢張り靈玉の仕業では無い乎と思はれると附加へた。

「それは然うと内室のお身の上、」と現八は俄に憶出したやうに、

「打棄て置いて、若し淵川へでも身を投げられたら……」

「イヤ、その御心配は御無用」と角太郎は事も無げに打消した。

「それがしもその儀を氣付かぬでは御座らぬが、雛衣の胎内に靈玉が留まる以上は玉の奇特で水に入

つても濡れまいし、毒を仰いでも中るまい。犬飼氏、御心配は御無用……」
と心憎いほど沈着澄まして、それから話頭を轉じて文武の問題に及んだ。角太郎の和漢の文學を究めた博覽高才には現八は推服して耳を傾けてゐたが、そのうちに親子の關係が血液の混和で證明されるといふ俗說の眞否を質問すると、角太郎は古今の史籍雜著を引用してその說を必ずしも荒唐不稽で無いのを反覆して辨證した。現八は愈々博學宏才を感嘆して、暫らく和漢の物語に餘念も無かつた折から戸外に人聲がガヤ〳〵と聞えた。
「犬飼氏、人が參つたやうだ」
と言ひつゝ角太郎は次の間の襖を開いて現八を招き、
「失禮だが暫らく爰で橫になつて休息し給へ。」
現八が急いで次の間へ隱れて襖を閉切つた途端、折戸を開いてドヤ〳〵と緣端近くまで駕籠を釣込ませたのは、供揃ひ仰々しく引連れた一角の妻の船蟲であつた。摺箔した掛に白綾を重ねた高家の奧方といふ身拵へで、角太郎が出迎へたのを鷹揚に會釋しつゝ上座に就き、
「朝夕大分涼しうなつたが、お變りは無いかノウ。壯健なのが何より……」
と下座に控ゆる角太郎を笑ましげに見つゝ、
「角太どの、昨宵はお父上がヒヨンな事でお負傷を遊ばした……イヤ心配しやるほどの事では無い。

いつもの通りの弓のお稽古で初心のお弟子の矢が外れて、左のお眼へ中つたのです。剛氣のお父上の事だから直ぐ拔取つて手當もなさらず、妾にさへも默つてらッしやつたのだが、黎明から痛み出したので初めて喫驚して早速醫者を招んで診せましたが、何分お痛みが止らないので、お父上は何とも仰有らんが齊神樣へ願掛に今お詣りをした戻り道でござんす。」
と言ひつゝ孝行の角太郎が心配面に現れるを見て、
「心配しやる事は無い。常から剛氣のお父上ですもの。アレばかりの傷は直き癒ります。それよりか角太郎の……」笑顏を作つて、
「お前に喜ばすお家產がありますよ　氷六どの、角太に訊して早う喜ばしてやりや」
氷六といふは角太郎夫婦の媒酌人で、雛衣が去られて來たのを引取つた親品である。今朝雛衣が見えなくなつた往方を搜しに來て、丁度折好く船蟲の產神樣の戻り路に出會つて一緒に來たのである。
一見朴訥律義な田舍の親爺で、
「若檀那、」と重たい口を訥らしつゝ、
「御新造がすんでの事ドンブリやるところ……」
と口不調法の頓狂聲で、
「この二三日容子がドウモ笑止しいので氣を付けてると、今朝默つて出て行かれて、イツまで經つて

も戻らッしやらねエんで、大切な預かり者に間違エがあつてはと足を摺小木にして捜し廻つてると、犬村川の柴樽橋からドンブリやらうとしてゐるのが御新造だから、吃驚したの何のつて、夢中で飛出して抱留めたが、殺してくんろと豪い力で振りもぎらうとしてゐるところへ丁度赤岩の奥方がござらしつたので、隨伴の衆の力を借りて漸つとこさと押へやした。イヤモウ一足違エで危エところでごはした。」

「ほんに一足違ひで危ない處でした。氷六どの、アンタのお庇で命拾ひをしました。」と船蟲は殊勝げに眼を瞬きつゝ、

「死なうとまで思詰めたのは能く〳〵で不便に思ひます。妾ぢやとて罪も無い柔しい嫁が何で憎からう。あの子がお腹の病氣になつたのが不運で、お父上の疑ひが掛り、一圖に不埒をしたとのお腹立で何とお執成してもお聞入れが無いので、憎まれ役を單獨で脊負つて鬼になつて去狀を書かしたのも、頑固なお父上の言狀を無理にも通させて親の威光を立てさせてから、ユックリと御機嫌の直るのを見て、復た何とでも執成して繕を戻すツモリの妾の腹中だつたのを早まつた事して呉れた。面宛のツモリぢや無からうが、あの子にもしヒヨンな事をされて、邪見な姑の嫁いびりで罪も無い娘を殺したと言はれては妾の立つ瀬が無い。產神樣へお詣の戻りに危いところを助けたといふのも矢張り神樣のお思召。妾もこれに懲りて罪な苦勞をさせますまい。お父上の御立腹も最う長くはあるまい。妾が味よ

う楫を取つて御機嫌を直すから、最う暫くの間辛抱するとして、雛衣どのはこれを機會に引取つて、念佛三昧は止めにしてもとの通りに仲善くし給へ……氷六どの、」と呼掛けて、

「雛衣を早う伴れてたも」

意外な船蟲の粹の捌に、雨降つて地固まる思ひをして氷六は、ソヽクサと庭へ飛んで下り、緣先近く卸した辻駕籠から雛衣の手を取つて連れ出して、恥かしがるのを船蟲の傍へ坐らした。

一ハレヤレ漸と重荷を卸した。これで俺も親旦那の位牌へ申譯が立つ。」と氷六は喜び勇んで懷中から去狀を出し、

「こんなものはモウ七里ケツパイ、火に燻べても大事ごはすまい。なアお袋樣、若檀那。」と言ひつつ爐中に投じてパッと燃やしてしまつた。

「妾もこれで胸の痞が漸と下りました。」と船蟲も左も安心したといふやうな顏をして、

「雛衣どのにも太い苦勞をさして濟まなかつた。世間では嫁姑と敵同志のやうに言ふが、言ひたうもない憎まれ口を叩くのも親の役、必ず邪見な鬼のやうな姑と思つて下さる勿。さッ、お互ひにモウ今までの事は水に流して角太どのは睦まじくしや。雛衣どのも仲善くして可愛がつて貰や　尋常の身體で無いのだから、大切にしやつて輕率な事し給ふ勿。そもじが家を出てからの妾の心配は並大抵ぢや無かつたが、これで漸と肩の凝が取れた氣がして輕くなりました。」とヤオラ座を起つて、

「では二人とも仲善うしや。氷六どのも御苦勞だつた」
と莞爾やかに愛嬌覆して船蟲供揃美々しく駕籠を釣らせて歸つた。
現八は奥から出て、角太郎に紹介はされて雛衣とも初對面の挨拶をしつゝ扨て曰く、繼しい仲でも母御に當る刀自を惡う言ふでは無いが、襖の外から垣間見るに蓮葉にして空々しく多辯にして誠實が無い。鴟平親爺の口を待つまでも無い、佞奸邪智の腹黑が俄に慈母と早變りしたといふのは必ず胸に一物あつての仕業、父御の一角どのが初心の弟子の過失にて左の眼を怪我したといふのも奇怪至極、それがし些か心當りがあるから、通り掛りに旅人の顏して赤岩の容子を探つて參らうと、角太郎夫婦が引留めるをも諸かずに、旅支度して赤岩へと行つた。

四　僞一角の滅亡

僞一角の後妻の船蟲が、小文吾に見露はされた武州阿佐谷の草賊竝四郎の妻の成上りであるは言はでもの事であるが、馬加大記の一味は僞一角に宿緣があると見え、船蟲が妾に住込んだより遙か以前に馬加の惡事の方人の籠山逸東太緣連も、武州を出奔して流れ〳〵て落着いたのは一角の道場であつた。暫らくは師範代として塾の支配をしてゐたが、一角の推擧で越後春日山の長尾景春に仕官し、近頃は白井の城に在番して今だに一角とは師弟の音信を絶たなかつた。

丁度現八が一角の容子を探りに來た日、逸東太は一足早く主命を帶びて一角を尋ねて來た。一角は眼を負傷して引籠つてゐたが、他ならぬ高弟の久し振の訪問だから早速引見して用向を訊くと、近頃白井の城で井戸を鑿らうとして、計らずも木天蓼で作つた鞘の短刀を掘出したので、主命に由つて鑑定を乞ひに來たのだと言つた。木天蓼の鞘といふのは珍らしい、必ず由緒ある名刀であらう。早速拜見しようと言ふので、逸東太は從者の手から取寄せて、萌黃の紙を解く〳〵二重箱の蓋を取ると、一道の白氣が立昇つて一角の座邊に漂ひ消え失せたのを逸東太は氣が付かなかつたが、箱の中なる袋はイツか空無となつてゐた。

逸東太は顏色土の如くなつて驚き騷ぎ、晝夜片時も離さず守護して來たのが俄に紛失するとは奇怪至極、率ざ從者どもを一穿議仕らんと、イキリ立つを一角は押禁め、若し伴人が竊取つたなら爰まで隨いて來る筈が無い懋ひに騷立つるは勞して功なければ、事を伏せて密々に穿議するが宜からん、殿へは愚老が生憎眼疾にて確かな鑑定が出來兼ねるから、暫らくお預りすると披露して置かれよ、貴公の粗忽にならぬやう宜しく取計らうから、愚老に任して安心して先づ久々にて一獻酌まうと、船蟲牙二郎を初め門弟どもを集めて美酒珍羞を陳べて管待した。

四方山の世間咄が自慢の武藝咄となり、關八州には先生の右に出る武藝者は無いと逸東太の追從も出た。

「時に、」と逸東太興ありげに、
「それがし當家の御門を潛らうとした時、武藝者らしい旅の者が御門前に立つてをつたが、察するところ他流仕合を望む者と思ふ。若しマダうろついてをるなら、道場へ引張込んで各々方引叩いてやつては如何？」
「面白い〳〵。」
と牙二郎は先へ立つて門人引連れ門外へ出て、最前から案内乞はうと人の出るのを待つてゐた現八を引張つて來て、主人一角眼疾で引籠中だが、遠來の珍客ゆゑ對面して遣はすと勿體振つて一角の前へ案内した。現八は滸我の浪人犬飼現八と名乘つて慇懃に挨拶しつゝ、これが昨夜胎内竇で左眼を射貫いて呉れた怪猫かと正面に一角の顏を屹と見た。左右に居並ぶ牙二郎逸東太を初め、門弟どもそれぞれ初對面の辭儀を交換して後がお定まりの武藝咄となり、各々高慢の鼻を高くした武藝自慢をして客人は定めし名ある武藝者でおはさう。一手御敎授に預かりたいと水を向けた。現八は中々以て各々方と立合ふ腕前では御座らぬと辭退したが、無理往生に道場へ引出された。が、腕前は段違ひで、苦もなく片端から引叩いたので、二人三人左右から打つて掛るを物ともせず、小兒を扱ふ如く手玉に取つて投飛ばしたり引叩いたりした。堪り兼ねて逸東太、眞劍勝負と呼ばはりつゝ、矢庭に打込んで來たのを一二合で刀を叩き落して引組んで、ヅデンドウと叩きつけた。餘りの不覺に牙二郎は切齒嚙んで

刀を提げ飛出さうとしたのを一角は牙二郎無禮であるぞと叱りつけつゝ、更めて現八を上座に請じ、口を極めて現八の早業を嘆賞し、病中で無ければ愚老もお手合せを願ふのだが、生憎の眼疾でお立合ひ出來ないのが却つて幸ひ、中々以て愚老如きが及ぶ所で御座らぬと數度繰返して感嘆した。
暫らくは復た四方山の咄に興じて、夜も更けたればと杯盤を納めさせ、客人にも定めし草臥れておはさう。客間に臥床を設けさせたれば旅の勞れを休ませ給へと案内さした。その跡に殘つた牙二郎逸東太をはじめ門下の面々は一角を圍繞みて、素性の解らぬ旅烏に道場を荒らされてこの儘還しては、道場の名折れであると焦り立つのを一角は制して、それを考へぬでは無いが侮り難い渠の早業、迂濶な手出しをして失敗なつては益々恥辱を重ねるやうなものであるから、他意なきものと油斷をさしてそれ〳〵手筈を用意して熟睡を不意に襲つたなら、萬に一つの討漏らしもあるまいと奇略を授けて手筈を牒し合はした。一同は皆奇なり、妙なりと手を拍つて早や事成れるやうに勇み立つた。中にも逸東太は寶刀竊取の賊名を塗るに都合の好い身代首が出來たと、現八の首級を所望し、各々勇んで準備に著手つた。
熟睡を襲ふにしても、迚も尋常では齒が立ちさうも無いから、寐所の入口には樽や臼を列べ、庭には二重三重に繩を引張り、先づ寐込を騷がして現八を狼狽さして誘き出し、障碍物に躓づかせて倒れるところを討取らうといふ計略である。そんな惡計が企らまれてるとは夢にも知らない現八は、昨夜

の勞れでグッスリと熟睡んでゐた處、懷中の靈玉が憂然碎ける音がして忽ち眼を覺ました。驚いて懷中の靈玉を探ると無事であつたので安心したが、胸騷ぎがして寐附かれないので、異變を知らせる靈玉の奇瑞であらうと氣が附いて窃かに寐間を出て容子を窺ふと、入口には障碍物が置いてあつた。雨戸を外して庭へ下りて見ると、二重三重の繩が縱横に引いてあつた。小賢しき眞似するもの哉と、内心笑止に思ひながら隅々まで一巡して、非常口の錠を捩切つて置き、寐所へ戻つて身支度をして足場を揃つて庭の樹蔭に潛んでゐた。

やがて丑滿の鐘を合圖に牙二郎逸東太・門弟・若黨・船蟲までも手傳ひに出て、持場々々に手ぐすね引いてゐた。狩出し役の門弟が一番乘の意氣込で襖をポンと蹴放して、

「盜人、盜人！」と呼ばはりつゝ槍の穗尖を揃へて夜具をグザと刺した。手答へ無いので穗尖で夜具を跳返すと現八はイツカ藻拔の殼。

「失敗つた。」

「感づかれた。」

「逃げられた。」

「それッ追蒐けろ！」

と俄に周章てゝ引返す機みに、障碍物の小桶や擂鉢や碾臼に足を取られて轉けつ輾びつ漸くに、雨

戸を外して飛出せば庭には繩が八重十文字、アッチで引掛かりコッチで絡みつかれ、進退度を失つたところへ現八が、

「卑怯者奴！」とをめき叫んでパッと飛出しさま、逸東太の若黨二人の細首を丁と討落した。機先を制されて益々狼狽した牙二郎初め門弟らは、各々手槍を揮つて現八を追取込めようと犇いたが、敵を陷れようとして縱横に張つた麻索が味方の働きの邪魔をして進退自由を失つて、現八に切立て〳〵散三に艱まされた。その上に緣から矢繼早に射る逸東太の矢は、現八よりは味方を脅かして太と〻益益苦戰ならしめたが、無益の殺生が目的で無い現八は、二人の下郎を斬つた外は微傷を負はして勢ひの萎んだ隙を見て、突と非常口から拔出して戸口に大石を倚せ掛けて置いた。

それッ逃出したと、牙二郎逸東太は跡追蒐けて引戸を明けようとしたが、石の重荷で動かないのを力一杯漸つとガラリと無理に明放した時は、最う現八は遠ざかつてゐた　丁度この時夜は白んで數丁先を駈けて行く現八の後姿が見えるので、二人は逃がさじ遣らじドコまでもと追跡けた。往方は返壁の里で、角太郎の庵室へ飛込んだのを遠くから見屆け、袋の鼠を取つた氣になつて、二人は荒々しく闖入した

「犬村氏、久し振で御座る。」と逸東太は尊大振つて、

「それがし實は主人から寶刀を預かつて老先生の鑑定を乞ひに昨夜參つたところ、折から偶然同宿し

た旅の修業者件の寶刀を竊取して逃出したのを、それがしと牙二郎どのと見付けて跡を追ひ、當家へ逃込んだのを見屆けて參上したので、曲者をお渡し下さい……

「さッ、その賊を引渡しなさい。知らぬナゾと言つたら、容赦はせぬぞ。」

と、牙二郎は二人して詰寄つて麗を叩いて叫き立つた。

「ホウその賊が當家へ逃込んだと？」

と戸棚の中に現八を忍ばした角太郎は沈着拂つて少しも騒がず、

「御覽の通りの一軒家で素通りは勝手次第、裏へ拔ければドコへでも逃げられる。當家の門へ逃込んだのを見屆けたからつて、當家に潛れてをると早合點は迷惑千萬、無益の穿鑿するよりは急いで他を搜して御覽……」

「言ふ勿、言ふ勿、その儀ならば家搜しして吳れる。」

と牙二郎は突立ち上つて眞先に戸棚を目掛けて行かうとするを、角太郎は遮り留めて、

「小さくとも我が城廓、慮外をすれば了簡ならぬぞ。」

「此方が了簡ならんのだ。四の五の吐かすなら腕づくだ。」

と牙二郎は刀の柄へ手を掛けて、アハヤ拔かうとするところへ駕籠を釣らして乘込んだのは一角夫婦。綴の長絹長袴、腰に朱鞘の兩刀佩して綾の袿衣緋の小袖にて小さき壺を抱へた船蟲を隨へつゝ、

「牙二郎控へろ、慮外をする勿。」と牙二郎を叱りつゝ、上座に直り、

「盜賊の事は俺が穿鑿する　籠山氏、今日は些か内談があつて俄に參つたのぢや。和殿は赤岩へ歸つて暫く待たれよ」

と逸東太を還してしまつて、親子二夫婦と牙二郎の内輪ばかりとなつた。

一角は驚て昨日船蟲が雛衣を救つた顚末を聞いて、武家の作法の止み難きに兩人の仲を割いたが、命を賭けてまでも證明を立てようとする雛衣の潔氣に賞でゝ、今までの事は水に流して角太郎の勘當をも許し、もとの親子嫁舅となつて、一家睦まじく仲善くしようと、親から折れて對面をしに參つたのぢやと言つた。思掛けない親の慈悲に角太郎も眼を濕ましてこの上ともに孝道を盡さうと誓ひ、雛衣はもとより嬉し涙に咽んで、これまでの不束を詫び、これからは親のいふ事なら何なりゝ背きませぬと泣顏折れて喜んだ。

一角も平生にない上機嫌で、我が子の孝心の厚いのはもとよりだが、それに增して嫁の孝行の柔しさは身に浸みて百倍嬉しく思ふと、雛衣の心掛の美はしいのを心の底から褒めそやした。

「それに就て汝達に相談があるが……」と一角は屹と言葉を吏め、

「雛衣、汝の孝行は口先ばかりぢやあるまいノウ。」と、念を押し、

「實は汝に無心がある。親の所望なら何なりと嫌とは言ふまいがノウ。」

「お父様の更まつたお言葉、何で嫌と申しませう。」
と雛衣は舅の日常に無い機嫌にイソ〳〵としながらも、夜叉が佛に早變りした心の奥が計り兼ねて何となく薄氣味惡かつた。
「それを聞いて俺も安心。汝のやうな孝行な嫁を持つたのは俺の幸福。雛衣、屹と嫌とは申さぬナ。」
と一角は面を正し、
「汝の五ツ月になる腹の子、その孕胎の子が所望ちや。」
「えッ。」
と雛衣は仰反るばかり喫驚した。角太郎も餘りの難題に言句が無く、眼を睜つて一角を瞻視めるばかりだつた。
「兩人とも能く聽けよ。」と一角は屹と言葉を吏め、
「汝達の見やる通りの眼の負傷意外に手重く、醫師は最う絶望といふ診斷で、關八州に雙びない俺の武名もモウ廢れると殘念に思つたところ、或名醫の敎に、百年以上土中に埋もれた木天蓼の細末と四ケ月以上の孕胎の子の鮮血と煉合はして用ゆる時は必ず癒ゆると聽いた。未練なやうぢやが、俺も最一度視力を復して最後の花を咲かしたいのぢやが、二つながら容易に獲られるもので無いので當惑してをつた。然るに天未だ一角を棄てず、出土の木天蓼は不思議に手に入つたが、儘ならぬは一方孕胎

の子、こればかりは萬金を積んでも獲られるものでは無い。一角の武運も盡きたかと斷念めるには斷念めたが……」
と一角は深い嘆息を吐きつゝ、暫らくして、
「雛衣汝は父の所望なら何なりと嫌とは申さぬと言つたナ……汝の孕胎の子を俺にくれぬか。」
雛衣はギョッとした。千引の岩が頭の上に壓しかぶさつて來たやうな氣がしてクラ〳〵とした。
「お父上、」と角太郎は苦り切つて、
「子として父のお言葉を返すは道で御座らぬが、孕胎の子を呉れと仰有るは正氣のお言葉とは思へませぬ。如何にお父上のお言葉でも、殘虐無道の惡名を負はせ給ふやうな仰せには、子として從ふやうな事は出來ませぬ。」
「コレ角太郎、何と言やる。」と船蟲はシャ〳〵リ出て、
「唯つた今、これから先は孝行をすると言やつたのをモウ忘れやつたか。雛衣、そもじは忘れまいノウ、お父上の仰せなら、何なりと嫌とは申さぬと言やつたのを？」
「さア兄貴、何とか返事をしろ。」と牙二郎も詰寄つた。
「兄貴が孝子と言はれるのも、嫂御が貞女と言はれるのも返事次第で決るのだ。親が大切か、女房が大切か、さア〳〵〳〵？」

「こら、こら、靜かにせい！」と一角は兩人を制しつゝ獨語つやうに、
「口賢う理窟は申すが、内證は雛衣が可愛いゝのは眞實ぢや。親の眼は潰れても女房の命には換へられまい。道理ぢや、夫婦の情愛なら是非が無い。一角は親の威光で嫁の命を奪らうとはしない。俺の武運が盡きたと斷念めれば濟む。だが雛衣、父の所望なら何でも嫌とは申さぬと言つたのはヨモヤ口先ばかりぢや無からうナ。俺は自分で手を下して汝の胎を割くやうなソンナ鬼々しい心にはなれぬが、汝は口先ばかりで孝行すれば濟むッモリか。船蟲――」と船蟲に目瞬せして、
「用意の短刀を雛衣に渡して、當人の了簡次第に任しなさい。」
船蟲は待構へたやうに懷中から短刀を出して雛衣に渡した。
「お父上は決して物の命を取るやうな情知らずのお方ぢや無いのだ。汝は能うく了簡して孝行を忘れなさんなよ。」
一角夫婦と牙二郎との間に挾つて、雛衣は眞綿に包んだ刃を咽喉に擬せられるやうな心地がした。義理と威嚇の兩端からヂワ〳〵と責められて、逃げようとしても逃がすまいとする三人の權幕に覺悟を決め、船蟲から渡された短刀を取るより早く、乳の下深く突刺して、二太刀三太刀引繞らすと、颯と迸る鮮血と共に、火蓋を切つて銃彈が飛出した如く、一個の靈玉が勢ひ鋭く一角の胸板を打つた。苦と魂消る聲諸侶一角は仰反返つて手足を張つて悶絶した。

「ヤ、、父上には……」
と牙二郎は驚いてッカ〳〵一角の傍へ來て、おつかぶさるやうにして顏を瞻めたが、忽ち面色變つて顧眄ざま、
「父上を殺したナ、汝れ親殺し！」
と拔く手も見せず角太郎に切つて掛つた。船蟲も懷劍逆手に閃かし、
「親殺しの人非人！」
と突いて掛つた。角太郎は暫らく〳〵と鞘のまゝの戒刀で受けつ流しつしたが、二人を對手に切結ぶ氣は無いから、烈しい刀先をあしらひ兼ねて、イツカ右の臂に淺傷を負つた。受太刀ばかりの角太郎、勢込んだ牙二郎の鋭どい太刀風に後退りして太とゞ危く見えた時、戸棚の隙から現八が打出す手裡劍に牙二郎は乳の下深く篦深に刺され、あつと聲上げ撞とばかりに仰向けに倒れた。船蟲は驚き周章てゝ逃出さうとしたを、戸棚の襖を蹴放して飛下りざまに現八が無圖と捉へて、ヅデンドウと投飛ばした。
「犬飼氏。」とこの爲體に怫然とした角太郎、
「頼みもしないのに無益の助太刀、母を投げ弟を殺して、この角太郎を不孝不悌の子とする了簡か。義の兄弟でも堪忍ならぬ。」

と戒刀をヒラリと拔いて切つて掛つた。刃の下を搔潛りつゝ現八は、角太郎の二の腕から鮮血が滴たり落つるを見ると臂を押へ、素早く取出す一角の髑髏で鮮血を受留めた。不思議や鮮血は髑髏に浸込んで一滴も落ちなかつた。

「犬村氏、逸まり給ふ勿。」と現八は角太郎の臂を押へたまゝ、言葉靜かに、

「アレに悶絕する一角は御邊の眞の親で御座らぬ。この髑髏こそ眞の御親父一角武遠どのゝ白骨、御邊の鮮血が枯骨に浸込むのは爭はれない親子の證據。恁う言つたばかりでは御邊の腑に落ちまいが、仔細を精しくお話しするから、暫らく刀を納め給へ。」

角太郎も目前の不思議に躊躇つて、刀を引いて鞘に收め、暫らく現八の顏を見守つてゐると、

「犬村氏。」と言葉を更め、

「これなるは御邊の眞の御親父一角武遠殿を、囓殺して化け終した贋一角の山猫で御座る。」と驚き呆れる角太郎を見つゝ、

「實はそれがし鵜平茶屋で御邊の御親父一角殿が、庚申山の魔界を冒した昔咄を聞ての歸るさ……」

と案内知らぬ夜道に迷うて山へ紛れ込んで、計らずも胎内竇で異形の怪物を認めて左眼を射留めた事から、奥の院にて一角の亡靈に邂逅つて遭難の顚末を聞き、復讐の傳言を賴まれたことまで事落ちもなく物語つた。

「犬村氏、この短刀に見覺えが御座るか。」

と、現八は亡靈から托された鞘が朽ちて柄絲の破れた短刀を出して角太郎に示した。

「これなるは、生前御親父が片時も離し給はざるお家の什寶で、山猫を刺さうとして誤まつて地に墮されたのを、山猫が大小その他の持物を奪つたが、これだけは忘れて參つたのださうで御座る。」

角太郎は請取つて見ると、幼ない折で見覺えはないが、目貫は正しく家紋の魚葉牡丹であつた。角太郎は愈々悲歎の涙に暮れ、それがし凡眼にして父の讎なる山猫を父と尊み、知らぬ事とで父の怨みを報はうともしなかつたはもとより、泉下の遺靈に一片の回向をだもしなかつた。剩つさへ貞節の妻をさへ、猫めに欺されて非業に死なしたのは面目無い。勇士の助が無かつたら、この生何時までも猫めに虐げられて、父の怨を晴らさうとも思はなかつたらうと、千行の涙に沸えくり返る思ひをしつゝも、父の髑髏と遺物の短刀とを佛壇に供へて唱名祈念した。

現八はやがて、左も右くも化猫の十々滅を刺し給へ、甦生らぬとも限らぬからと言つた。が、角太郎は苟めにも父の姿をするものに刃を當てるは人の子として忍び難い。老りたる妖怪が本體を露はすは二十四時間と言へば、今暫らくはこの儘に棄置いて、猫めが形を現はす時まで待たう。それにつけても不便なは雛衣と、鮮血に塗れて俯伏す雛衣を抱起せば、五臟六腑は創口から溢れて目も當てられない光景であつた。雛衣、ひなぎぬどのと、二人して右左から呼掛けつゝ角太郎は、

「汝の腹から飛出した靈玉のお庇で妖怪は本性を露はして父の讎が打てた。汝の自害は決して仇にはならぬから安心して成佛しろよ。」

と、耳に脣寄せ言聞かすと、雛衣は薄目を開いて、微かに點頭くと共に合掌しつゝガックリと絶入つた。

その時、牙二郎はウ、ンと呻いて息を吹返し、身を起しつゝ手裡劍を拔くより早く現八を目掛けて投げる、現八は脇差の柄にて丁と受留めた。牙二郎怒りて踌きながら、刀を揮つて相手選まず切つて掛るを、角太郎は押隔てつゝ拔合はせて一上一下と切結んだ。左らぬだに武術が段違ひである上に、牙二郎は初度の巨痍に太刀亂れ、脆くも刃を打蜚ばされて脇差を拔かうとしたを、角太郎は拔かせも果てず踏込んで、閃めかしたる刃の冴に細首丁と打落した。

牙二郎の軀のバッタリ倒れて贋一角の上に累なり落ちると共に、物の響と恩愛の氣が通じけん、贋一角は忽ち遠雷の如き底力のある喪き聲を立てゝ障子襖を震動し、雙手を張つてムックと突立つた相貌は初めと變つて、滿面斑毛を生じ、眼は百練の鏡を掛けた如く、耳まで裂けた口の邊には銀の針を植ゑた如き鋭い長い髭を逆立て、朱盆の如き口をカッと開いて、牙を鳴らし爪を張り、狹霧の如き息を吐いて四邊を屹と疾視へた。角太郎は少しも驚かず、牙二郎の鮮血を染めた刀を右手に體を構へて隙を窺ひ、現八も亦刃を拔欹めて手に餘らば資けようと眼を配つてゐた。その時までも佯死してゐた

船蟲は、怪猫の恐ろしさに驚き悸えて一膝拔き後退りして逃出したのを、二人は知らぬでは無かつたが、大敵を前に控へて見返る遑もなく、ジリ〳〵と進んで詰寄つた。

暫らく互に睨合つてゐたが、遁れぬところと怪猫はをめき叫んで飛蒐つて來たのを、身を飜し身を飜し、飛鳥の如く飛繞るを追縮めたので、逃端を失つて格子に爪を掛けてメリ〳〵と破つて逃げようとしたところを角太郎は、曳ッとをめいた手練な太刀先で、腰の番をバラリズンと斫離した。有繋の怪猫も窮所の重痍に堪らず、臀居にドッと倒れたのを起しも立てず伸掛つて、柄も通れと咽喉元を刺貫いた。神通自在の妖怪も、魔術を施す力も無く、天地を震動する物凄まじい聲を名殘に息が絶えてしまつた。

さしも武勇の二人も、世にも珍らしい稀代の妖怪を仕留た武運を祝し合つて吻と息を吐いた。暫らくして二人は仇の片副の船蟲を追捉まへようと座を起ち掛けたところへ、

「犬飼氏、船蟲は引括つて參つた。」

と呼ばはりつゝ後手に縛めた船蟲を引摺つて來たのは籠山逸東太であつた。

「犬飼氏、凡眼玉石を分たず、赤岩では自ら揣らずして虎威を冒し、剩つさへ義人を誣ひて賊名を負はしたのは、全く山猫親子に誑かされたからで御座る。勇士の手前面目次第も御座らぬ。」と只管現八に陳謝しつゝ、

「實は先刻饗一角の山猫めが、それがしに先へ歸れと言つたのを怪訝に思つて背戸に隱れ、一伍一什を立聽きして木天蓼丸の盜賊が誰でも無くて饗一角であるのが解つたので、その場へ飛出して面の皮引剝いでくれようと存じたが、一端師と立てたものを恥を搔かすでも無いと、胸を撫つて暫らく容子を窺つてるうちに、事件は意外な進展をして出るには出られず、手に汗を握つて影ながら犬村氏のため窃かに切齒囓んでをつた次第。雛衣どの、自害が化猫の正體暴露となつてからの兩勇士の武勇、さしもの怪猫を難なく仕留め給うたは、誠に前代未聞の大功名にて、數ならぬ逸東太も胸の透く心地が致した。就いては遲ればせながら何がなお手傳ひをして先刻の無禮のお詫びをし、それがしのためにも木天蓼丸の賊を退治て下されたお禮をも申したいと存じた折から、これから奸婦が逃出したのを見て、跡追蒐けて引括つて參つた。」

と手柄顏をしつゝも重ねて空々しくも再び二人の武勇を稱へ、妖怪退治の喜びを述べた後、更に言葉を更めて、

「それに就き御兩所に懇願がある。それがしも君家の重寶を怪猫めに盜まれ、肝腎の鞘を失くしては品が戻つても申譯が立たんで當惑してをる次第、甚だ申兼ねたが君家へ申譯の種にしたいから、木天蓼丸の刀身と賊婦船蟲とを下し置かれたい。」

と前額を疊に摺りつけてツウ〳〵しくも哀願した。

二人は逸東太の厚顏無恥に呆れてしまつた。が、もと〳〵が齒牙に掛くるに足らない小人、對手にするは大人氣ない。船蟲とても憎むべき悍婦ではあるが、切つて棄てるは刀の汚れ、角太郎のための父の讐といふでも無いから、逸東太の乞ふに任して隨意處分させたが宜しからうと二人は相談して船蟲を逸東太に引渡す事にした。が、この場の跡始末をするにつけて、船蟲逸東太の兩人は活き證人として立合はすから、それまで勝手に引取る事はならぬからと引留め置いて、氷六を初め犬村赤岩の兩村長を呼集めた。早くも噂を聞傳へて百姓達は村長の踵に續いて見物に來た。喧嘩過ぎての棒ちぎりで利鎌連枷竹槍と、思ひ〳〵の物々しい打物持つて集つたが、山猫の正體を露はした恐ろしい相好を見ると身の毛を彌立つて震へ上つた。が、官府に訴へる時は、饗一角の門弟たる村人も多勢呼出されて迷惑するものもあり出費も少なくないから、内分に濟ましてくれといふ村長らの懇願で、村民一同が手傳つて跡片附をする事となつた。

門弟中の月蓑團吾、八黨東太の兩人は、山の神と土地の神であつた。饗一角が化の皮を露はして仕留められたと聞くと、獺の化けた玉坂飛伴太、貂の化けた乞足潑太郎兩個の首を斬つて降參し、現八角太郎の赦免を乞うて雲と化して古巢の山へ飛んで去つた。牙二郎の首もイツの間にか山猫の亂の爭はれない動物の顏と變つて滿身に毛が生えてゐた。村民共はやがて怪猫親子を初めとして、三個の首兩個の軀を野外へ擔ぎ出し、樹の枝枯草を積重ねて荼毘に附し、灰を埋めて猫塚を築いたが、十里四

方は田も畑も鼠の憑く事が無かつたさうだ。

斯くて船蟲は逸東太に引渡して白井の城へ引率させた後、二犬士は怪猫の思ひの殘る草庵は燒き拂つて、雛衣の遺骸を守つて赤岩の宿所へ歸り、數日後に野邊送りをし、先人一角武遠の髑髏をも葬むつて慇ろに回向をし、七日々々の問ひ弔ひに年を越して、家の處理や取片附を殘る方なく濟ましてから、翌る文明十三年の四月、氷六初め村長らを招いて別宴を開き、長い間の厚誼、別して今度の事件に就いての骨折を謝し、且つ犬村大角と改名の披露をして別れを述べ、その翌日に現八と打連れて旅の空へ上つた。

第七　親兵衛功績の巻

一　兇賊の子素藤

爰に上總の夷灣郡館山の城主に墓田權頭素藤といふ梟雄があつた。本は京の生れで、父の但鳥跖六業因といふは近江の膽吹山に籠つて洛中洛外を惱まし、姙婦の胎を割いて孕胎の子を煮て啖ふといふので袴垂保輔以來と鬼の如くに恐れられた强賊であつた。素藤二十一歳の祇園會の日に父の跖六が京の町で捕へられたと聞くと、奸智に長けた素藤は素早く山寨の有金攫つて風を喝つて逃出し、岐蘇路から信濃を經て武藏に入り、芝濱から便船して海を渡つて上總一圓を歷巡つた末が夷灣郡の館山の城下の曹善村に辿り着いた。

丁度その時、曹善村では疫癘が流行つて軒並が枕を並べ、一夜の宿を貸す家も無かつた。仕方が無しに鎭守の諏訪の荒れ果てた社殿で暫しの勞れを休めようとしたが、身に浸む夜風に睡られないでウトウトする丑滿頃、夢とも現とも無く妖鬼の語り合ふ聲を聞いた。疫癘の鬼と自ら名乘るのが、今度の病は爰の社頭の神木の樟の空洞の水に黃金を二十四時間浸して服ませれば立處に癒るが、瘦村で黃金を持つものが無いので折角の神方も施こす事が出來ぬのは笑止千萬と語るを聞き、素藤は好き事を

聞いたと北叟笑み、翌る拂曉、樟に登つて數十枚の黄金をザクと樟に溜つた水に投じ、その翌る朝汲出して明神御夢想の神水と稱して試みに數名の患者に施した處が起死回生の不思議な奇特が立處に顯はれたので、村民達は不思議に驚きて我も〳〵と素藤に神水を乞ひ、さしもの疫癘も忽ち鎭まつたので村人どもは隨喜渴仰して素藤を神の如くに崇め、イツマデもと引留めもすれば素藤も亦、ドコへと志ざす的も無いのでズル〳〵に逗留した。その中に諏訪の宮守が久しく絶えてゐたので、寧そ素藤を乞うて祠官としたら神慮に協ふだらうと言出すものがあつて、村民一統相談して素藤に賴んだ。本より下心あつての素藤、短才未熟にて德足らざれば神慮の程如何なんと表面に謙遜を示しながら里人達の懇請、無下に辭退し難いからと、退引ならぬやうな顏をして引受けた。孕胎の赤子を煮て啖つて舌鼓を打つた稀代の兇賊の子の但鳥源金太が爰で母方の姓を名乘つて蔓田權兎素藤と改めて、神に御饌を供へ祝詞を誦んで拍子を打つ殊勝な神主と成濟ました。加之ならず山寨から攫つて來た有金をタンマリ持つてゐて不自由しないので貧しいものには惜まず惠み、泣付かれゝば快よく融通して利子も取らず促りもしなかつたから有德の福人として益々難有がられた。が、德を施せば施すほど村人は益益義理固くして促りもしないのに相當な利息を添けて返し神前への供物も手厚くし、加持祈禱のお禮も持つて來るので身代もメキ〳〵と肥つて愈々民望を增し、活神樣の如くに崇められた。

この噂を聞いた館山の城主小鞠谷如滿は素藤の聲望を嫉視んで安からぬ思ひをし、郎黨兎巷幸彌太

遠親に命じて素藤を搦め捕らせようとした、然るに遠親は小兒の痘瘡を素藤に加持して貰つて助かつた恩もあり負債に苦んでゐたのを素藤から五十兩借りて濟した義理もあるので、竊に内通して素藤を逃がさうとした。が、不敵の素藤は逃げも隱れもせず遠親が討手に來たのを待受け、言葉巧みに唆して反逆を慫慂めた。短智の遠親は忽ち乘せられ、素藤から謀計を授けられて素藤に繩を掛けた擬をして城内へ引率し、如滿の面前へ引張出して忠勤顏をし、油斷を見濟まして如滿を一突きに刺した。スワ狼藉と、左右等しく起上るを尻目に掛けつゝ遠親が首尾よく大望仕遂げたッモリで傲然としてゐると、階下に引据ゑられてゐた素藤は素早く繩を振解いて緣に飛上りざま躍蒐つてアッと言ふ間もなく電光一閃遠親の首を一刀に刎ねた。降つて湧いた俄かの珍事に素藤の郎黨どもは顚倒してマゴ〳〵してゐると、素藤は遠親の首を穗尖に貫ぬいた槍を突きつゝ麾ねき、汝等の主人の讎は卽座にこの如く取つてやつたが、如滿には嗣子が無いと聞く、城主は一日も無くてはならぬから素藤假に城を預つて政治を執らうと思ふが汝等異存は有るまいナと高飛車に出て一同を睨廻した。庸將の下に强卒がある筈は無く、言甲斐無くも一同は素藤の意氣に呑まれて卽時に降伏し、譜代の老臣奥利本膳、淺木碗九郎を初め城内一統歸順して素藤に忠義を誓つた。

流浪人の盜賊の子は斯くて一年經たぬ間にマンマと一城の主に成濟ましたが、奸智に長けた白者ゆゑ早速鄰郡の城へ夫々の聘物を持たして館山城の内亂を鎭定した始末を知らして如才なく鄰交の好

を通じた。殊に雄藩の里見へは特に重臣を遣はして藩屬の禮を盡し、年々の貢物を誓つて殷懃に取入つた。興廢隆替の常ならぬ戰國の時代であるから素性の疑はしいのも餘り問題とされないで、擾亂反正の美名の下に國を偷んだのを默認された。領内は豫てから民望を收めてゐたゆゑ能く治まつて、その上に房總の名族の零丁れたのを拾ひ上げて厚く扶持したので益々民望を厚くし、鬼が念佛唱へてるとも知らずに仁義の君と悅服された。

二　妖尼妙椿

それから凡そ二十年經つた。折々は盜人の子の爭はれない爪牙を示し、成上り者の陷り易い僭上の振舞も有つたが、尻尾を捉まるほどの眼に餘つたヘマも働らかないで、怎うなり恁うなり愚民の眼を欺瞞してゐた。これで滿足してこの上增長らなかつたら首尾よく前生涯の積惡を塗蔽してマンマと口を拭つてゐられたのだが、川立は矢張り川で果てる喩の通りに意外の憑物がして、折角薄れて消え掛つた昔の汚染を一層色揚をして天命免れず終に化の皮を露はした。文明の十四年の夏、素藤が小鞠谷を亡ぼした以來、奪つて己れの室とした如滿の以前の側室の朝顏夕顏の二人が疫病に罹つて續いて世を去つた。流石の殘忍無賴の曲者も一度に二人の寵妾を失くした悲みに堪へやらないで鬱々として暮してゐたが、或日の午すぎ、不斗氣晴らしに何氣なく近習の二三人を伴れて高樓へ登つて城下の町を

眺めてゐると何事かあるらしく一團の群集がバラ〳〵と駈けて行くのを見、素藤は怪んで、

「アレは何ぢや？」と近習に尋ねた。近習は伸上つて見てゐたが、八百比丘尼を拜みに參るので御座りませう。」と答へた。

「八百比丘尼とは何ぢや？」と素藤は重ねて訊くと「殿にはマダ知ろし召さぬか、」と近習は答へた。

「若狹に齡八百歲と自稱する神通自在の女僧が御座ります。八百歲と申しますが、一見した處マダ漸く三十そこら、精一杯老けて見ても四十には大分距離があるとしか見えない容顏美麗な女僧ださうで御座ります。三界看通しで吉凶禍福を占ふ掌を指す如く、難病奇病も十念を授ける時は立所に平癒するので活佛の如く難有がられ、若狹の八百比丘尼と言へば隨分遠國までも聞えてをります。この八百比丘尼が先年來、諸人濟度のため國を離れて諸國を行脚してをるといふ風聞を承はりましたが、昨日は突然普善に現れて種々の奇特を示したさうで御座ります。今日あたりは當御城下へ來られるといふ噂を聞きましたが、御城下のアノ混雜は事に由りますと尼御前が俄に見えて町人どもが拜みに參るのでは無いかと存じます。」

「ふウむ、其奴は何か不思議な術でも致すのか？」

「左樣で御座ります。種々の不思議な術を行ふさうに御座りますが、就中諸人が肝を消して忽ち歸依致すのは死別れた親や夫や妻も愛慕の情に堪へ兼ねて、尼ごぜに願ふ時は香を燻いて亡魂を煙の中

に見せるさうで御座ります。」

「何ぢや？　死んだものゝ亡魂を呼寄せて見せる？　ムウ……」と素藤は叫つたが、俄に急立つやうに近習に向つて言葉急しく、「八百比丘尼とやらを呼べ！」

近習は畏まつて即時に比丘尼を迎への乗物を命じた。城下では町人どもが活佛を拜みに雑踏して運好くば今宵のお宿をして御利生に浴するツモリでひしめく處へ城主のお迎へが來て、鳶が油揚を攫ふやうに活佛を乗物へ請じて城内へ舁いで行つた　玄關へは奥利淺木以下の郎黨が出迎へて書院へ通し非時の饗膳を供養して後、更に奥まつた素藤の閑室へと案内した。成程、噂に聞くよりも勝れた容色で、怎う見ても僅に三十路を越したばかりとしか思はれない若々しさであつた。薄墨色の紗の法衣に錦の袈裟を掛けた法體姿に似合はず島娜かで、嬌艶溢るゝばかりに媚いてゐた。

「尼御前、初めて對面致す。身は當城の主人墓田權殖ぢや。」と素藤は鷹揚に會釋した。「弓矢取る身の佛の道には疎いが、尼公の法力は豫てから耳にして渇仰してをつた。この度計らずも法駕を迎へたのは佛縁淺からずと冥加に存ずる。」

「妙椿と申す貧しい修行者、お見知り置かれて下さりませ。」と比丘尼は臆する色も無く平然として、「不束では御座るが御佛に仕へる身・浮世の禮儀には馴れぬ世棄人で御座りますから、何事も寛大に御覽じて御勘辨を……」

「御念に及ばぬ。遠慮やエセ禮儀は身も嫌ひぢや。」素藤は寛濶に笑ひながら、「軍旅には策略も懸引も要るが佛へ懺悔するには眞情を打蒔ける外は御座らぬ。弓矢持つ身の餘り女々しくて恥かしう御座るが、尼公の法衣に縋つてお願ひしたい一義が御座る。一應お話しするがお笑ひ召さる勿。實は去ぬる日身の寵妾、朝顔夕顔の兩人不慮の時疫で引續いて一時に相果てたが、永年の比翼の睦が忘れられず、今猶ほ面影が眼前に仄ついて悶々の情に堪へ兼ねてをる。弓矢の手前、斯樣な癡けた事はお願ひしにくいが尼御前には香を炷いて亡人の姿を煙に現す不思議な祕法を行はせられると承はる。未練では御座るが、尼御前の法力で今一度朝顔夕顔の有りし姿を現して煩惱の焔ゆる思ひを晴らしてはたもるまいか。」と凶暴無殘の剛膽者も戀には顔を赤くして割なく頼むと、

「お道理〳〵お同情致します。」と妙椿は數度點頭きつゝ、「仰せに任して彼世のお部屋樣をお招きしてお會はせ申しませうが、この反魂の祕法は深夜寂靜まつてからで無ければ行へませんから、待遠しくとも今暫らく御辛抱下さりませ。勝手ですがそれまでは氣を靜め心を練るため尼も別間に休息させて戴きます。その間に修法の準備も宜しくお願ひ致します。」と、一々指圖をしてから臥床を設けさした別室に退座した。

素藤は亡き寵妾を眷かしむ思慕の情と、亡魂を寄せる奇術を不思議がる好奇心とで時刻を待詫びてゐる中に追々と夜が更けた。か、妙椿はグツスリ寐込んだらしく容易に起きて來ないので、素藤はヂ

リヂリとして戻かしさに堪り兼ね、自ら妙椿の臥床へ起しに行くと、今漸と目を覺ました處だつた。
「殿よ、急き給ふ勿、忘れは致しませぬ、」と微笑を含みつゝ、悠々と床を出て、水を取らして口を淨め顏を洗つてから、素藤に案内さして準備の整つてる奥の室へ行つた。
妙椿は軈て周圍に屏風を繞らした几案に對つて設けの茵に就き、ヤオラ懷中から香包を出し、香を捻んで呪文を唱へつゝ、几案の上の香爐に炷べた。暫らくすると怪むべし眩きばかり耀いた銀燭が俄に仄暗くなり、香の煙の立騰る末には二八餘りの藹たき美人が朦朧と顯れた。殘んの色香の棄て難いものがあつたにせよ、朝顏夕顏は既にすがれ掛けた姥櫻であつたが、これはマダ眼らんだ蕾が僅に綻び掛けたばかりの初々しい美しさで、豐艶滴たる如く匂ひ覆れて馥郁たる香が四邊に漂ふので、素藤は暫らくウットリと看惚れてしまつた。朝顏夕顏の噎返るやうな爛熟の色香に浸つてゐた素藤は瑞々しい無垢の乙女の美に初めて打たれて、嫣然一笑嬉羞を含んで眼で見られた時は腸を搔揉られるやうな心地して思はず突と起上つて搔抱かうとすると、乙女の姿は忽ち煙の中に消えてしまつた。
「尼御前、アリヤ何者ぢや、」と素藤は太い息を吐きつゝ、「身が所望した朝顏夕顏にも增したこの手弱女は何者ぢや。」
「殿、見そなはしたか、」と妙椿は莞爾と打笑みつゝ、「朝顏殿夕顏殿は如何にお美くしくともこの世におはさぬお方。懋ひに生きて歸らぬ彼世のお方をお會はせするのは却て思ひが增す種子で御座りま

すゆゑ、それより御意次第でお庭へ移して眺める事の出來る增花を御覽に入れた方がと存じての尼が心遣ひ、今し御覽に入れたは里見殿の五の姫君におはすが、殿、あの姫君はお氣に召さぬか……」と素藤の心を誘り立てた。
「ふウむ、」と素藤は太い嘆息を長く引き、「ア、いふ美しい姫を里見殿が持たれるとは知らなんだ。だが、里見殿は當時日の出の勢ひの大國司、素藤風情の小さな城持の妻にはヨモ祕藏の姫を呉れようとは思はれない。」と重ねて失望の溜息を窃と洩らした。
「殿、そのやうに卑下遊ばす事は無い。里見殿には幾人も姫君がおはして今のはお脇腹の五の君におはす。五歳の齡に鷲に攫はれて甲州の山の中で既んでに鷲の餌食となる處を土民に救はれ、妙齡になるまで眞の娘分として育てられ、ツイ近頃里見の姫君といふ事が解つて安房の館へ歸らせ給うたのだから、如何に里見殿の御威勢でも大諸侯へ緣づき給ふ事は出來ませぬ。里見殿と比べてお家柄が低くとも一城の主人でおはす殿が卑下遊ばす事は御座りますまい。」
「ホ、ウ……甲州の民間で育つたと言やるか。名門の娘で下情に通じたものといふが豫ての身が希望で、側室で滿足して正妻を迎へなかつたのはこの難かしい註文に適るものが無かつたからぢやが、民間で人となつたといふは誂向きぢや。里見殿も然ういふ事情のある息女なら多少の身分の不足は不承されさうな事ぢや。だが……」と素藤は首を傾げて、「年齡が少と釣合はぬやうぢやナ。身は最う四

十路を越してる哩。」

「オホ、、、ッ、殿にも似合はぬ御遠慮深い。十や二十の齢の違つた夫婦は珍らしうは御座りませぬ。殿はお若く見えますから、三十そこ〳〵と仰有つてもウソと思ふものは御座りますまい。釣合はぬどころか好い御夫婦で御座ります、オホ、、、。」と煽り立てられて、素藤は相好崩して満悦し、今の今まで悶え惱んだ朝顔夕顔もケロリと忘れ、濱路姫を迎へる歡喜が胸一杯となつて、腹の底から籠上げる嬉さしに留度も無く笑ひ壞れた。

三　素藤の僭上

恁く〳〵素藤は妙椿尼に唆かされ、身の程の辨へもなく里見家への縁組申入れに夢中になつてゐた。處へ長柄郡の榎本の城主千代丸圖書介豐後が重陽の祝儀に里見家へ參覲する途中だと言つて立寄つたので、素藤は好機措くべしと厚く款待し、酒間に里見の第五の息女を娶りたき底意を打明けて斡旋を頼んだ。圖書介は天上の星を望むに等しい素藤の身の程知らずを内心笑止に思つたが、表面は去氣無い體をして快よく諾ひ、左も右くもこれから直ぐ稲村殿（義成の事）へ伺候して大凡の下咄を極めて置くから二三日過ぎて後、正式に使者を立てゝ表向きに申込まれるが宜しからうと打合はせをして直ぐ發足した。

素藤は圖書介の媒酌承諾を滿足して早や事成れる如く有頂天となつて、早速奥利本膳淺木碗九郎の兩人を呼出して旨を含ませ、大禮の使者として供揃ひ美々しく幣物數多を持たして稲村へ遣はした。萬事は圖書介が助才なく取計つて必ず纏めて呉れるものと安心し切つて、離亭に泊め置く妙椿を訪づれ、千代丸圖書介が月下氷人を引受け呉れた顚末を話し、この緣談が成就するは最早疑ひないから、尼御前にも喜んで下さいと、イソ〳〵と吹聽すると、

「殿、安心遊ばすのは早過ぎます、」と妙椿は澁面作つて。「稲村殿は明察の聞えある賢君、左右にも思慮ある老臣が多いから容易に人に許し給ふとは思はれませぬ。糠喜びをして後悔遊ばす勿。」と打つて變つた妙椿の心細い辻占に素藤は興を冷まして悄氣返つた。

「だが殿、安心遊ばすのは早過ぎますが、落膽遊ばすのも早過ぎます。稲村殿の御返事が餘り芳ばしい事は無からうと思ひますが、その時はその時で別の手段が御座ります。萬事は尼の方寸にありますからクヨ〳〵遊ばさずに氣永にお待ち遊ばしませ。」と素藤を力づけて慰めた。

五六日過ぎると果して奥利本膳、淺木碗九郎の兩人は元氣の無い顏をして餘り思はしくない返事を齎らして歸つて來た。稲村殿の仰せには婚姻は人倫の大事であるから雙互の身分年齢の釣合を能く考慮して愼重に計らねばならない。蓑田は京家の出と聞くが身分系圖が定かでない。清和の支れの新田の嫡流の當家と秦晉の好を結ぶ家筋とは思はれない。年齢も亦素藤は既に初老を越えて濱路とは父子

に等しい距離がある。ドコから見てもこの縁は相應しくないから、折角ながら應じ兼ねるとキツパリ突撥ねられた。千代丸圖書介も一應は斡旋したが、里見の家では殿も老臣も頭から對手にしないので取附く島も無く七を投げ、奥利淺木の兩人は散三の不首尾に面目玉を潰して悄々と歸つて來たのだ。

里見が何だと素藤は切齒囓んでカン〳〵に怒つた。新田の嫡流と吐かすが結城では負けて逃げて來た落武者が、惡運強く安西麻呂らの領地を竊んで名門面は盗人猛々しい。素藤は德を施こし義を行ひ民に懷かれて城主に推されたので、勳業武德は里見に劣れるものでは無い。然るに身を謙下つて腰を低くして姻親を求むれば、いゝ氣になつて名門面をして身分違ひと木で鼻を括つたやうに拒絶けると いふは無禮至極であると拳を震はして口惜しがつた。

「殿、お腹立ちは御道理ですが、お腹をお立てになつては御損になります。それよりは殿、お耳をお貸し遊ばせ。」と妙椿は素藤の耳に口寄せて祕計を授けた。「……ね、御合點遊ばしましたか。」「む、成……」と素藤は點頭いて漸く笑坪に入つた。

四　素藤叛逆、詭計を用ひて里見の御曹子を擒にす

その翌る日、素藤は腹心の願八盆作の兩人を召出して、城下の諏訪の三社の社殿の營繕作事を申付けた。富める者から金穀を徵發し、貧しい者には賦役を課し、今年一杯に必ず竣工をせよと嚴命さし

た。領民達は降つて湧いたやうな火急の賦役に内々ブツクサ言ふ者もあつたが、泣く子と地頭の據ろない上に領主の酒色の奢侈といふでは無くて外ならぬ氏神様のお宮の修覆といふのだから、作事の頭人の盆作願八らに無理難題を吹掛けられて過怠や鼻糞を占められ、一村雞儀をしながらも泣寐入して賦役に勤めた。

その中に妙椿は後々の計略まで遺漏もなく授けたゆゑ、最早留まる要も無く、いつまで滯留するは却つて人の疑ひを招くからと素藤に暇乞ひして飄然と何れへか去つた。折から三社の舊の神官は社殿修繕の噂を聞いて舊記を携へて歸つて來たので素藤は再び神官に補任して神事を司どらしめた。恁くて十二月中旬、修繕が落成すると、素藤は三社の神官に附けて淺木碗　郎を稻村へ從者に立て、館山の舊城主小鞠谷如滿が三社の神領を沒し神官を放逐して以來、社殿久しく荒廢したるを豫ての素願でこの度營繕竣成したに就ては三社は源家由緒の舊社であるから國主奉幣の儀を仰出されたいと、鎌倉以來の舊記を添へて申請した。

素藤が三社の營繕をしたのは妙椿の獻策である。里見の御曹子義通が來春は十歳で初甲の式を擧げるので、源家に由緒ある三社の修繕をして奉告のための義通の駕を迎へて　計　をしようと いふのが妙椿の祕計であつた。道を以て謀れば智者も欺かるとかや。稻村殿ほどの思慮ある智將でも御曹子の鎧の着初をし玉ふ折からの源家の氏神の社殿の再興を喜び給うて、御曹子の奉幣の社參の請を嘉納し

給ひ、先度の濱路姫の降嫁を願つた時に反對へて御機嫌斜ならず、手厚く使者を款待して引出物數多を賜うて引取らせた。

狂言が筋書通りに運んだので素藤は小躍して喜んだ。早速腹心の奥利淺木以下の郎黨に命じて糧餉彈藥を目立たぬやうに、ボツ〳〵城内へ運ばして籠城の準備をした。その中に年は暮れて正月となり愈々里見の御曹子の社參の日が近づいた或日、雜兵の一人が城の東門の只ある樹蔭に大きな穴があるのを發見した。試みに潛ると奥は廣くして腰を屈めないでも樂に通れて諏訪の社殿の前の大樟樹の虛洞に突抜けてるのを確認して訴へ出た。素藤は意外な訴へを不思議に思ひつゝ自ら實地を見物し、試みに近習に紙燭を照らさして洞内を探ると果して訴へ通りの廣い地道が通じてゐた。扨ては妙椿尼公の神しき法力で一夜の中に拔穴を作つて祕密の出兵の暗示を與へられたのであらうと、尼公の不思議な神通力を愈々隨喜した。義通社參の折にこの拔穴から一百人、外部から三百人を咄嗟に繰出して挾擊したら何百人の勇士が警護しようとも義通を生擒にするは袋の物を攫むよりも容易であらうと、素藤は北叟笑みてその日を遲しと待構へた。

恁る隱謀が企らまれてるとは神ならぬ身の義成卿は知る由もなく、素藤の願言を容易に聞屆けられて、御曹子の初の鎧の式を濟ました三日目に、約を履んで御曹子を諏訪の三社へ奉幣に遣はされたお供揃ひには譜代の老臣堀内貞行と、杉倉氏元の嫡男直元とを筆頭に小森篤宗・浦安乘勝以下二十

餘名の究竟の勇士に三百人の精兵を護衛とした。館山近くまで來た時、急使が馬を飛ばして追蒐けて來て堀内殿の内室は不慮の病氣に養生叶はず杉倉氏の内方は俄の難產で、御兩人とも神前へは憚りあれば遠慮せよとの御諚の由を傳へた。二人は喫驚して上意を傳へて即時に引返したお使者の踵か〻取るもの取敢へず歸城した。

堀内杉倉に代つて小森浦安の二人が扈從の頭人となつてその晩は大樟村へ着き、新戸の民家を本陣に定められた。館山城からは素藤所勞引籠中の由にて奥利本膳名代として旅館に伺候し、明日の御社參には本膳御案内仕るべき旨を言上した。小森浦安は面接して出迎の勞を犒ひ、主人幼年につき明日は御案内に及ばざる旨を慇ろに陳べた。斯くてその晩はユックリ休息させ翌る朝は未明に起きてその日の部署を定め、心利きたる者を派出して社殿の内外から境内を殘る隈なく細に見分させ、要所々々を嚴重に固め、路次の非常を嚴しく戒めて、愈々の定の時刻に供揃ひ美々しく威儀を作つて、御曹子の前後を嚴かに警戒しつゝ、靜々行列を練つて行つた。國司の御名代としての御曹子の初の御社參であるから社頭の兩側は拜觀人で塡め、取別けて雨空でも無いのに蓑を着た異樣の一團は人目を牽いた。

豫定の通りに本殿と宇佐の分祠の奉幣を最初に濟まし、驀て第三の諏訪神社を指して社頭の大樟の前へ差蒐ると、忽ち耳を劈く連射の鳥銃、若君の左右に扈從する浦安小森の兩老黨はアット聲を擧げる間もなく反けざまにドッと仆れた。

それッ狼藉と、各々屹と身構へをし、田税逸友、苫屋景能以下、幼君を圍つて四方に眼を配つた。その時、警固に繰出した奥利の手の者はドッと喚いて俄に里見の行列に斬込み、復たもや響く連射の彈丸に打たれて田税苫屋を初めバタリ〳〵と算を亂して仆れる傍から手當り任せに矢鱈と斬捲つた。最前から怪しと睨んだ蓑着た異風の一隊は、その時忽ち蓑を脱ぎ、陣笠腹當の雜兵と早變りして奥利の手勢と一つになつて喊の聲を擧げ、遮二無二里見の伴當を突立て斬伏せ、阿修羅の魔軍の如く暴れ廻つた

平日は武勇の譽れの高い、敵に背後を見せた事の無い里見の一黨も卑怯な飛道具の不意打ちに見る見る將棋倒しとなつて算を亂して其處此處に仆れた。中にも近習の侍は選擇つた一騎當千の勇士であるが、或は傷つき或は仆れ、爰を先途と戰ふものも、群がる敵兵に沮てられて若君からは遠く離れた。その時、大樟の空洞から現はれた蟇田素藤、忍び〳〵に若君の背後の方から近づいて斯くとも知らず小太刀を拔いて左右の賊を斫伏せ給ふ若君の利腕を無圖と攫んで引抱へた。如何に勇氣に充ち給ふとも當年取つてマダ十歳の小腕では梟惡怪力の强賊にいかで敵すべき、脆くも小太刀をもぎ取られて、鷲に捉られた小雀のやうに腕の中に抱き縮められた。

この有樣を遠くから瞻めた逸友、景能ら忠義の面々は覺えず聲上げて起たうとしたが身體自由を喪つて刀を杖に起たうとしてはバタリと仆れ、齒嚙みをしつゝ睨まへる時、復たもや釣瓶打ちの一齊射

擊にバタ〳〵仆れて再び起上るものも無かつた　煙に紛れて素藤は小脇に若君を引抱へたまゝ大樟の空洞の中へと消えてしまつた。

頭人奥利本膳を初め礪時願八、平田張益作ら一味の面々は里見の伴當が大方は釣瓶打の彈に打たれて、足腰起たず、無殘の刃に血塗られて蟲の息であるのを幸ひに片端から弄斬りにした。馬物具は雜兵原の盜むに任したのでバッチラがつて掠奪し、凱歌を擧げて城内に引揚げた。

あとは嵐の一としきり吹いてしまつたやうな靜かさ、マダ息のある重傷者の時折洩らす呻き聲が斷續するばかりであつた。軈てドコからとなく一人二人恐々コッソリと現はれた三社の神官や、そこらに小さくなつて隱れてゐた土民達、あたり一面の血腥さい光景に怯氣を振つて慄へ上つた。城主ながらも產靈神をダシに遣つて國司の若君を欺し討ちにした卑怯を爪彈きせざるものは無く、口にこそ出さね謀叛人の榮えた例は古今に聞かないから行末の神罰のほど恐ろしけれと、心に思はぬものは無かつた。取別けて神官は血汐に神域を汚した冒瀆を恐れ、城主の神を恐れぬ不敬を憎みつゝ、左も右くも里人の力を借りて不淨を清めようとする時、不思議や安房の方角から一朶の黑雲が現れて、見る〳〵墨を掃く如く一天に廣がれて、忽ち盆を覆へすの豪雨を降らし、洪水の堰を破つたやうに滔々と流れた。剩つさへ物凄まじい旋風を捲起して其處ら一面狼藉する敵味方の死體を一齊に何方とも無く吹飛ばしてしまつた。

五　素藤征伐

稲村城では堀内杉倉がお供先きから俄に歸城したと聞いた家中の者は不思議に思つた。誰よりも驚したのは不慮の病氣で息を引取つたといふ堀内の妻、俄の難產で苦んでる最中と沙汰された杉倉の妻、兩人とも無事で變つた事が無く、思掛けない良人の歸りを怪訝な顏をして迎へるに二人は呆れて開いた口が塞がらなかつた。どうした事かと二人は直ぐその足で役所へ駈付けると、第一使者に立つた當の本人が覺えが無いどころか、御用繁多で昨日から役所へ詰切で一歩も城外へ出ないといふので益々飽氣に取られた。不思議な珍事もあるもの哉と、居合はす家中は皆顏を見合はして正しく狐狸か變化の仕業に相違ないが、老黨共の不覺は兎もあれ、若君の御身の上こそ心許無いと早速館へ具申して各々評定を凝らした。

斯る處へ城門の衞兵が飛んで來て、唯今突風が吹いて來たと思ふと若君のお供をしたものども數多虛空より振落されましたと訴へた。スワこそ大珍事と早速城門外へ出て見分すると、小森浦安を初め若君扈從の武士二十何名、雜兵一百何十名、各々痛傷を負うて折重なつて悶絶してゐる。百何十名の侍雜兵が重傷を負うて戰場から一度に吹飛ばされて歸城したといふは、古今に聞いた例の無い大珍事と、早速手當をして呼活かすと一人殘らず不思議に息を吹返した。が、小森浦安らは蘇生つたのが

奇蹟で、口さへ利けぬ片息であつたので、二人を初め重傷者は自宅へ引取らして、意外に早く元氣を恢復した輕傷者だけを問註所へ引出した。

が、戰場に半ば悶絶してゐたのが雷雨の中を旋風に捲上げられて夷灘から吹飛ばされて來たのだから、今猶ほ生死覺夢の間を彷徨しつゝ四邊をキヨロ〳〵見廻してゐた。暫らくして漸と氣が付いて、若君社參から素藤謀叛の次第まで逐一落ちもなく陳述して、見す〳〵若君が敵手に生擒られ給ふを知りつゝ、一太刀も手出しが出來なかつた腑甲斐無さ、縛り首に仰付かつても申譯がありませぬと陳謝した。さりながら數にも足らぬ我々までも神風に吹かれて、一端悶絶したものまでも蘇生つたを思ふと、若君の御身の上にも凡慮の測り及ばぬ不思議の加護のあるべきは、夢疑ふ事無かるまじと神助のほどを畏み〳〵申述べた。

恁る處へ早馬飛ばして訴へて來たは諏訪三社の祠官であつた。館山城の氏神の祠官でこそあれ城主の陰謀には全く與からない忠義一圖のものであつて、素藤の奸謀から謀反の顚末、不思議の旋風に敵味方諸共に遺棄した死體を吹飛ばされた中に、賊徒の首級のみが街道筋大木に曝し首に梟けられた不思議の神罰まで一々見屆けたまゝを事細かに言上した。初めは敵の間者では無い乎と疑つて、中には屹と糺明したら素藤反逆の眞相も一層精しく解らうといふものも有つた。その中に危ふく敵地を脫して歸つて來たものが一人二人と追々集まつて五六十人、代る〳〵に訴へた反逆の顚末や敵地の動靜が

符節を合はしたので、祠官に對する疑ひも晴れて手厚く勞を犒はれ、そのまゝ城中に留め置かれた。

兎もあれ容易ならぬ大事件と、自ら咎を引いて引籠る堀内を除いて三家老　君の御前に出仕して軍議を凝らした。素藤反逆の根本は身の程辨へぬ緣組を拒絶したのを遺恨に思つての非謀で、暴慢無禮奇怪至極であるが、一夜の中に地道を鑿ち、堀内杉倉らの眼をさへ昧ましたは尋常事で無い。正しく鬼神を役し、幻術に通ずる左道の曲者に相違無いから小敵と侮どつて油斷をすれば思はぬ不覺があらうも知れぬと、深謀沈毅の義成卿は細さに出兵の用意を命ぜられた。

斯くて文明十五年正月二十一日軍旅愈々整ひて三千餘騎、杉倉直元を先鋒とし堀内貞行を後陣とし義成卿自ら中軍を帥ゐて逆將蟇田素藤出征の途に發向された。軈て房總の國境なる市坂を越え、榎本椎津廳南の三城が日頃素藤と疎からぬ間で、向背定かならぬを早くも偵知して軍を二つに分ち、堀内杉倉をして先づ榎本を包圍せしめた。義成卿は曩に義通に扈從して不覺を取つた小森篤宗の子高宗と浦安乘勝の弟友勝を先鋒とし東六郎辰相を後陣と定めて次の日新戸に着陣し、一日人馬を休めてその次の日味旦館山城に押寄せ、要害の瀨踏みに鼓を鳴らすだけにて退陣し、その又次の日東六郎を後門に差向け、前後一齊に攻蒐つた。

城兵らも豫て待構へてゐたので、箭窓を開いて矢石を連發して應戰したが、軈て城樓の上に武者五六名現れて聲高らかに呼ばゝつた。里見殿に物申さん、これは蟇田權頭腹心の家の子礪時願八、平田張

益作なるが、主人權頭、曩に鄰郡の城主を說いて國主に歸順せしめ、身親からも恭順して敢て二心なく里見殿に仕へましたは里見殿も知ろし召される筈、然るにこの度權頭の妻に五の姫を申受けたく、禮を厚うして申入れたを權頭の家系を侮どつて素氣なく拒絕されたは誠に心外の到、御曹子を館山城に迎へ奉て里見殿と旗鼓相見ゆるは權頭の本意にこれなく、本より御曹子を害し奉る心は寸毫もこれなく、權頭多年の忠誠をお思召されて權頭の素願を聞屆けられ、五の姫を卽時に當城に送り給はば義通御曹子を引換へに返し奉らん。若し又これほどに申してもお聞屆けなければ權頭も亦武士の意地、里見殿の眼の前にて義通御曹子に憂目を見せ奉らんと、雜兵に吩咐けて猿轡喰ました義通御曹子を牽出して城樓の柱に縛しつけ、明晃々たる大刀を御曹子の胸に擬して、里見殿返答されよと高らかに呼ばゝつた。

一擧に敵を屠つて素藤を生擒にせんずと手ぐすね引いた寄手の猛者も若君を質に取られては手の出しやうも無かつた。齒ぎしり嚙んで城を睨まへる外は無かつた。深沈大度の義成卿も汚なき敵の振舞に御氣色有繫に穩かならず、卑怯未練の素藤哉、幼なき義通を人質として飽くまで非道を遂げんとするは憎さも憎し。その義ならば義成、不便なれども和子を先づ我が遠矢に掛けて後、一擧に城を踏破らん、兵ども續けと鞍の前坪叩いて驀地に進み、城樓を仰いで弓を滿月の如く彎きしぼつた。

左右の近侍は驚いて駈寄つた。そは餘りに御短慮である、斯くては敵に乘ぜられるやうなものであ

る。御憤りはさる事ながら爰は臣らに御任せあつて暫らく御陣を御引き遊ばされたいと、義成卿がイツカナ諾かず逸り給ふのを左右交交諫止した。恁る處へ後門へ廻つた東六郎、君の御立腹尋常ならず、自ら御曹子を遠矢に射玉はんとする火急の大事を注進されて一散に馬を飛ばして來た。

「暫らく〳〵。」と聲を掛けつゝ、東六郎は義成卿の御馬前に下乘し、「かゝる事もあらうかと、瀧田の大殿からの豫ての御内諭にて、御曹子も御無事なら君の御恥辱にもならざるやう不肖ながら東辰相取計らひますに由て、君は暫らく新戸に御退陣遊ばされたい。」と言ひつゝ義成卿の馬の鑣を取つて後へ牽き旋らし、それッと一鞭當てれば馬は一散に駈出した。左右の近侍ども逸早く卒伍を纏め、主の前後に隨つて隊伍を亂さず新戸に引揚げた。

城内では斯くと知つて城門を開いて、素藤自ら軍を帥ゐて打つて出た。斯く有るべしと豫て期した東六郎後門から廻つた兵を合はして數百騎、義成卿が引揚げ給ふを見送つて後追來る素藤の軍を好い加減にあしらつて且つ戰ひ且つ走つて誘き寄せ、豫て手を分て埋伏さした後門の他の一軍をして不意に起つて背後を衝かせ、敵の狼狽するを見て俄に取つて返して前後から狹擊した。敵は益々狼狽して周章てふためき、近頃素藤の旗下に參じた野武士の猛者曾平率良井の兩個を始め擊たれるもの數を知らず、總大將素藤は逃ぐるを射られてアワヤ落馬しさうになつたを左右に從ふ雜兵に助けられて命からがら逃げ歸つた。

この日の戰ひ、敵の首級三十餘、死傷俘虜二百餘名、味方は僅に十四五名にて十二分の勝利であつたが、新戸の陣所に待ち玉ふ義成卿は猶ほ御氣色斜ならず、今日の戰ひ味方十二分の勝利は切めても の滿足であるが、敵の侮辱に遭うてオメ〳〵と退陣したは心外千萬、父君の仰せとならば是非も無いが御内諭のほど猶ほ精しくは承らんと仰せられた。

東辰相暫らく額づきたる面を擧げ、先刻の御忿怒到底臣等が面を犯して諫め奉るゝも御聞濟みあるべうも思はれざれば、君が御孝道を幸ひとし、大殿より別段御内諭を承はり、義にこれなきが大殿の御諚と申して諫め奉つたので、臣として君を欺き奉るは誠に恐れ多い次第であるが、窮する時は親を持出せと下世話に申す通り、大殿の御名を拜借して君の御怒りを鎭め參らさゞる時は若君の御身の上なり且は味方の不利益であると、短慮は功を成さゞるを諄々として諫め參らせた。義成卿、根が聰明の君であるから、一端は一徹に逸り給うたが、東辰相の思慮周密な忠言に早くも悟らせられて、辰相縱令父上の御内諭を承はらずとも、父上の遠謀深慮は正しく辰相の言ふところと同じからんと、辛くも千慮の一失を諫止した辰相の忠言を嘉せられた。

恁る處へ老侯の御使として筮崎照文は數多の小荷駄を牽かして參着した。義成卿は辰相と共に迎へて恭やしく恩を謝し、この度の敵は小敵なれども侮り難く、義通を質に取つて脅かすが故に一氣に攻落し難く、味方殊の外の苦戰であると語られた。照文も亦、老侯が項羽が劉太公を縛して高祖を惱まし

た故事を語らせられて味方の苦戰を察せられ、斯の如き敵に對しては忍び難き侮辱をも忍び、心を大きく氣を長く持つて決して功を急いではならぬと吳々も仰せられたと言上した。辰相の慮かゝ處、老侯の顧慮し給ふところ、皆齊しく符節を合はす如ければ、義成卿も益々悟らせられて父君の深慮を身に染みて感ぜられた。その翌る日復もや二千の兵を繰出されたが、唯軍容を盛んにして城を遠卷きするのみであつた。素藤は素より先度の敗戰に懲りて再び寄手が挑まず、城門深く閉ぢて鳴を鎭めてゐた。

六　神童出現

斯くて毎日城に押寄せて陣列を布き、旗差物を風に飜へし、時折は陣鉦太鼓を鳴らす事もあつたが打つて出もせず攻めも蒐らず、互に睨み合つて彼是三旬餘り、瀧田にても味方の退いたといふ消息も聞かぬが、敵を破つたといふ便りの無いのが戻かしかつた。恁ういふ時、切めて犬士の一人もゐたらと老侯もお思召されたが、ツイ鄰國の武州の穗北に歸つてゐるとは風の便りに聞いてはゐれど、俄に犬士を呼返すは里見の家には犬士の外に人なきが如く、餘所の聞えも面白からずと、左さま右さま思ひ惱み給うて後、不斗近頃久しく富山の麓の大山寺へ詣で給はぬのを憶出された。神去り給ひて早二十年、年々の忌日は本より折々毎に大山寺へ詣でゝ菩提を弔らはせられたが、富山の奥は急流に塞か

れて山賤木樵さへも通はなかつたのが、今年は不思議に水涵れて、徒歩にて川を渡れる由を聞し召され、久方振にて姫の墳墓を訪はせられ、靈驗顯著なる姫の精靈の加護を祈らばやと思し立たれ、俄に微行の御墓參を仰せ出された。

お伴は昵近の蜑崎照文を筆頭に東峯萌三、小水門目、鮹船貝六郎ら近習の壯佼四五人、その外雜色下部四五十名を從へさせられたが、大山寺にて讀經供養を營んだ後、登山の途に就かせられる時、供人多きは却つて不便なりとて、是非とも御供申上たく願つた照文をさへ許し給はず、僅に三人の近習の外は皆麓にて待つべしと仰せられた。その上ならず東峯には姫へ手向ける水を酌む馬柄汐と花とを求めに中途から返されて、主從三人墳墓さして山又山と分け登られた。

驀て深山の奥まで踏分けられて二十年前に伏姫が朝に花を摘みて夕に水を汲みて佛に供養された岩室の近くまで來られた。主從三人暫らくは靈場佳景に看惚れ、今昔の感慨に耽る時しも、木立の蔭よりヒヨウふつと放した征矢、小水門目は高股を射られてハタと轉ぶと、共に二の矢は忽ち飛んで來て鮹船貝六郎の膝を篦深に射して苦と叫びもあへず仰向けに仆れた。

忽ち左右の木立より現れ出づる曲者五六名、てんでに竹槍を振扱ひつゝ、ヤヨ義實我々どもは昔年汝に亡ぼされた麻呂安西神餘の家の子である。幾春秋を薪に臥した甲斐あつて今ぞ初めて亡君の怨を報ゆる時が來た。義實覺悟と左右から槍を扱いて突いて來た。

義實公は一足あとへ下つて御佩刀に手を掛け給ひつ屹と睨まへた。その時、復たもや木の蔭から天地に響く聲高らかに、曲者退れ、推參なるぞと走り出でたる大童子、身の丈はマダ三尺四五寸ばかりであるが筋骨逞ましく肉肥えて、童形ながらも自然と備はる威風堂々、六尺ばかりの樫の棒を輕げに持つて老侯を背後に圍つて突立つた。曲者どもは思はず タヂ〳〵と引退つて、音に聞く坂田金時の再來乎、左なくば昔咄に傳へられた桃太郎の亞流乎と呆れて暫しは躊躇つたが、怪童にせよ神童にせよ乳の香失せざる小兒の分際で、シヤラ臭い、牛若もどきの棒切れ三味、命知らずの小頑童めと勇氣を取直して曲者ども、劉々と槍を扱いて篠突く如く突いて蒐つた。

童子は輕くあしらつて左右へ拂つたが、曳ッと一聲喚いて左右一度にケラ首を苧殼の如く叩き折ると同時に飛込んで四人の曲者を一度に叩き倒し、素早く逃出す一人を取つて押へようと追蒐けたが、逃足早く木立の中へ紛れ込んで忽ち姿を搔消してしまつた。取つて返して動きもやらずヘタ張り伏す四人の者を用意の藤蔓でヒシ〳〵と縛り上げて傍の松へ繫いでしまつた。

軈て下座に手を突いて恭やしく額突き、「それがし事はお聞及びも候はんが里見のお家に宿緣ある犬士の一人犬江親兵衞仁にて候。」と名乘を上げるに義實公、豫て犬士の最年少者たる親兵衞が惡漢舵九郎の虐手にアワヤ生命を絕たれようとした時、不思議な神隱しに遭うてそれより數年皆くれ行方が知れなかつたのを知ろし召されてるので、この奧山の無人の境に突然出現して端なくもこの危急の

場合に際會した奇遇を驚きもし且つ滿足もされた。

親兵衞が神隱しに遭つたはマダ東西も辨へぬ頃であつたが三度の食事、四時折々の衣類まで何處からか運ばれて六年この來養ひ給ひ、靈祟仙果の奇特で身長體重共に尋常ならずメキ〳〵と成長した。

搗て〻加へて手習讀書、弓馬槍劍、文學技藝等まで神女が敎へ給ふものから文武兩道通ぜざるなく、マダ九歲の童であるが天授の力量早業は怪しきまでに上達して人間業とは思はれなかつた。然るに神女は平生現れ給はず、同じ巖室に起臥する神童の親兵衞の眼にさへ用ある折々の外に出現し給はなかつたが、今朝忽然と現れ給ひて、汝をこの岩室へ伴れて來て早や六年となつたが今こそ人間界へ戻す時が來た。今日我が父君墓參に來給ふが、豫てから父君を仇と覘ふ五人の曲者待伏して父君を襲ひ奉るゆゑ、汝は曲者を退治して初見參の功を立て、且つ我が弟今や逆賊素藤に嫡子義通を質に取られて合戰殊の外難義に及べば、汝は單身敵城に入つて甥義通を救出して弟夫婦の苦勞を慰め里見の家を安泰ならしめよ。さらば汝との面會も今日限りぞと宣はせられ、寶刀一口と錦の肌着を記念に取らせて忽ち消失せ給ひぬと剛氣の親兵衞も產みの母に增した長の年月の養育の御恩を偲びつ〻、今更に名殘の惜しき御別れを眷かしみて今ぞ初めて見參する前世からの宿緣ある主公の前に拜伏した。

義實公は豫てからこの宿緣深き犬士の一人たる小兒があのまゝ不慮の遭難に往方も知らず世を早うしたと思はれなかつたが、今日この奧山に出現してこの身に仇なす曲者を取つて押へるのみならず、

孫義通の一期の大厄を救うて逆賊退治の功を建てようとも豫期されなかつたので、今更ながら神靈の冥助の長きを身に浸みて感嘆された。さるにても鮪船小水門の二人が獵箭に命を殞したは不便な事をしたと仰せられるに、親兵衛は少しも周章てた氣色なく、二人の傷は窮所とも思はれざるに斯くまで脆く息の絶えたるは察するに毒箭ならんが、それがし豫て神女より賜はつたる神藥ありと、腰に下げたる藥籠から逸早く五六粒出し、嚙み碎いて早くも傷口へ塗りつけ、剩れる藥を喰ひしばつた齒を押開いて口中へ注ぎ入れ、清水を汲んで含ませつゝ掖起して二つ三つ背を叩くと忽ち息を吹返した。

二人は恰も眼が覺めた如く四方をキヨロ〳〵見廻してゐた。が、靈藥の奇特で傷も癒えれば、痛みも去つて、老侯の御運の日出度きを徐ろに祝し、傍に侍する親兵衛を不審しげに左見右見して、御邊が犬江親兵衛氏であるか。神隱しに遭つて以來の奇蹟は夢現の間に承はつたが、聞きしに勝つた器量骨柄、初見參の功名と言ひ、神慮のほどこそ尊けれと、數度感嘆しつゝ、親兵衛に初對面の辭誼を述べた。

さるにても里見の御威勢をも憚らず蟷螂の斧を揮つた奇怪至極、察するは逆賊素藤の間諜の者ならん。いで一穿議仕らんと、二人は早くも手頃の枝を折取つてピシ〳〵と鳴らしつゝ、「汝等は何者だ？　何者に賴まれて狼藉に及んだ？　さッ、白狀せい！　愚圖々々すれば痛い目見せるぞ。」と睨めつけた。曲者どもは意久地なく、我々どもは御推量の如く素藤一味の者と直ぐ白狀した。が、これ

には些か來歷がある。自ら非を飾つて罪を免れようとするのではないが、事長くとも聞し召せと、四人は代る〳〵に身の上を言上した。一人はその昔義實に亡ぼされた安西景連の再侄安西出來助、一人は麻呂信時の同族の麻呂復五郎、又一人は神餘の家隷天津兵内の弟九三四郎、今一人は安西麻呂にも神餘にも由緣は無いが任俠を賣物にする俠客荒磯南彌六の乾兒の墜八にて、逃げたのが卽ち南彌六であつた。麻呂安西を初め神餘の一族も家亡びた後も暫らく世に隱れ流浪してゐたが、素藤夷濱の城主となつて後、安西麻呂等の子孫を尋ね出して厚く扶持せんと觸れさしたので、系圖その他を具して家再興を申出た處が、素藤は殷懃に等閑ならず管待して手厚く俸祿を宛行つたので、皆素藤を德として悅服してゐた。然るに素藤が名家の亡びたを尋ね出して再興さしたのは、流れ渡つた他國者の民心を攬る道具に使つたのだから次第に祿を減らして邪魔者扱ひとし、その本心も見え透いたから片時も安心してゐられなかつた處へ始まつたのがこの度の合戰で、或時素藤は三人を呼出して、汝等が故主の仇を報ゆる究竟時であるから窃に瀧田へ行つて義實が暗殺して來れ、義實だに首尾よく打果したら里見の軍は忽ち潰へて素藤の大勝に歸するは火を覩るよりも明かである。さすれば房總一圓は素藤の手に入るが故に安西麻呂神餘の舊領も復して汝等に與へんと密々甘言を唱はした。出來助復五郎らも素藤の待遇がこの頃冷たくなつて安閑としてゐられなくなつたので、故主の仇をも報い素藤への忠義立てもしてアワよくば安西麻呂の舊領を再び手に握らうとする慾も手傳つておぞくもたばかれた。そ

れから後は瀧田へ來て日日城下を徘徊して容子を探つてる中に、不計小耳に挾んだのは老侯が微行の御墓參であつた。殊にこの度は富山の奥の激流が水涸れがして岩室までも詣で給ふといふ噂を聞いて小躍りした。お微行とあらばお供の人數も知れたもの、殊に道幅の狹い奥山では近習の外にお供する者はあるまいと先廻りして待伏せた處が、果せる哉お供は僅に二人だけであつた。五人のものは今日こそはと、もう本望を達した氣になつて、先づお供を征矢に射留めて擊つて出ると、天から降つた乎地から湧いた乎、思掛けない神童の出現で、「我々どもは忽ち手玉に取られて言甲斐無くもかくの次第。」と四人は消えも入りたき風情で、雙手を縛められたまゝ鱠伏した。

義實卿は安西麻呂は里見が亡ぼしたので無くて自ら求めて亡びたのである、神餘に到つては義實は神餘の逆臣定包を誅して光弘の仇を報じてやつのだから義實を恨むは筋違ひである、三家共に亡びたのは天意で義實の興かる處に非ずと、義實は當時の麻呂安西の不義不信、神餘の政治の治まらなかつた顚末を詳かに示して、神餘は本より里見と事を構へたので無いから子孫が申出たなら再興させるは言ふまでも無い。安西麻呂と雖ども先非を悔いて義實に謝するなら、何時までも執念く祟つて祖先の祀を絶やさせる義實では無い。荒磯南彌六とやら又その乾兒の墜八とやらは義實又は里見の家に恩も怨も無いのだから一時の任俠に逸つて無益の狼藉に及んだのであらうが、順逆を辨へないで正理の公道を踏み違へたのは惜むべく憐むべきであると義實公は何度となく嗟嘆された。四人の曲者は今更

の如く君の大海の如き度量に恥ぢて暫くは顏を得上げなかつたが、アタラ任俠を磨く潔氣な男を惜しい事をしたと老侯の仰せられるを聞くと等しく天津九三四郎は首を上げ、やつがれ如きは物の數には候はねども墜八の親品の南彌六は町人でこそあれ用ひ給はゞ物の役に立つ男、あれをこのまゝ取逃がして當地の次第を素藤方へ知られては面白からざる事もあらん。不知案内の山路に迷うて其處らに必ず愚圖々々して……」

「如何にも……恁うしちやゐられぬ、」と小水門目、鮹船員六郎逸足出して追ひ蒐けようとしたのを、「お身らは待ちね、山路に昧きお身たちよりは案内知つたそれがしがいで一走りと親兵衛が走り出さうとした時、

「曲者は召捕つて候。」と木立の中から親兵衛を呼留めたは鬢髯に霜を置いた鐵鑠たる翁、手に扑刀を携へてヒシ〳〵と縛めた曲者を牽立て、あとから附隨ふは荒梼の甲斐々々しき扮裝した老媼、義實を見ると端折つた腰を卸し、手ばさむ薙刀を傍に置いて兩人共に恭しく拜伏した。

七　親兵衛單騎敵城に使ひす

義實は飽氣に取られた。神隱しに遭つた親兵衛が六年振にてゆくりなく現はれたさへ思掛けない奇遇であるに、見も知らぬ老翁老媼が左も親兵衛の附人である如く無人の奥山に住つてゐて、忽然とし

て現はれようとは愈々益々思掛けなかつた。

「大殿には初めて御目通り仕るが、やつがれ事は里見のお家に宿縁深き犬士の一人犬山道節忠與の老僕姥雪與四郎めに御座ります。」と恭しく首を下げた。

さては故主の道節を荒芽山に匿ひ、上杉勢に圍まれたのを一手に引受け、道節以下五犬士を立退かして後、火を放つて家諸侶に自焚して勇敢なる最期を遂げたと聞いた與四郎音音の老夫婦かと、義賢公は世にも不思議な初對面に打驚かれた。

その時二人は既に猛火に包まれてゐた。アワヤ紅蓮に呑れるのもモウ一瞬といふ時しも、煙の中に神々しき神女の姿現れて、腰掛け給ふ犬の絆を二人の前へ投げられて、これに縋れと宣はせられた。夢中の二人は覺えず綱に掴まると見る〳〵虚空に舞登つて、何處とも宇宙を翔つた詰の朝、偶と氣が附いて眼を明けば身はいつの間にか惘然として、見た事も無い山蔭に佇立んでゐた。只見ればマダ東西をも辨へぬ年配の幼子が淋しさうにもなく單獨で遊んでるので、爰は何處の山でお主は里の童かと訊くと、爰は安房の國の富山といつて國司里見殿の姉君伏姫神を祀る人里離れた靈山の奥であると年には長せた口吻で、我は里見殿に宿縁ある犬江親兵衛といふ下總市川の船宿の小悴であるが、姫君神靈の冥助で大難を助かつて數日前からお山のお世話になつてる。伯父御は矢張り姫君に由縁ある犬山道節の家來の姥雪與四郎であらう。伯父御の大難を姫君が助けてお山に伴れて來給ふのは疾くより知

つてるが伯父御は與四郎叟では無い乎、圖星を指され、與四郎は二の句も繼がれず呆れてしまつた。

爰で與四郎は神童の親兵衛から里見の姫君の義烈から犬士の宿縁の一伍一什を聞き、繋がる縁の輿四郎も、亦姫君神靈の淺からぬ冥助を蒙むつて萬死に一生を得た神恩の忝けなさを感銘した。その上ならず靈異は啻だ夫婦二人の上のみでなく、媳の曳手單節も亦神靈の導きにて疾くにこの靈山に遁れ來て加護されてゐゑと知つて愈々神恩の洪大なるを肝に銘じた。その日二人は力二尺八の首を鞍の前輪に結び、落馬せぬやうにと身體を緊と鞍へくゝしつけ、駿馬へ乘つて一足早く小文吾に送られて荒芽山を落ちたが、山を下りると麓で野武士に要撃され、追はれた果が鳥銃を亂發されて一發馬の臀部を射貫くと、馬は忽ち一聲嘶いて跳上ると共に窪地に駈出した。小文吾とも離れ〳〵になれば二人も馬上で氣を失つて奔馬の飛ぶまゝに野越え山越え武總を中斷し房州を蹴散らして、一氣に靈山の奥へと分登つて爰まで來ると忽ちハタと斃れてしまつた。臀部から腹部へ深く貫通した銃創で、命は疾くに絶えてゐたのが上州の國境から眞一文字にこの靈山を目指して突破し、奥山深くまで兩女を送るとバッタリ倒れてしまつたは全く神靈の導き給ふ奇特と、與四郎夫婦は親兵衛に案内されて現場へ來て見て喫驚した。急いで兩女を鞍から釋いて介抱すると忽ち息を吹返し、思掛けない勇姑を見て不思議な顔をしつゝ四方をキヨロ〳〵見廻すので、與四郎夫婦は言葉急しく昨日からの一伍一什を搔摘んで話して聞かせ、互に無事を喜び合ひつゝ伏姫神の靈驗冥助を畏んで、神靈おはす方を親兵衛和子か

ら敎へられて伏拜んだ。

不思議はマダそれだけに留らなかつた。兩女と力二尺八とは唯一宵の契で姙娠つたが、その翌る日からの動亂に親子夫婦離れ〳〵になつて、姙娠つたのをさへ氣付かなかつた。然るに不思議や靈山の神氣に觸れると、暫らくして腹部は忽ち脹らみて、靈聚仙果の奇特にや、三十日ばかりを經ると二女は恰も同日同刻、俄に產氣附いて安々と身二つとなつた。亡夫の名をそのまゝに曳手の宿したのを力二郎單節の產んだのを尺八郎と名を附けて思掛けない亡夫の忘れ形見、爺孫のためには初孫を授かつたのを偏に神女の加護と畏んで蝶よ花よと大切に掛けて育て上げ、蟲の氣もなく健かに今年六歲の春を迎へた。人の住まざる富山の奥も親兵衞を主と仰いで花咲の爺孫を初め世に美しき忠孝節義の寡婦と孤兒との一家樂しく幾春秋を暮してゐた。

義實公は一々點頭いて聞召されつ、凡慮の計り及ばぬ神助の畏さを數度感嘆された。

「やつがれども卑しき凡夫・神女が眼の前におはすと承はつて尊き御姿を拜む事は叶ひませぬが、唯且暮に和子が指さす方を伏拜んでをります。」と與四郎は再び言葉を繼いだ。「然る處今朝、親兵衞和子宙を飛んでやつがれ親子の許へ來られ、素藤叛逆から國司御出馬の逐一、御曹子人質に取られ給ふため味方苦戰の顚末を物語られ、それに就き瀧田の大殿樣、味方の勝利を御祈願あるため今朝富山へ御參詣あらせられるが、豫て瀧田へ忍込みたる敵の間者ども斯くと知つて、御登山の御道筋に御待

伏して容易ならざる大事を企らむを姫君神靈知ろし召され、今朝親兵衞和子を召され速かに兇賊を平げて大殿樣の御危難を助け參らし、これを機會に君の見參に入り、御奉公初めに素藤を生捕つて御曹子を御救ひ申上げ兩館の御心配を安んじ奉れと姫君神靈の御示しがあつた由、就ては曲者の五人や六人は和子一人の神授の早業にて足るが、汝も亦この際忠勤を勵んで大殿樣へお目通りするが神慮に叶はんといふ和子の心添に老耄れながらも勇み立ち、支度そこ〳〵親兵衞和子より一足遲れて罷らんとする時、跛牽き〳〵來蒐る怪しの曲者、必定親兵衞和子に伐洩らされの狼藉者と見て、老を忘れて飛付きざまに引組むと、手剛い奴と思ひの外なる弱腰にて、直ぐ組敷いて繩を掛け、意外の功名仕りましたのは全く以て上の御威德で御座ります。」と與四郎夫婦は五人の曲者の中でも一段筋骨勝れて逞ましい大男を高手小手にヒシ〳〵と縛めて、御前間近に牽据ゑつゝ委細を精しく言上した。

義實公も夫妻一對の義烈に大方ならず感服されて、噂に聞いてゐたが、目のあたりに潔氣な起居振舞を見て聞きしに勝る心地がする、曳手單節とやらも近くにをらう。孫諸侶に召出して目通りさせうと仰せられた。與四郎はハッと答へて音音と共にイソ〳〵と小蔭に控ゆる媳と孫とを召連れて遙か引下つて恭しく額づいた。

「曳手單節とやら、汝達姉妹の貞節は豫てから聞及んでる。」と義實公は溫顏に溢るゝ慈悲の色を湛へて、「この上とも舅姑に孝行を盡して朝夕柔しく介抱つてやれよ。汝達の夫の事も承はつてをる。

弓馬槍劍にも達した天晴の若者を惜い事をした。形見の子を宿してゐたのは何より……坊よ。」と二人の幼子を近う召されて頭を撫でゝ、「早う大きうなつて父のやうに豪くなれよ。」と仰せられた。

與四郎も音音も忝けなさに鰭伏して暫らくは顏を得上げなかつた。曳手單節は猶更亡失を憶出して俄に迫り來る涙を制め得なかつた。伏姫神の御利生で一期の大難を免れて尊い靈地に住はせて戴くだけでも下人の身に餘つた果報と朝夕御恩を伏拜んでをりました處、その上ならず貴いお方にお目通りをして數ならぬ孫の孤子をまで憫れませられた難有い御沙汰を下し置かれるといふは、餘りに恐れ多くて勿體無いと與四郎一家は難有涙に掻暮れてゐた。

不思議な奇遇の長物語に扈從の面々は本より縛められた囚人達まで皆君德の偉いなるを仰いで前非を悔い止まなかつた。中にも慚媿を一しほ面に溢らして感激したのは最後に與四郎の繩に掛つた荒磯南彌六であつた。面魂の尋常ならぬのでも知られる剛膽不敵の曲者にて、本より命を投出しての仕事であるから、運拙なくして捕はれたからとて屈する氣色なく、打撲の痛みさへ無くば與四郎如き老耄れに易々生捕られる男で無いと、縛められながらも昂然として同類の俯甲斐無さを後目に掛けて冷笑つてゐたが、聞くとも無しに與四郎の長物語にいつとなく牽付けられ、世に比ひなき姥雪一族の忠孝節義に一方ならず感動した。それにも勝して義人の死を惜みその遺孤を矜れませ給ふ仁慈の君德には飜然として、昨非を悟る悔恨に身を慄はしてポロ〳〵と落涙した。

「南無六とやら、汝は安房の俠客洲崎無垢三の外孫といふでは無い乎。」と親兵衛はヤオラ南無六に近づいて、「それがしは汝の外祖父の義兄弟柚木朴平の曾孫に當る犬江親兵衛と申す者だ。祖先が事を侶にした同志であるから、主家の再興を謀る汝等の苦衷には同情するが、なぜ順逆の道を辨へて大義のために逆賊を誅伐し給うた里見殿にお縋り申さぬのだ。奸佞邪智なる野武士上りの素藤に唆かされて故主の仇たる逆徒を亡ぼした恩を裏切つて仁義の君に刃向ふとは何事だ。大父の汚名を雪めようとする志は汝も我が父山林房八も同じであるが、汝が桀の狗となつて堯に吠ゆるの誤ちを再びするに反對へて我が父は里見殿に宿緣ある犬塚氏の身代りとなり、身を殺して仁をなす善根を積むが故にそれがしは大難を免がれて不思議な冥助を蒙むつてをる。又そこに縛められてる天津九三四郎の先代天津兵内と共に君の先途に立つて陣亡した那古七郎の末は我が伯父犬田小文吾といつて、それがしと同じく里見殿と前世からの宿緣なる恩顧の家臣である。同じく神餘の家の忠臣であるが、子孫の受くる榮辱禍福が此の如く相違するは皆その心掛けに由るのである。」と道理せめて懇々と諭した。

南彌六初めその他の囚人も皆、夢の覺めたやうに誤失を悔いて、身は縱令八裂にせらるゝとも最早恨む所は無いと只管陳謝して止まなかつた。左も右くも瀧田の獄に繫いで安房殿の下知に從ふべし。直個罪を悔いたものならばその時に命乞ひして取らせようと義實公は仰せられた。

恁る處へ塚へ手向の花と水とを取りに麓へ下りた東峰萌三を先きに、お道筋を案じて堪へ難さにお

躇を追うた蜑崎照文を初め近習の兩三名が來て、最前からの一伍一什を側聞きして且つ驚き且つ喜んで日出度き君の御武運を御祝ひ申上げた。義實公は各々大儀を犒はれつゝ囚人五人を疾く將て瀧田の獄に繫げと萌三に引渡され、目は音音曳手單節を稈子諸侶大山寺へ召伴れよと命ぜられた。與四郎と親兵衞とは墓詣する嚮導せよと、二人を案内として照文貝六らをお伴に姫君のお墓から犬塚馬塚に花を手向け、尾上の觀音堂へまで詣でられた。暫らくは遠近の眺めに時を過して、驀て下向の途に就いた頃は日は既に山の端に沈み、宵闇の暗い山路を主從五人下りて來た。中途で松明を照らした出迎へに出會つて供廻りに加へ、麓からは迎への者が牽いて來た乘馬に召し、追々數を增したお伴の面々は左右前後を松明提燈で照らさした。

稻村城では館が素藤征伐に出征されたあとを義通御曹子の弟次丸が守らせられたが、青海卷村より駿馬二頭を獻つたのを、一頭は館山の御陣へ牽かし、一頭は瀧田へ獻上に苫屋景能を使者に立てられた丁度老公は富山へ御墓參のお留守中だつたので、景能は御跡を追うて次丸殿から駿馬獻上の披露をし、一足先きへ下山して馬を牽かして中途までお出迎へをした。

親兵衞は最前景能が駿馬獻上の披露をした時、疾くこの馬を拜借して素藤征伐を仰付けられたいと願つて許されなかつたが、景能が牽かして來たのを初めて見ると高さ七尺に餘る連錢葦毛の想ふに勝した名馬であつて、君の仰せに由つて兩三遍輪騎を試み、この馬を馳らして今宵の中に館山城へ乘込

まうとする念に堪へなかつた。義實公も最前は、如何に神童なればとて馬無き山に育ちて馬乘る術に長ずる筈が無いと手練を危ぶんで許されなかつたが、彼程の荒馬を自由に乘扱す手並を見屆けて感淺からず兎も角も鞍鐙取揃へて汝に取らすから我が露拂をして供に立てよと仰せられ、伴數多を召具して大山寺へと急がれた。

寺へ歸つて準備の晩餐を老侯の陪席を許されて終ると直ぐ親兵衞は、姫君の神宣もあれば一刻も速かに義通君を御助け申上げたいからこれから直ぐお暇を賜はりたいと願ひ出た。義實公は義成卿とも篤と牒し合さねばならず、汝を使者として差向けるにも準備もあるからと引留められたが、親兵衞は容易に後へ引かず、御曹子の楚囚の御苦痛は一日も緩ふすべからず、且つ兵は拙速を貴ぶ。躊躇して敵に機密を探られるよりは油斷に乘じて不意に敵地に乘込んで、迅雷耳を覆ふに遑あらざる間に咄嗟に元兇素藤を取つて押へるが一擧に勝を制するの道であると頻りに請うて止まなかつた。

義實公も今は是非なく、左まで言ふならば汝の爲るままに任せようが、汝一人では如何に萬夫無當の勇があらうとも心許無い。我が伴當の有らん限りを召伴れよと仰せられた。が、親兵衞は辭退して、生中に多勢を從へるよりは童形のそれがし一人が單身乘込んだ方が敵の意表に出でゝ却て奇功を收める事が出來よう、國司の上使であるから若黨一人馬の鑣取一人は從へませうがその外は無用、まして甲冑などには及ばず、長上下の禮服一領拜借すればそれにて支度は十分で御座ります。マダ總角の

乳臭き口から申すは口幅ッたけれども姫君の冥助を頼み奉り、上の御威光を戴いて必ず御使を果しますと言葉凜々しく言上した。

義實公も頼もしく思召し、中黒の御紋附きたる長上下一領を廣蓋に載せ、御身甲、掩膊脛甲までも取揃へ、里見家の重寶小月像の御脇差を添へて賜はつた。親兵衛は數度押戴いて拜領し、暫らく退座して軀て衣服を更めて老侯に御暇乞を申上げた。寺法に由て山門内は騎乘を禁じられたが、親兵衛の勇ましき武者振を御覽になりたいといふ老侯のお思召で特に許されて名馬青海波を玄關先きに廻し、ユラリと跨つて鞍に額づいて恭しく一禮申上げた。驤て馬に拍れ乘遶らしたかと見る間に、與四郎を鑣奴としてトッ〳〵〳〵と山門を乘出した勇士の晴れの鹿嶋立、老侯初め見送る面々皆感に堪へて思はず一齊に聲を擧げた。

八　素藤降伏

翌る朝まだき親兵衛は與四郎を鑣奴とし、伴若黨に粧はした苫屋景能を從へて大手の城門に立ち、景能をして「國主の御使として犬江親兵衛仁參着、早々開門せよ。」と大音聲に呼ばらした。

城兵はこの頃攻めも擊たれもせず、唯折々に貝鉦太鼓で威嚇されるのみなる折から白々明けた國主の御使と名乘つて尊大に呼掛けられたに驚き周章てゝ覗きの小窓より垣間見るに使者と見ゆるは騎馬

の少年、鑣奴は老人にて血氣の壯年は若黨のみで、その他に隨從ふものは一人も無いので益々呆れ惑うた。兎もあれ頭人嬶時顧八に注進したので、顧八も亦隙見して呆れ惑うて素藤に告げ知らして指揮を乞うた。

扨こそ客手も攻めあぐみて和睦の使ひをおこしたのであらうと、短智の素藤呵々と笑つて、二十歳に足らぬ小猴子を大事の使者としたのは察するに柔能く剛を制すか、怯れを取りても弱輩ならば許されんといふ思はくならん、寄手の心算は何にてもあれ、濱路と釣換で無くば何條義通を引渡さんや、宜し〳〵その小頑童に對面して得させん。案内せよと豫ての望が早や成就した如く得々とした。

顧八は心得て城門に戻つて、潛門から入れようとしたが、國主の上使を角門から通す作法があるかとノッケから叱咤された權幕に呑まれて言甲斐なくも開門して平田張盆作と二人して出迎へた。親兵衛は悠然と沈着拂つて馬から下り、景能を從へて與四郎に馬を牽かせ、二三百人の雜兵が各々弓鐵砲を携へ槍薙刀を晃めかして左右に武威を張る中を見も返らずに中門を過ぎて玄關へと差蒐つた。諸侯の使者たりとも帶刀のまゝ式臺へ登る作法は無いと顧八盆作が面脹らして氣色ばむのを、房總の太守の上使が稗將に應對するに佩刀するを何憚らう。無用の咎め立てをせずに疾く〳〵案内せよと、尻目に掛けて屹と嗜めた威風四邊を拂つて顧八盆作は唯ブックサと呟くばかりであつた。

長廊下を過ぎた奥には墓田素藤、書院の儲けの上座に傲然として茵を重ね、左右には奥利本膳、淺

木碗九郎の兩黨が控へ、廊下には究竟の力士數十名、雜兵百名餘り、各々武裝して素破と言はゞ打つて蒐らんばかりに張肱して居流れてゐた。顧八盆作兩人が寄手の使者犬江親兵衛參上と披露を待たず親兵衛はツカ〳〵と進んで會釋もせずに長袴の裾蹴返しつゝ、上使なれば上席は用捨あれと、素早く床の間の鎧櫃を掖出して無圖と腰を掛けた。

素藤主從は飽氣に取られ、暫らくは眼を圓くして呆れてゐたが、素藤は忽ち怒れる聲を振立てゝ、此奴狂人ならん、兵ども引摺り出して城外へオッポリ出せと下知した。畏まつたと顧八盆作、最前からの忌々しさに碗九本膳諸侶に皆一齊に打つて蒐らんと身構した。その時親兵衛の懷ろから一道の光が颯と閃めいて眼を射たので、芒と叫んで本膳碗九顧八盆作、力士の面々斛斗つてへタ張り伏して起きられなかつた。雜兵どもは驚き怕れワナ〳〵慄へて次第々々に後退りした。

素藤は眞赤になつて言甲斐の無き兵ども哉、小頑童一人がそれほど恐しいかと、矢庭に引拔く鋭い太刀風に親兵衛眞二つと思ひの外、ヒラリトと身を飜して二三度扇子で扱ひ、ヤッと聲掛け腕を叩いてポロリと刃を打落した。素藤アナタと倉皇てながら踏込んで引組まんとしたのを早くも飜して踪めく頸筋を引攫んで捻倒し、起きんとするのを片脚でギウと踏んまへた。ジタバタ藻掻いて跳起きようとしても動かばこそ、千曳きの岩を脊負ひたる如く、次第に重量を增して息も塞らんばかり、面色變じて息も絶え〳〵に許せ〳〵と喘ぐのみであつた。

その時顧八盆作・本膳碗九郎、力士の面々は各々漸く我に返つたが、親兵衛に踏んまへられて息も絶え〳〵なる素藤を見ると、怪力早業に恐れ悸いて居縮んでしまつた。

「汝等、一寸も動いたら素藤を先づ踏潰して後汝等を一度に捻潰して呉れるぞ。」と親兵衛はハッタと睨みつけた。「汝等主を助け、己れも又助かりたく思ふなら、各々武器を棄てゝ我が言ふ所を聞け。」

素藤も亦親兵衛の足の下から苦しげに、命あつての物種だから皆詫びて呉れ、謝つて呉れと憐れッぽい聲で叫んだので、左らでも臆病風に取憑かれて生きてる空の無い一同は、弓鐵砲から槍薙刀大小までも投出して平蜘蛛の如く重なり合つて平伏した。

親兵衛は力士が棄てた捕索を素早く取つて素藤をヒシ〳〵と縛めて傍に牽着け、ヤオラ一同に向つて、「汝等はこの素藤の素性を知つてゐる乎。本は京の大泥坊であつたは爰にゐる顧八盆作がその頃からの子分であるゆゑ能く存じてをらう。戰國の世の中であるから、我が國司里見殿寛大に見そなはし後の忠勤を以て過去の罪過を償はせようとし給ひしを、素藤君恩に馴れて僭上の望を抱き、身の程知らざる非望が本より許される理由が無いのを君を恨み奉りて謀叛し、剩つさへ神事に托けて御曹子を奪つて質として寄手を脅嚇するは神明を恐れざる大罪である。汝等如き烏合の勢を我が君の武勇を以て踏破るは朽木を摧くよりも太と易いが、夷蠻の良民が欺かれて心ならずも城に籠るものも亦少からざるを察し給ひて、薫蕕併せ焚くを不便に思召され、持久の陣を布いて戰はずして自からに潰ゆ

る時を待たれようと思召されたのだ。然るを素藤、君の仁慈を思召して攻圍を緩し給ふとは悟らず、驕慢にして較もすれば國司の武勇を輕んずるは奇怪千萬。のみならず卑怯にも麻呂安西神餘の殘黨を誑かして瀧田のお城を窺はせ、老侯にまで危害を加へ奉らんとするは憎みても餘りがある。天罰いかでか見免し給はん。親兵衛四歳より神助を蒙り、畏くも富山の靈地に育ち、神授の力量早業を得たれば、當年取つて僅に九歳の前髪であるが神女の宣を奉じて刺客を捕へ老侯の御難を助け參らせ、直ぐその場より當城へ乘込んで素藤の驕慢を取挫いだは汝等が唯今見る通りである。汝等若し前非を悔いて罪を謝するなら館の御慈悲を願うて取らさうが、若し又衆を恃んで小賢しくも卑怯の振舞をせば天罰踵を旋さず立處に素藤初め汝等の素首を刎ねて軍門に梟けようぞ、度胸を定めて返答せい！」

素藤初め一同はガタ〳〵慄へて生きたる空も無かつた。平蜘蛛の如く平伏して見苦しくもお慈悲お慈悲とばかり嘆願した。

然らば汝等の内、誰でもあれ玄關に待つ我が若黨苫屋景能に素藤就縛、城兵一同降伏の旨を傳へ、御曹子の屏籠られ給ふ御座處へ案内し即時に御出座を願ふべく、殘る面々は御乘物その他を取揃へて御歸陣の準備をせよと一々下知した。本膳碗九郎は仔細に及ばず玄關へ飛んで來て、城兵降伏の始末を搔摘んで話しつゝ若君の在せる囹圄へ景能を案内した。景能は急ぎ囹圄から出し參らせて別室へ請じ犬江親兵衛御迎へに罷り越した旨を言上し、親兵衛の武勇の段々を一々聞え上げた。御行列お供揃

ひは惣て御社參の時と同樣に仕つて、素藤以下の降人をお土産と親兵衛御供申上げて目出度く御歸座あらせらるべく。親兵衛一々下知して唯今支度中に御座りますと言上した。

客手の御陣では、親兵衛と別れて唯一騎馬を飛ばして歸つた蜑崎照文が富山に於ける一伍一什、老侯御遭難に暫らく行方の知れなかつた最年少の犬士犬江親兵衛が思掛けなく出現して、稀代の武勇を現はした一條から、親兵衛が素藤征伐を願つて今朝唯今主僕僅に三人で館山城に乘込んだといふ逐一を上聞に達した。義成卿は一々感嘆して且つ驚き且つ喜ばれ、殊に主從僅に三人で敵壘に乘込んだ親兵衛の武勇を嘆賞されて止まなかつたが、天祐神助ある親兵衛でも賊の本壘に唯一人にて乘込むといふのは餘りに無謀であると心許なく思召された。その中に館山城から寄手の陣へ來たものが二三人あるので、引捉へて本陣へ引張つて來ると親兵衛からの使者で、素藤降伏の旨を知らして來た。それぞれ城内の警備を固めてから親兵衛倶して御歸陣あらせらるべく、素藤以下の降人は引卒して實檢に供へるといふ口上であつた。義成卿の感悅一方ならず、即時に田稅逸時と登桐良干に兵五百人を授け、親兵衛が歸らぬ先きに入城するは大功を蔽ふの嫌ひがあるゆゑ左も右くも城外に整列して、凱旋を迎へよと令ぜられ、急ぎ陣門を清帚して親兵衛が降人を牽かして義通君に倶して歸るを今か〳〵と待ち給ふ。

暫らくすると眞先きに二竿の幟二本を建て、一本には叛賊墓田素藤・一本には降伏兇黨と書いて、

本膳碗九、願八盆作らの頭人格二十餘名を後手に縛して牽かせ、次に長い太い杉丸太の十字架に素藤を括りつけたのを車の上に押建てたのを二十人の軍民に牽かせ、柱の傾き倒れないやうに四方から四條の麻索を引張らした。その前に手拭鉢巻の片肌抜ぎの男が扇を開いて麾きつゝ音頭を取つて軍民共鈍みたる聲にて木遣を諷ひながら車を牽いた。そのあとに降伏の賊兵三百餘人。五人十人宛珠數繋ぎに繋がれて追はれて行つた。これより十間ほど距離を置いて前後を百數十人の軍民に警固させ、警蹕の聲四邊を拂つて御曹子の乘物が靜かに練つて行く、その跡に續いて犬江親兵衛仁、館山城に乗込んだ時の禮服の儘馬上裕かに扈從した。行列は長くは無いが、昨日まで房總二國の太守の大軍を惱ましした叛將が木の上高く括しつけられ、祭りの山車の如く諷ひ囃されつゝ牽かれて行くは前代未聞で、平生素藤に虐げられた夷灣の良民は皆留飲を下げて天罰覿面を嘲笑つた。且つ誰吹聽したものがあるわけでは無いが親兵衛の勇名を語り傳へて、この童形の總角が單騎賊壘に乗込んで素藤一黨を征服したと聞いて舌を卷いて驚歎しないものはなかつた。

九　素藤妙椿に再會す

素藤が降伏したので近鄰諸城も續いて陷落し、夷灣は幾何もなく平定した。義成卿は筆頭第一の殊勳者として親兵衛を館山の城主に封じた。親兵衛が若輩の身を以て他の兄弟に先んじて重き恩賞に與

かるは心苦しいと固辭し受けざるを、左も右くも汝が館山に居らざれば安心出來ないからと言諭して強ひて受けしめた。以下それ〴〵に恩賞を行ひ、素藤のため家を燒かれ田畑を荒らされたものには租稅を免じ金穀を施し、賞罰を嚴かに正して後一先づ義通君を伴うて稻村城へ凱旋された。

素藤以下の降人は天人共に容れざるの叛逆人であるゆゑ、一人剩さず斬首して軍門に梟けるといふが東以下の老臣の意見であつた。が、親兵衛は如何に思ふと義成卿は仰せられたので、親兵衛は孟獲の七縱七擒の故事を例に取つて、素藤の罪は極刑を値ひすれども膺懲の實は前代未聞の鉾山車の引廻しにて擧つてをる。渠如き鼠賊を放つたとて何程の事をなさう。重ねてお家を仇となすなら親兵衛立處に誅伐仕つるに由つてこの度は寛典を加へられたいと願つた。義成卿も初めは嚴刑に處すべきお思召であつたが、外ならぬ親兵衛の意見でもあり、その言ふ處も亦理に合ふがゆゑに親兵衛の意見を容れて、素藤以下の降人の額に黥して笞一百の叩き放し、國境から追放する事とした。

斯くて素藤は武州角田川の西岸（今の向島）まで舟で送られて爰から陸へ上げられて追放された。背に受けた笞の傷の痛きが上に額に新しい十字の入墨もあつて、一見罪人とは誰にも解つたが、一夜を過す旅籠の賃も無いので、ドコを恃となくウロついて不斗目に留つたのが、一艘の繫舟であつた。ドコへか用達に行つたと見えて　舟には人が無く簑笠が脫棄てゝあつた。今宵を過す夜の衾には究竟と、明巢覘ひの本性を出し、ヒラリと乘移つて簑笠を捲つて見ると、下には一個の割籠があつた。開

いて見ると飯と味噌であつたが、膏粱の美味に飽いた一城の主人も、布子一貫の饑人となれば一粒の飯にも唾を催して、天の賜忝けなしと押戴き、ペロリと平げてドウヤラ人心地が附いた。腹が充くなると眼蓋が弛むと下世話に言ふ通り、この頃の獄中の勞れに取別け笞一百の鞭を受けた痛みも加はつて俄にガツカリし、ドウヤラ人間らしくなるとウト〳〵と眠くなつて、イツとなく前後を忘れてグツスリと熟睡んでしまつた。

幾時眠つたか知らず不斗眼が覺めて眼を開いた時は、こは如何に、假寢の夢を結んだ繫舟は跡だに無くて墨田の河原と思つたのが松柏枝を交ゆる巖蔭で、狐兎の栖と鄰りする山中であつた。素藤は兩手を組んで惘然として夢か現か計りかねてゐた。爰はそも何といふ山の中であるかと訊いて見たいにも人ッ子一人通らず、牛追ふ童にも逢はないので訊く事も出來ず、フラ〳〵と身を起して覺束なくも人家を尋ね迚る中、ヒヨッコリ眼の前に見はれたのは柴垣を結ひ繞らす草の屋で、折戸が半ば斜に開いてゐた。素藤は蘇生つた心地がして、路に迷うた旅人であるが暫らく休まして一碗を惠まれ里へ行く道をも指南し給へと音なうた。稍や暫らくしてガラリト障子を開けたは二三分がほど髪の毛を延ばした尼僧。素藤はアッと驚き、

「妙椿尼ごぜでは御座ららぬ？」

「慕田の殿か、最う見えさうなものと先刻から待つてをりました！」

「えッ、それがしを待たれた？」

「待つてをりました！　墨田の繫舟に割籠を置いたのも、一寐入遊ばす間に舟を流してこの山中に假睡まして置きましたのも皆この尼の法術……先づ左も右くもお通り遊ばせ。」

と筧の水を取つて足を洗がせて奥へ通した。素藤は圍爐裏の傍にヤオラ座を占めて、夢に夢見る如く四方をキヨロ〳〵見廻してゐた。

「尼ごぜ、アレから後それがしはエライ目に會つて城を追はれ……」

「殿その事なら仰有らんでも妙椿は天眼通で何も彼も知つとります。」とニッコリ微笑して、「知つとればこそ法術で墨田から爰までお迎へしたので御座りますワ。」

「それ程の天眼通があるなら尼ごぜ。」と素藤は怨めしさうな顏をして、「斯うならない前にナゼ法力で助けて下さらない？　小さくとも一城の主が野良犬同樣引叩かれて追出されるのを見て見ぬ振は法力も頼もしくない　恁うした約束ぢや爲かつた筈だが……」

「アナタもそろ〳〵耄碌遊ばしたネ。」と妙椿は皮肉な微笑を含みながら、「但烏跖六といふ大泥坊の子から大名に立身なすつた太つ腹が一度や二度躓づいたからつて直ぐ愚痴が出るやうぢや運の神に見離されます。一體なら三尺高い木の空でドテッ腹に穴の明く處を叩き放しの阿呆拂ひで輕く濟ましたのは誰の力と思召す？　親兵衛づらに佛心を起さして殿のお首を維いだのは、憚りながら矢張り尼の

法力とはお氣が附きませんか。」

「尼ごぜ、それ程親切心があるなら、」と素藤は得心行かぬ顏をして、「佛心を起させる世話の無い前にナゼ手速こくやッつけて呉れなかつた？」

「弱音を吹くぢやありませんが、殿。」と妙椿は澁面を作つて、「鬼門といふものは誰にも有ります。妙椿は犬が嫌ひ、取別けあの犬江親兵衞は伏姫の神靈が影身に添つてる上に役行者から授かつた仁といふ字の稀代の靈玉を持つてますから、妙椿の法力も親兵衞は鬼門で指一本指す事も出來ないので御座います。尭う正直に本音を吹くと、尼の箔も剝げて便りなく思召さうが、殿、決して氣遣ひなさいます勿、そこには又實もあり蓋もあつて好い耳をお聞きに入れる事も御座いませうから、暫らく人目を避けて時節をお待ち遊ばせ。人里離れたこの奥山に庵を結んだのも殿を匿まうため。爰なら館山から餘り遠くないから二度の旗上げに御便利だらうし、殺生禁斷の山だから人目に掛る心配は無し、燈臺下暗しで容易に感づかれる掛念も無からうと思ひまして、そのッモリで一味のものも法術で近所に足留めして置きましたから鋒火が擧がれば直ぐ集まります。それまでは先づ當分、餘熱の冷める間はノンキに面白い夢でも御覽になつて御辛抱遊ばせ。萬事はこの尼の方寸に……」と妙椿はホホと笑つて、「百萬人の大將軍になつた氣で、殿、御酒でも喫つて元氣をお附け遊ばせ。」

素藤は妙椿の法力も親兵衞には手も足も出ないと聞いて一度は落膽したが、親兵衞には指一本指せ

ないでも義成夫妻を法術で瞞まして靈玉を奪ひ親兵衞を遠ざけて徐ろに再擧を計る方策があると聞かされて再び元氣附いた。

人ッ子一人影も見せない深山の庵に尼僧一人でどうして準備したものか知らぬが酒飯を出して、素藤は幾日振かの美味に飽いていゝ氣持になつた。八百尼の妙椿はこの頃髮の毛を伸して前よりは一層若々しく三十路に足らぬほどにしか見えなかつた。搗てゝ加へて微醺を帶び、薄紅ひに仇めいて妖婦の艶色滴たるばかりであつたから、素藤はそゞろ心になつてこの夜を初めに二人は晝夜の分ちなく歡樂に陶醉し、本より幻術で貯へた美酒豐饌の盡きる事が無く、山家住ひの人目が無いから痴けき限りを盡して一月二月と海鼠の如く海月の如く暮してゐた。

が、素藤は無賴漢ではあるが徒手空拳で一城の主人となつた亂世の小梟雄である。一度挫折したからつてこのまゝ萎んで引つ込む無氣力漢では無い。妙椿の美色に醉うて一月二月をウカ〳〵と暮しても、二度の旗上げを忘れる懦弱者では無い。況してや妙椿に傾倒したのは色よりは幻術であるから、宿醉の惡夢から覺めると嘔吐くやうな心地がして、親兵衞を追拂ふのはまだか〳〵と催促した。その度毎に妙椿は急いてはことを仕損じます、萬事は尼が合點んで、そのうち好い吉左右をお聞かせします。野暮な催促をなさらないで氣長に時節の來るのをお待ち遊ばせ。」とホ、と笑つて素藤を和め賺した。

十　妙椿の幻術親兵衛を遠ざく

稲村城では館山の戰雲收まりて館は歸城し給ひ、上下交々枕を高うしたが、三月の初めのある夜さりから長き髪を振亂した白衣の幽魂夜な〳〵五の君濱路姫の寢所に現れるのを、宿直の者にて正しく見たものもあつた。その度毎に姫君は魘はれて惱ませられ、徹宵睡らせ給はぬ夜も續いて、三度の食事も取らせ給はぬから日に〳〵勞れて衰へ給ふにぞ、父君は心配し給うて名ある醫師を初め、陰陽師加持祈禱者までも召して、國主の力の有らん限りの手を盡しても何の驗も見えなかつた。この上はと て富山の伏姫神から峯の觀音堂、洲崎明神から役行者の巖窟へそれ〴〵代參を立てられて祈願を籠められたが、巖窟へ代參の女房が歸るさに童顔仙骨の異人に喚留められて、姫へ憑きたる物怪が別人ならず姫が暫らく養はれた甲斐の庄屋の女房夏引の死靈である事を示された。姫は三歳の折鷲に攫はれて甲斐の石和の山中の大木の枝に掛けられたのを通り掛りの村長に助けられ、十六の年まで村長の娘となつて養育されてゐた。夏引といふのはこの村長の後孫であつたが、密夫と謀つて村長の殺害したのが露顯して處刑された。丁度その時偶然に里見の鳥女といふ事が解つて、姫は里見家からの迎ひに引取られて富貴自在の以前の身分に戻つた。夏引は罪障にて浮ばれず、魂魄宙有にさまようて姫の榮耀榮華心の儘なるを妬く思うて祟るのであるから、この物怪を鎭めるには鬼神も恐れる稀代の勇士

犬江親兵衛を召されて宿直させ、親兵衛が護持する靈玉を姫の寢所の床下深く埋めて置くに非ざれば、姫の病氣の癒ゆる事は無からんと、件の異人は嚴かに言放ちつゝ飄然として洲崎の方へと足を旋らしたが、姿が忽ち搔消す如く見えなくなつた。

女房どもは急ぎ後影を伏拜みつゝ歸つて、事の赴きを奥方へ聞え上げた。正しく役行者の詫宣と上へも稟し上げ、疾く親兵衛を召させ給へと願つた。正しく行者の示現であるなら疎そかにはし難いが親兵衛は九歳の童といへど大人びて、曹通の小兒とは同列に見難いから、若き女の寢所の宿直をさせるは世間の聞えも影護しと、義成卿は容易に承引き給ふ氣色が無かつた。折から蛮崎照文が姫のお見舞に瀧田から參向したので、先づ照文の意見を聞かれてから杉倉、堀内、東、荒川の四家老を召して評定を開かれた。世見の聞えを憚からせ給ふ上のお思召もさる事ながら、姫君の御病氣も等閑にし難し、行者の示現の虚實は兎もあれ、良將勇士の怨靈を鎭めた例は古へから珍らしからねば、數百人を一擧に降伏せしめた稀代の武功ある親兵衛を、御寢所近く召し給はゞ惡靈必ず退散仕らんと、老臣の意見が一致したので、義成卿は俄に使者を立てられ五の姫重態につき親兵衛卽刻出仕致すべく、與四郎は慰勞として館山へ遣はさるべき故、同道仕るべき旨の御敎書を下された。

五の姫御重患と承はつて親兵衛は恐懼したが、御見舞ならば左も右くもこれに就きての火急の御用が有らうとは思はなかつた。が、君のお召とあれば水火も辭すべきで無いと、一議に及ばず仰畏み

て、與四郎小父は慰勞のお暇を賜はるのであるから跡からユックリ支度して來よ。稲村城で重ねて會ふ事も出來ないから瀧田へ行つた妙眞大母へ渡して呉れと急ぎ手紙を認めて渡しつ、卽刻名馬青海波に乘つて發足し、十里に餘る道程を二時餘りで稲村に着した。

親兵衞着到と聞召されて義成卿は先づ遠侍で夕飯を下されてから御前近くへ召された。親兵衞は姫君御病氣の御見舞を申上げた處が、義成卿はそれに就き汝を呼出すは餘の義に非ず、姫の病氣は物怪の祟にて醫藥は更なり、加持祈禱の驗も見えず、勇士を枕頭に宿直せしめて物怪を鎭めるより外は無いと、人も言ひ自らも思ふが、さる日役行者の岩室に代參せしめた時、親兵衞をして看護せしめよといふ行者の示現があつた、素藤の亂平ぎてマダ幾何日も經たず、人心猶ほ靜謐に歸せざれば汝を館山から呼寄せるは好ましからぬが、去ぬる日の汝が稀代の武勇、汝が感得の靈玉の不思議な奇特を思ふ時は汝ならでは惡靈を鎭めるものは無からんと、老臣どもとも評定して、汝を召寄せたのであると仰せられた。

親兵衞はハタと困じた。生ある人間を對手なら千人力でも恐れるに足りないが、風を捉へ煙を攫むに等しい物怪では手の附けやうも無い。君命なれば是非も無いが、有繋の親兵衞も頓には御答へが出來なかつた。が、怨靈惡鬼を鎭めるの力があるとは思はねども、兎も角も仰を畏みて御寢所のお次ぎの間にて宿直仕らんと御承けした。義成卿はそれに就き今一條の所望がある。汝の護持する靈玉は

暫らくも身を離す事の出來ぬ寶であるは能う存じてをるが、これを姫の寢所の下に埋め置けといふ行者の詫宣である、汝に取つては迷惑至極であらうが、必ず疎略にすまいから暫らく貸してたもるまいかと仰せられた。親兵衞はハッと當惑した。が、君命なれば思返して一議にも及ばず、頸に掛けたる護身囊から直ぐ拿出して懷紙へ載せつゝ、姫君癒り給ふまで土中へ御埋め下さるべしと、忝やしく上の御前に差出した。

義成卿は滿足にお思召され、件の靈玉を小さき香箱へ入れて更に瓶に收め自ら指揮して姫の寢所の下なる土中へ深く埋め給ひ、親兵衞にはその晩から寢所の次の間に夜詰の仰せ付けられた。この日の黄昏近く煙の如き物怪は、例の如く現れて姫君を惱ましたが、親兵衞の武勇に恐れたか、但しは靈玉の奇特に近づく事が出來なかつた。かくしてその夜は何の別狀を無く、姫は翌る朝おそくまでもグツスリと眠られた。義成卿も夜伽の女房からこの赴きを聞召されて滿足に思召され、親兵衞には御殿の一室に臥床を設けられて一日休息を賜はつた。

斯くてその晩もその又翌る晩も、晝は休息を賜はつて黄昏頃から夜詰をしたが、惡靈はそれぎり影を顯はさず、姫も魘はれ給ふ事が無いので、日に〻薄紙を剝ぐ如く快くならせられた。四五日を經ると三度の食も膳常の如く、晝は終日雙陸骨牌貝合せなどに興ぜられ、夜は早くから枕に就かせられて拂曉までも眼覺めさせ給ふ事が無くなつた。父君母君の御喜びは言はうやうなく、親兵衞には日

に日にかづけもの數多を賜つて勞を犒らはせられ、この頃は夜詰の數をも減らし給ふに、女房ども、姫君のグッスリ睡入り給ふにッイ我を忘れて拂曉までもトロ〳〵と假睡むものもあつた。

丁度親兵衛が夜詰を仰付かつてから七日目の晩、この頃は義成卿も安心して定めの時刻には臥床へ入らせられたが、この夜はイッになく寢苦しく、更け行くまゝに眼が冴えて胸騷ぎさへし給ふので、親兵衛は如何にしつる、復た物怪が現はれたのでは有るまいかと、近習のものに姫の安否を問はせようと思召されたが、イヤ〳〵眞夜中に人騷がせをするでも無いと、自ら紙燭を點されて幾間か隔つる姫の臥床へと容子を見に行かれた。

期くて姫の寢所の次の間へ來て見給ふに、夜詰する筈の親兵衛が影も形も見えなかつた。不思議に思召されて暫らく依違つてゐられると、姫の臥床から男女のさゞめく聲が聞えた。正しく親兵衛の聲音なので義成卿はカッと怒つて、主の眼を竊む憎い奴と思召されながらも思慮ある君子、窃に足を忍ばして立ち去り給はんとする足許に纏はるものがあるので、拿上げて紙燭に照らして見給ふと、正しく姫の手跡で認められた艶書であつた。我が子ながら武家の作法を蔑如にした濫行の罪は許すべくも無いから兩人を列べて手討にすべきであるが、姫は左に右く親兵衛は類稀ない武功があるのみならず我が姉伏姫神に宿因ある八犬士の一人であるから、假初の若氣の過失を罪して失ふべきに非ず、所詮は九歳の童と見て才と共に脊丈も大人びて、なきまごゝろのつきたるを心づかざる我が淺慮の罪であ

る、武家の作法に曲ぐべきで無いが、我が手に艶書の落ちて人を知らざるこそ幸ひ、事に託して暫らく親兵衛を遠ざけ、兩人の仲の餘熱を冷ますに如かずと、義成卿は臥床へ戻られてから兎さま角さま思案された末、艶書を枕邊の火で燒棄てられた。

翌る朝は疾く親兵衛を召され、左右を退けて宣はせられた。毎夜の辛勞大儀であつた、物怪も退散し姫の病氣も最早大事無いから今日限り暇を取らせる。それに就き再び館山の守りに任ずべきであるが、汝は幼きより富山に育ちてまだ他鄕の空を知らぬから暫らく諸國を旅して來よ。爾餘の犬士が八犬具足するまでは歸參せずと今だに諸國を遊歷する中に、汝一人が館山にをるのも異なものであるから、汝も亦遊歷の旅に出て諸國の風土を究め人情を察し、旁々犬士の踪跡をも尋ねて八犬具足して相伴うて歸るが宜からずや、就ては汝の祕藏の靈玉をも返すべきであるが、汝が去つて後復たもや惡靈が祟りを爲すやも計られざる故、今暫らく惡靈鎭護のために預かり置くと、準備の黃金百兩を取出し給ひて路用としての納戸金を取らせると折敷へ載せに下された。

親兵衛は難有く押戴いて受納め、微臣一人が爾餘の犬士に先んじて君の御寵恩を忝ふするは本意無く思つてをりましたので、犬士を尋ねにお暇を賜はるは豫ての本懷、就きましては今日にも鹿島立に上るべきであるが瀧田の大母それがしとの面會を待詫びてをりますゆゑ、再び旅の空へ向ふ身の大母へ暇乞ひの時間を賜はりたいと願つた。義成卿は暫らく沈吟し給ひて後、大母へ暇乞ひのためとな

らば據ろなからんが、妙眞へ對面したらば直ぐ旅に向つて一日も瀧田に留まるべからず、あと〳〵の事は總て老臣どもに取計らはするから汝は急ぎ鹿島立ちせよと仰せられた。

親兵衛は卽時に退出して御厩に預けた青海波を牽かせ、驚き呆れる近習のもの達には俄のお暇を賜はつた赴きを告げ知らして直ぐ瀧田へと行つた。昨日までは何の御沙汰もなかつたのを降つて湧いたやうな俄のお暇こそ心得ぬ、しかも館山へ返し給はず瀧田へも留まるを許されないで直ぐ鹿島立ちせよとの仰は益々心得ぬ。館山の城主をお受けしたはもと〳〵我が志ではなかつたが、民心鎭まるまではと强つての上意であつたのを、姫君御病氣のための一時の御召還から直ぐお暇を賜はるといふは何かの仔細が無くては叶はぬ。君側に佞便の小人があるとは思はぬが、我れ少年の身を以て寵恩餘りありて姫君の夜詰まで仰付けられたを何人か娟しと思うて讒言したのでは無からう乎。誠や飛鳥盡きて良弓藏れ狡兎死して走狗烹らるといふは古人我れを欺かず、微功を敢て慢るでは無いが君の御不興を蒙むる罪過があるとも思はず、本より生命を捧ぐる臣子の分際として君を怨み奉るべきでは無いが濡衣の乾ぬ限りは生きて再び城門を潛るまじと、道々馬上に述懷しつゝ行くうちにいつか瀧田の城へ來た。

斯くて城門で下馬して馬を預け、番卒に案内さして妙眞の小屋を尋ねた。絕えて久しい再會に妙眞唯涙ばかりであつた。親兵衛は幾春秋の富山の生活のあらましを搔摘んで物語りつゝ、悲喜哀歡の憶

出の草々は二宵三宵を重ねても所說語り盡せないが、遊歷がてら七犬士を迎へに俄の君命で發足する門出の際にお許しを得て、何年振かの再會に僅かの隙を見て寄道したのであるから、本意無いお別れだが主を持つ身は儘にならない。これにて御免仕ると、義成卿から賜はつた路銀の包を拿出して二つに分け、上から恩賜のお福分けをしますから何なりと調へて戴きたいと差出した。滅相も無いと妙眞は押戻して、お館樣から賜はろお手當で何一つ不自由しない樂な身の上、そなたは長い旅の空に出て事缺くやうな事があつては、上へ對しても恐れ多いと手にも觸れぬのを、上から拜領のお初穗を受けて戴かねば親兵衛の志が屆かぬからと、强ひて收めさしつゝヤオラ暇乞ひをした。與四郎音音、曳手單節にも會つて行くツモリであつたが、富山へ參詣に幼い子を伴れて今朝から出かけたあとゝ聞いて是非なく、妙眞に言傳を賴んで城門まで送られて來つ、ヒラリと馬に跨がつて暇を告げ、見返り勝ちに旅の空へ向つた。

一町ほど行くと馬から下りて、遲れて追つて來た鑣奴に向ひ、汝は知るまいがそれがしは君命を奉じてこれから他鄕へ旅立つゆゑ、汝は馬を牽いて寄道せずに眞直ぐに稻村へ歸れと言つた。鑣奴は飽氣に取られ怪訝な顏して不審がるのを、益なき口を利くよりは疾く〳〵行きねと叱り懲らしたので、鑣奴は見返り〳〵馬を牽いて歸つた。

親兵衛は跡見送りつゝ先づ、市川へ向はんと程近き船場を指して行つた。昨日までは假初にも一城

を預かる重い身分であつたに引換へて今は一僕をだに俱せざる天涯孤獨の羈客となつた、有爲轉變の定めなき世の移り變りを徐ろに感慨しつゝも、身一つの輕々となつた心地して行く背後の方から光り物が飛んで來て、忽ちハタと頸筋に中つた。

阿と思ひつゝ何物か矜より肌を傳はつて着物へ滑り落ちたのを手探りに拿出して見ると、思掛けない五の君の寢所の下に土中深く埋めて置いた仁の字の靈玉であつた。扨ては瓶の中なる小箱から飛出して、未生以前からの宿緣ある自分の懷ろへ歸つて來たのであらうと、今更に靈玉の奇しき通力を感じて押戴きつゝ守袋へと收めた。

十一　素藤再び館山城に據る

人不入の山の隱れ家では庵主の妙椿が暫らく家を明けるからと二週ほど前に姿を潛したきり、素藤一人ポツネンとして不在を守つてゐた。豫ての祕策を運らすための暫しと雲隱れを推してゐたから、風より外に訪なふものも無い深山住居の佗びしさも苦にならないで、神妙に鬼門の犬江親兵衞を首尾よく追攘ふ吉信を首を長くして待つてゐた。

「殿、御退屈でしたらう。」と妙椿はヒヨツコリ歸つて來た。いつもの晴れ〴〵した元氣の誇らしい顏をして。

「尼ごぜ、吉左右は？」と素藤は待兼ねたやうに言ふと、

「妙椿のする事にソツは無い、殿。」と片頰に微笑を含んで、「親兵衞めは大方武藏の旅籠で、今頃嘘をしてゐるでせう。當分は歸つて來る氣遣は無いから、館山は再び殿の御手に入つて萬事は御意の儘に運びます。」

「して〳〵犬江めは？」と素藤は半信半疑で急込むやうに、「ドウいふ手段で追拂つたか？」

「殿里見の五の姫が甲斐の民家で育つた逐一はいつぞやお咄ししたから御承知でせう……」と妙椿は夏引の靈に化けて連日稻村の奧殿に現はれて濱路を惱ました事、姫の病氣平癒の祈願に役行者の巖室へ代參した奧女中の歸路に、行者の姿を現はして親兵衞を稻村へ召下して靈玉を土中に埋める示現を僞はらして義成を誑かした事。首尾能く親兵衞を館山から稻村へ移して靈玉を奪つて姫の寢所の緣の下へ埋めさした事。最後に或夜寢靜まつてから宿直の親兵衞を假睡さして姿を搔消し、義成を誘き寄せて親兵衞の姿の見えざるを疑はしめて後、濱路の臥床から若き男女の私言を聞かして義成を怒らした事。一度は藥が餘り利き過ぎて既での事二人を列べて手討にするとまで興奮させて、大切な姫を手討にさせては殿へお氣の毒とハラ〳〵したが、義成は根が寬仁の長者であるから直ぐ思留つて、幻術で艶書と見せた白紙を燃やし、その翌る朝卽ち昨日の朝俄に親兵衞に遊歷の暇を賜はつて卽時に稻村を發足さした事まで遺漏なく語つて、「先づ當分は殿の天下、御祝ひ申上げまする。この機會を外さず

今夜の中に館山へ押寄せ、短兵急にお攻めになつたら館山を奪還すは瞬く間、袋の中の物を捜るよりも容易で御座ります。」

素藤は小躍りして喜び勇み、妙椿の神機妙算を數度感嘆して止まなかつたが、不斗面を曇らして妙椿の顏を見つゝ、

「尼ごぜ、犬江めは追拂つても、素藤が單獨では尼ごぜの法力があつても城は取戻せまいが……」

「御念には及びません。萬事の調宰は尼がいゝ鹽梅にお膳拵へして置きました。本膳椀九、願八盆作等一味の面々は雜兵までも皆呼び寄せて三人四人宛其處此處に潛して、率と言へば直ぐ集まるやうに手筈がとゝのつてをります。甲冑武器まで取揃へて御覽に入れますから、時刻の來るまで前祝ひの酒きこし召せ。お殺の準備もして置きましたから、日出度く一獻お過ごし遊ばせ。」と言つた。

素藤は怪しみながらも妙椿に隨いて庖厨へ行つて見ると、各々料理した山海の珍味が皿小鉢に盛分けられてあつた。いつの間に里から運んで來たものかと、今更に妙椿の法力に驚きもし呆れもしながら茶の間へ持出し、暫らくは互に酒盃を交換し、久し振での珍羞佳殽に舌打ちしつゝ陶然と玉山頽れ二人とも杯盤狼藉の間にゴロリと倒れて前後不覺に熟睡んでしまつた。

兎角するほどに日は既に傾いて七つ下り、妙椿は瓦破と跳起きて枕を搔いやり棄て、暫らく外面を瞻めつゝ、時刻は丁度宜しき頃ならんと緣に出で、筧の水にて手を淨め口を漱ぎつゝ、いでゝ味方

を呼集めんと、外面に向ひ眼を閉ぢて呪文を誦へた。

只見ると其處此處の木間岩蔭から次第に現はれて近づき來る數多の人音、何者ぞと屹と見れば本膳椀九、盆作願八を先に立たして一隊凡そ三四百名皆叩き放しとなつて處拂ひとなつた面々であつた。去ぬる頃より妙椿の妖雲に乘せられ水の上を渡つて、夢現のやうに山中深く吸寄せられて、夢に夢見る如くボンヤリと今日まで過してゐた。しかるに最前尼公は稻村からの歸路に我々の隱れ家に立寄られ、親兵衞は之々斯々の謀計にて稻村を遠ざけたれば愈々今夜は館山へ押寄せる計畫、素藤公は既に尼公の庵室に疾くから忍んでおはせば今日黃昏頃合圖をしたら集まり來よと仰せられ、唯今合圖があつたに由つて參着仕候と異口同音に申述べ、妙椿素藤二人を拜して再擧の歡聲を擧げた。

「尼ごぜ、人數は揃つたが、見渡した處揃ひも揃つて布子一貫の丸腰ではどうにもならぬ。甲冑武器は？　尼ごぜ、何處から才覺する？」と素藤が訝かるを、妙椿はホ、と笑つて、

「親兵衞にはぎ取られた殿を初め雜兵小者までの甲冑武器は、皆館山の武器庫に今でも收つてありまする。率ざ取寄せて御覽に入れませう。」と驕て懷から錦の囊を拿出して、「この囊の中に入れたのは親兵衞の玉に讓らぬ靈驗がある甕襲の玉と呼べる寶、この玉を戴いて風を祈る時は暴風立處に起る不思議な奇特を現はします。イデ迅風を起して館山の武器を風で卷上げて御覽に入れる。」と言ひつつ錦の囊を戴いて東南に向つて暫らく呪文を誦へた。

怪むべし一陣の突風忽ち起つて砂を飛ばし枝を鳴らす勢ひ凄まじく、各々吹倒されまじと立木や岩角に獅嚙みついて重なり合つてゐたが、暫らするとガラリ〳〵と音して庵の庭に落つる物があつた。ウツカリ頭を擧げて撲たれて怪我をする勿と、小さくなつて凝まつてゐたが、軈て漸く風が靜まつたので恐る〳〵面を起して見ると、見覺えのある館山籠城の時の鎧兜が雜兵のまで揃つて幾百となく重なり合ひ、大小は申すに及ばず槍鐵砲までが數を知らず山をなしてゐた。各々アツト聲を擧げて妙椿の奇術を感嘆し、素藤初め本膳椀九、願八盆作ら頭人株の甲冑を選分けて差出しつゝ思ひ〳〵に各自の物具を着けた。

素藤は軈て黑革縅の鎧に黃金作りの太刀を佩き、右手に采配を携へつゝ現れて緣端の床几に腰を掛けた。その踵に尾いて白綾の袷小袖に黑天鵞絨の帶を前結びにし、黑純子の袈裟を掛けた妙椿が靜々と現れて素藤と列んで緣端に坐つた。

「皆の衆、覓の水で眼をお洗ひなさい。」と妙椿は一同に向ひ、「今夜は闇黑ですが、この水で眼を洗へば眞晝のやうに物が見える。朝から度々加持して置いたからさッ眼を洗つたら勢揃ひをして……」と下知した。

斯くて一同用意整つて、素藤は總勢三四百名を先鋒後陣と分け、本膳椀九願八盆作の四天王に本膳の子奥利狼之助出高十八歳を前後左右に從へ、妙椿の乘物を釣らして山路を急いで館山の後門へと

差掛つた。

城内には田稅逸時、登桐良千、苫屋景能の三士、稻村殿（義成の事）からの御敎書にて親兵衞が君命にて遊歷がてら七犬士を迎へに發足した事を知つて、事の仔細は腑に落ちぬが親兵をらずとも城を守るに難くないから軍卒共にも下知して益々油斷なく守備を嚴にした。この夕暴風俄に起つて城下の家を倒し木を折り或は根こぎにして物凄まじく、東の廓の武器庫を二棟倒した由の註進があつたが暗黑の夜なれば手の着くべきやうは無く、夜の明けるを待つばかりであつた。子の刻過ぐる頃暴風漸く熄んで各々寢に就いたが、その時素藤は妙椿の輿を擁して兵數百を率ゐて後門に迫りつゝあつた。

程なく城門へ面すると妙椿は早くも乘物を棄てゝ用意の麻索を拿出し、手練の手許鮮かに城を目掛けてサツと投げると、忽ち垣へ掛つたと見る間に八九丈の雲の梯となつた。兵ども渡れと素藤の下知に氣早の兵が五六人、各々槍を挾んだまゝ危なげも無く渡り終つたので、それッ跡から續けと本膳椀九を先きに立たして一隊難なく渡つて妙椿素藤が殿りをした。本より城の案内を知つた兵ども首尾よく外廓を破つた勢ひに乘じて二の廓をも易々と越し、行く〳〵其處此處の常夜燈を打消し〳〵俄に哄と喊の聲を擧げたそれッ夜襲であるぞと、思ひも掛けない不意打に城兵周章てふためいて、敵は何物とも解らぬが田稅、登桐、苫屋の三士は急いで物具を引掛けて士卒を下知して防がした。寄手は突擊の氣勢鋭き上に妙椿の幻術の水で目を洗つて眞晝の如く物を見るに反對へ、此方は黑白も分ぬ如

法闇夜の不意打に進退度を失つて狼狽し、見る〳〵中に散三に切捲られた。

爾時觀八盆作らは聲高らかに、當城の城主蟇田權頭素藤殿數千の兵を率ゐて當城を取返し給ふ。里見の番士ども何れに在るや、命惜くば降參せよと呼ばはり〳〵進んだ。扨ては蟇田の夜盗めが縛り首にもなる處を助け給ひし洪恩を忘れて復たしても君に叛旗を翻へすはにッくい奴、イデ〳〵と田稅、苫屋、登桐は卒を下知して爰を先度と戰ひける。中にも登桐山八郎は本膳椀九を左右に受けて斬結ぶ太刀風當るべうも無いので、本膳椀九は跡から進む新手に讓つて逃げんとしたのを逃がしはせじと追捲る機に運惡く脚下の死骸に躓いて蹠と倒れた。賊徒得たりと幾人か折重なつて、登桐をヒシ〳〵と縛め、この時既に本營を乘取つた素藤の前へと引立てた。

素藤はハッタと睨まへ、「汝は登桐山八郎か能く承はれ、素藤は當城の主人である。犬江の幻術に思はぬ不覺を取つて一時は退去したが、天英雄を虛うせず、數千の兵招かずして自から集つて忽ち城を恢復したは天運歸する所、例へば水の低きに就くが如きものだ。この理を辨へて汝も今より悔いて素藤に仕ふるなら功あらん時重く用ひて遣はさうが、飽くまで楯を突くなら立所に首を刎ねて軍門の血祭にして呉れる……」

と言はせも果てず山八郎は、刑餘の山賊過言である。國主の恩を忘れた人面獸心と言罵つて止まなかつた。素藤は怒つて斬つて棄てよと命じたが、萬卒は得易く一將は得難ければと、妙椿の取做に左

も右くもと獄に投じて嚴しく張番させた。

斯くてその翌る日、夷灞の軍民は素藤歿落の時、强顏く當つた腹愈に顧八盆作に數多の雜兵を率ゐさして曹善蘇々利の村々を思ふ存分に奪掠さした。米穀金錢は盡く奪はせて城内へ運ばせ、年の若い美くしい女は這回の恩賞として頒ち取らせ、壯年血氣の男は軍役に就かしめた。その上に武田千代丸の殘黨ども素藤の再起と聞いて馳集まつたので、館山の軍容は以前に增して盛んになつて、近郡近村震ひ悸いて稻村への註進櫛の齒を引くばかりであつた。

十二　俠客南彌六素藤を襲ふ

折あしく義成卿は脚氣を憂へさせられて、病の床に就き給ふほどでは無いが藥餌に親んで軍旅に出で給ふ事が出來なかつた。細作のもの〻註進は日に櫛の齒を引くが如く、素藤が勢ひ益々猖獗、取別けて軍師の女僧妙椿は神變不思議の妖術を行ふ風聞隱れなく、國司の御威光にも關はるといふので、義成卿も棄て置き難く、荒川淸澄を總大將として田稅逸友、小森高宗、浦安友勝を副とし、千五百人の兵を授け、妙椿の幻術を折く糞汁大蒜獸血までも準備さして出陣さした。

斯くて館山に近き羽賀に屯ろして、翌る朝は城近く押寄せて素藤を挑んで早くも一戰に及んだ。本より戰場手練の里見の精兵と素藤の烏合の軍勢と比ぶべくも無いから、素藤の軍は忽ち亂れ足となつ

てアワヤひとたまりも無く潰へんとした時、後陣に控へた妙椿は甕襲の玉を懷ろから拿出して額に當て、呪文を誦へると忽ち天地晦冥となつて疾風起り砂を飛ばし樹を倒した。豫て覺悟はしてゐたが、面を向くべきやうも無い俄の猛風に人馬齊しく吹倒され、剩つさへ黑白も分ぬ常闇に準備の糞汁も濺ぎ掛くべき標護が爲くて全軍忽ち總崩れとなつた。大將清澄を初め逸友らも馬を走らし風を避けて退く事七八町、士卒の亂れて四零八落になつたのを辛うじて收めて退軍したが、擊たれたもの凡そ二百人、手負は數を知らず散三の敗北にて、剩つさへ浦安友勝は亂軍に落馬して生擒にされた。

清澄は且つ怒り且つ恥ぢつゝ再び軍議を凝したが、察するに賊は勝に乘じて必ず夜襲を試むるならん。兎も角も軍を伏せて敵の夜襲の裏をかゝんと待受けてゐた。館山では味方の勝利に浮れ立つて祝ひの酒宴にさゞめいてゐたが、奧利本膳の獨子の狼之助出高、寄手は今日の敗軍に人馬共に勞れて物の役に立たず、勇氣沮喪して臆病風に取憑かれてをりますから、この機を外さず夜襲を仕掛ければ全軍一擧に潰へて大將初め首を授くるは必定と小賢しくも獻策した。荒川清澄は尋常ならぬ大將と、素藤は初め同意しなかつたが、蠣時顧八までがその尾に乘つて夜襲を願ふので、顧八が俱に行くなら と素藤も許して兵五百を授けた。二人は勇んで子の刻限を計つて、人馬共に枚を啣んで羽賀の清澄の本陣へ押寄せ、哄と喚いて攻蒐つた。寄手は闃として靜まり返つてるので、顧八狼之介は案に反いて狼狽し、俄に軍を引かんとした時、伏勢俄に起つて四方から押包まれた。顧八狼之介は益々狼狽

し全軍はシドロモドロの亂軍となつて散三に切捲られ、剩つさへ一隊の伏勢が放つた野火に道を絕たれて一兵剩さず盡く擊たれ、狼之介は早くも落馬して俘にされ、顧八も逃場を失つて降參した。この夜賊は殆ど鏖殺されて首を授くるもの二百餘級、清澄は晝間の敗北の切めての埋合せをして天明を待つて直ちに殿の臺へと本陣を引上げた。

館山では羽賀へ夜襲の雜兵が幾人か逃歸つて、夜襲が敗北して顧八狼之介が俘になつたと知らしたので素藤は色を喪つて早速軍議を開いた。逸雄の面々は急いで押寄せて二人を奪返さんと敦圍いたが、それよりも軍使を送つて穩かに敵の俘虜なる登桐と浦安を返して、二人と交換するに如かずといふ意見も出で、妙椿の差圖を乞うた。一應はモットモだが敵の俘虜を返さずに我が二人のみを取戻す祕計があると妙椿は素藤に私語やいて、近頃麾下に參じた千代丸の殘黨野幕沙雁太、仙駄麻迦六の兩人に機密を授けて殿の臺の清澄の本陣へ遣はした。清澄は一端は素藤の申出しを謝絕したが、忠義の兩士をその儘敵城に留めて見殺しにするもさすがであるから、先づ此方の兩人を渡して無事に恙なく見屆けてから其方の兩人とも引渡すべしと回答した。聽て兩人を輿に乘せて送り屆けて來たのを醫師に脈を取らせて別狀無いのを安堵してから、顧八と狼之介を獄舍から牽出して沙雁太麻迦六に引渡した。二人が顧八狼之介を請取つて館山へ歸つたと思ふ頃、陣所の奧にて人々驚き騷ぐ聲がした。何事が初まつたかと清澄初め幕僚が顏見合はす間もなく醫師雜兵二三人が奧から飛んで來て、登桐浦

安兩人が藁人偶になつてしまひましたと息せき切つて訴へた。えッ藁人偶に？　と清澄はヒタと呆れ復妖尼にしてやられたかと拳を握つて殘念がつた。が、己れの怠慢粗忽は左も右くも奇怪至極の敵の幻術は戰報旁々委細を具申して御指揮を待たねばならぬと、富山で老侯を襲つた刺客の一人で今は歸順して清澄の陣中に在る安西出來助に若黨佳橘を付けて稲村城へ火急の飛脚に立てられた。

二人は馬を飛ばして稲村に着くと、東六郎辰相の宿舍へ行つて清澄以下幕僚連署の書面を提出し、館山の戰況云々斯々と概略を報告した。辰相は卽刻出仕して清澄の書狀到着の旨を言上したので、義成卿は杉倉堀内兩元老を召され、三重臣同座で近習に戰報を讀上げさせた。清澄着陣後の第一戰には敵は早くも足並を亂し全軍總崩れとならんとしたが、その時妖尼妙椿咒文を誦すると一天俄に搔曇りて疾風砂塵を卷き、人馬共に吹倒されて味方總敗軍となり、浦安友勝亂軍の中に落馬して俘にされた赴き、義成卿は聞召されて御氣色を變へさせられた。

なれどもその晩敵の夜襲の裏を搔いて、四方から押取圍んで敵兵五百を殆んど全滅させて蠣時願八奥利狼之介の兩人を生擒した由を聞かれた時は僅に愁眉を開かせられた。が、再び妖尼の幻術に眩ませられて藁人形に兩人を取換へさせられたと聞かれた時は、三元老共々愕然として神變不可思議な妖尼の幻術に舌を卷かれ、斯る通力自在の妖魔を對手に戰ふ味方の苦戰を察し給うた。最後に清澄らの意見として、所詮斯くては味方を損するばかりであるから、暫らく持久の陣を布いて敵の勞れるを

待つ外は無いと思ふが、今後の進退如何に仕るべきや御指揮を仰ぎ奉ると結んであつた。

義成卿は逐一聞召され、暫らく沈吟し給うて宣ふやう、汝等は如何に思ふか知らぬが清澄らの意見道理である。暫らく敵の妖氣を避けて徐ろに糧食盡きて困憊するを待つが萬全の上策であらうが、その間に妖賊が幻術を使つて味方を苦める事があるかも計られない。それに就きて去ぬる日親兵衞に借りて土中に埋めた親兵衞感得の靈玉がある。親兵衞には仔細あつて暫らく身の暇を取らして遠國へ旅立たしたが、靈玉は今猶ほ土中に埋めた儘となつてをる。應驗の灼ちこなるは汝等も知る通りであるが、この靈玉を掘出して暫らく清澄に貸して取らさう。親兵衞がをらんでも靈玉の奇特は必ず幻術を折くであらうと。急ぎ奥づきの老黨を召出して靈玉の瓶を掘出して來よと命ぜられた。

權且すると老黨は泥に塗れた瓶を捧げて緣端へ運んで來た。義成卿は八重に絡げた索を解かせ、中から小箱を拿出させて手づから封印を切つて蓋を開けた。三重臣を初め列座の面々の眼が齊しく小箱に注がれた時、平常沈毅な義成卿が阿と聲を立てられた。浦島が子の玉手箱では無いが玉はドコへか消失せて小箱の中は空であつた。三重臣も覺えず身じろいで眼を睜つた。瓶を掘出した老黨は自分の粗相では無からうかとオド〳〵しつゝ重臣の顏から顏を見廻した。

義成卿は有繋に思慮ある名將の早くも悟らせられて宣はく、汝等如何に思ふか知らぬが小箱へ入れて封印を施こし、瓶を收めて八重十文字に絡げて土中へ埋めたものが、土を掘起した形跡も無く絡げ

た索も封印も本の儘にて中味ばかりが消失せたといふは尋常事では無い。古來靈物が不思議を現はすは珍らしからぬ例であるから察するに親兵衛の靈玉も盗人に奪られたのでも、妖魔に匿されたのでも無くして玉自ら靈異を現はし親兵衛の踵を慕つて飛去つたのであらう。且つ靈物が奇特を現はすはその人に由るので、親兵衛が護持してこそ身の守りとなるものを、親兵衛去つて後までも留めて土中に埋め置いて濱路のための守りとしようとしたは我が愆、況してや東六郎に貸與へて敵の幻術が折けるものと思つたは我が迷であつたと、義成卿は有繋名智の忽ちに一時の迷を悔いられた。が、靈玉は兎まれ角まれ、素藤征伐は一响も棄置き難いが、俄に幻術を拉ぐ手段の無い以上は清澄の請ふに任し、持久の陣を布いて敵の勞れるのを待つ外は有るまいと、傍の扇子を取らせられ、近習に墨を磨らせて手づから「寛」の一字を筆太に認められ、我が命令の證として清澄にこれを取らせ、補充の兵として五百人を即刻出發させよと老臣に命ぜられた。

東六郎の宿所では君の下知狀を待つ暫しの暇に、佳橘は清澄の安否を傳へに荒川の留守宅へ出かけ出來助は以前は同じ富山の刺客の同類で今は赦免された荒磯南彌六をフラリと尋れた。出來助は館山攻めの戰況は云々斯々と妙椿の幻術のため味方苦戰の委細を話し、それに就き館の御指揮を仰ぎに飛脚を仰付かつて來たと言つた。南彌六は以前が町人であつたので、赦免後草履取にでもと願つたが許されないで、素藤征伐の時に旗持にでも何にでもなつて、お伴したいと再び願ひに出たが矢張り聞屆

けられなかつたので、出來助の御奉公が内心羨ましくてならなかつた。

「和主は戰に出られて幸福だが、飛脚の御用を仰付かつて、それで滿足してゐるのか？」と南彌六は冷笑つた。

「滿足するもしねエも仕樣が無エぢやア無いか。大將には大將、足輕には足輕の役があらアナ……」

「然う言やア、成程風吹き鴉見てエに、手紙を懷ろへ入れて往つたり來たりするのが和主に適役だ。俺にはそんな役は一日だつて勤まらねエ、單獨だつて敵に切込んで生命の續くだけ暴れて潔く討死して見せる。」

「面白くもねエ、俺だつてその位エな覺悟は有る。だが、兄貴は短氣だから直ぐ矢でも鐵砲でも持つて來いと急ッ腹になるが、無暗と死んだつて、お前唯死ぬのは犬死だぜ。」

「誰が犬死すると言つた？」と南彌六は鼻頭で冷笑ひながら、「飛脚の智慧ぢや考へられめエが、大將首と釣換なら俺ッちの生命は安くはあるめエ。」

「兄貴そりや眞劍の咄か、」と出來助は覺えず膝を乘出して、「眞劍なら半口俺に乘せて呉れ。兄貴だつて俺だつて富山で首の無くなつてる身體だ。少とでも御恩報じが出來るなら、いつ何時でも生命を投出す了簡でゐるんだ……」

「和主、ほんたうに生命を投出す覺悟があるか？」

「ほんたうで無くてどうする？　今も言ふ通り、富山で無くなる首を繼いで下すつたのは瀧田の大殿様だ。それから以來、俺は自分の生命を殿様から預かつてる了簡だから、殿様の御用の時は何時でも返上する。」と出來助は面に眞實を現はして意氣込んだ。

「和主が然ういふ了簡なら俺も本心を打明けて和主に一肩借りてエと思つてる。」と南彌六は言葉重重しく力を入れて、「里見の御恩を返さうとする心持は和主だつて俺だつて變りは無エ。町人なんて和主や麻呂のやうに御家中になる事も、戰爭のお伴をする事も出來ねエが、俺も洲崎無垢三の孫だ。お伴のお許しが出ねエからッて大恩のあるお家の大事に、懷手をして引込んぢやゐられない。何とかして館山の城へ忍込んで、仁義に仇する素藤の外道に一太刀浴びせてやりてエと思ふが、要害堅固で忍込むは愚か近づく術も無い。何かいゝ工風は無エもんかと色々考げエてる中に、矢張り神様のお助けだな、ふつと浮いて來たのは瀧田で相牢をした、鳶野戸郎六といふ野郎が段々の惡事が露はれて打首になり、つい近頃獄門になつてるが、この野郎が不思議に荒川様に生寫しで、頤の黑子までがソックリその儘だ。この野郎の首を竊んで荒川様の寢首を搔いて持つて來たと言つたら、瀧田の殿様を覗ひに間者となつた和主と俺だから、素藤めも一杯喰ふに違エねエ……」

「違エねエ。」と出來助は思はず膝を叩いた。

「俺一人だつて出來る藝で、和主の力を借りねエでもだが、困つた事には俺は素藤の面を知らねエ。

先方も俺ばかりぢや油斷をすめエと思つて……」

「行る、行る、俺が片棒擔ぐ。素藤一人ならお前の腕節で澤山だが、あれでも一城の主だから有象無象が扈いてるからな。一簾の頭人格で武士振つてるが、高の知れた野ぶせり上り、五人や十人は俺が引受けるからスッパリ素藤をやつてくれ……」

と、爰で二人の相談は熟して手筈を示し合して二人は別れた。

出來助は殿の臺へ歸つて委細を復命すると、直ぐ今生の暇乞ひに同憂の友の麻呂復五郎が同じ里見の家中となつて從軍し、先度の戰ひに手重い金創を負つて、陣中に臥てゐる病床を見舞つて、それとなく別れを告げ、再び自分の陣所へ歸つて人知れず箭文を認め、幸ひ軍務が閑だから久し振に雉子でも捕つて來ようと言拵へて弓矢を携へて出かけた。館山近くの小高い岡へ登つて立木の間を縫ひ逢ひ矢頃を計つて城を目掛けて射た。三本射た中の一本が首尾よく垣を越して、確かに敵の陣中に落ちたを見屆けて何喰はぬ顏をして歸つて來た。

出來助と別れた南彌六は萬一敵に捕はれるか、殺されるかしてこの儘歸らぬ時は逐電したやうに思はせるための跡始末をし、敵陣へ切込む時の七首腹甲等の支度を風呂敷包として脊負ひ、黃昏近く城門を忍び出した。時刻を計つて處刑場へ行くと番人の非人も歸つて人氣が無いので、時分は宜しと窃と首を包んで急いで逃出した。その時恰も思掛けない岐路から小脇に若い娘を引抱へた尼僧が突

と飛出して駈抜けようとした。俠氣に充ちた南彌六は必定誘拐と見て何條見免すべき。曲者待てッと肩さき抓んで引戻さうとすると、尼僧は噪がず振解いて曳ッと中て手練の拳に南彌六覺えずタヂ〳〵として尻居にドウと仰反つた。その時南彌六の踵を尾けて來た一個の非人は怪しき尼僧の振舞に覺えずギョッとして、手に持つ棒を拿直しざまヤッと聲掛け打下すを、尼僧は透かさず咒文を誦へると、非人は忽ち觔斗打つて二三間後ざまにとケシ飛んだ。尼僧は早くも戒刀をキラリと拔いて南彌六を刺さうと近づくその途端、富山の方から一朶の雲が舞上つたかと思ふと、犢の如き犬の脊に乘る一人の神女が忽ち尼僧の眼の前に現れた。尼僧は阿と聲を擧げ、驚き怕れて戒刀を打ちひらめかし斬つて掛るを、神女は透かさず右脚を擧げて尼僧る胸さきを丁と蹴給ふ。神罰覿面叫びもあへず小脇に抱へた少女を投出し後へ蹧と仰反り倒れた。神女は早くも轉べる少女を犬の脊へ乘せ、再び雲へ乘つて中空へと往方も知らず飛去り給うた。その時非人と南彌六は我れに返つて不思議の奇特に暫らくは宙宇を見上げて茫然としてゐたが、非人は早くも再び棒を拿直して打つて掛るを南彌六は二度三度遣違はして衝入る早業、足を飛ばしてハタと蹴り、阿と叫んで轉蹴ぶを見も返らずに逃去つた。

館山の城ではその日の夕刻、雜兵が箭文を拾つたと訴へて來た。素藤は奧利本膳に請取らして讀ませると、去ぬる日富山へ刺客に遣はして生捕られたと聞いた、安西出來助から來た箭文であつた。その文面に由ると出來助らはその後瀧田の獄舍に繫れてゐたが、この度名族の故に赦免されて軍役に徵

せられ、心ならずも荒川清澄の陣中に勤務してゐるが、舊日の御恩は暫くも忘れず、再び功を立て、御旗元に歸參せんとする念一日も止まない。然るに同志の麻呂復五郎は先度の戰ひに流矢に中りて往方不明となり共に謀るべき對手が無くて躊躇してゐた。爰に同盟の義兄弟荒磯南彌六は平生任俠を賈る不敵の勇士なるが、昨日偶然安房より來るに邂逅ひて、窃に腹心を打明けて荷擔者とし、今夜清澄の寢首を搔いて火を揚げて合圖をなさんとす、事若し思ふ如く運ばざれば、清澄の首を提げて御城に投ぜんとす、庶幾くは兩人の降を納れ給はん事を、伏して願上げ奉るといふ意味の文言であつた。

素藤は思掛けない敵の內應を喜んだが、疑心が深いので底意を計り兼ねて本膳以下の郎黨と謀議した。出來助は怨を里見に結ぶものであるから、捕はれたからつて然う易々と仇家の犬となるものでは無い。機會があれば再び寢返りして、本の古巢へ歸らうとするは左もあらんが、荒磯南彌六といふは何者である乎。唯出來助の義兄弟といふだけでは安心出來ない、且つ降伏と伴つて敵を誘き寄せる手段は古今共に珍らしくないから迂濶り油斷は出來ないが。眞個敵の大將の首を携へて歸降したものを無暗と狐疑して容れないのは餘り小心であると、衆兇評定の結果が約束通り敵將の首を携へて軍門に降るなら、眞首を實檢して後に降を納れるとも納れないとも決しようといふ事に落着した。

その夜、子の刻過ぐる頃、搦手の門を敲くものがあつた。出來助南彌六の兩人で箭文で御案內申上げた通り、寄手の大將荒川清澄の寢首を取つて參つた赴を、頭の殿へ申上げて疾く〳〵城內へ入れ

給へと言つた。窓から透して見るに、一人は豫てから見知る出來助で、一人は南彌六であらう、その外に隨ふものも無いので頭人奥利本膳に告知らして左も右くも二人を中へ入れた。

素藤は二人の來るのを心待にして更闌くまでも臥床に入らなかつた。子の刻過ぎると間もなく二人が來たと聞いて喜び勇んだ。首實檢は自らすると、盆作願八、椀九狼之介、麻嘉六沙雁太らに各々身甲を着けさせて問註所へと召聚へた。局の内には究竟の雜兵三四十名に各々兵器を拿らして控へさせ、眞晝の如く燭臺を照り赫かさした中へ二人を本膳に案内さして緣側に着座させた。左右には力士五六人、素破と言へば飛蒐らんと身構へしてゐた。本より降人の常であるから身に寸鐵を帶びるを許さなかつたが、出來助は左も右く南彌六の一見一癖ありげな面魂は容易に氣を許せなかつた。上座に着いた素藤は本膳の披露を待たず、

「汝は瀧田へ義實を刺しに行つた奴だな。ドヂを踏んで、フン縛られたゞけでもオメ〳〵歸つて來られねエのに、敵に降參して、主人の俺に弓を彎くッてのは不埒極まる、不屈者奴が。」と、ハッタと睨だ。「先非を悔いて寄手の大將の首を斬つて來たなら、勘辨して以前通り召使つてやらんでも無いが、清澄の首は取つて來たか？」

二人はハット鰭伏した。南彌六は軈て包を解き掛けつゝ、突と起つて進まんとしたので本膳は遮り止めて、

「御前間近であるぞ、控へろ、控へろ！」と叱りのけた。「首實檢には作法がある。その方が御座へ進んで直き〳〵實檢に供へるわけには參らぬ。此方へ渡せ！」

「馬鹿を言はッしやい、」と南彌六は尻目に掛けて冷笑つた。「清澄は國主の名代だ。和主達とは身分が違ふ。直き〳〵でなくては……」

「己れ、無禮な奴、御前近くを憚らぬか。」と本膳は敦圉荒く眞朱になつた。

「本膳控へろ！」と素藤は制した。「南彌六、汝の言ふ事も道理だ。だが、當城には當城の掟がある。一先づ本膳に首を渡しても汝も一緒に近う進め！」と、城主の鷹揚な權威を示した。南彌六は欣然として、ヤオラ包を解いて首を渡すと、本膳は請取つて用意の首桶に載せた。素藤は引寄せて左見右見した。

「清澄の顏を知つてるものは無いか、」と左右を見廻して、「願八狼之介、汝は俘にされたから知つてさうなもんだ、何ッ、夜中だつたからハッキリ覺えないと？　白癡者奴！　沙雁太、麻嘉六、汝は使者に行つたのだから看覺えがあらう？　何ッ、應接したのは高宗逸友で、清澄の顏は遠かつたから解らなかつた？　揃ひも揃つて迂濶者ばかりだナア……」

「清澄の顏には、」南彌六は焦々堪り兼ねて、「頤の下に大きな黑子が……」

「然う〳〵、然う言へば大きな黑子が頤の下に御座りました。」と沙雁太、麻嘉六は聲を揃へて言つた。

「ほう黒子が目印か、」と素藤は再び首桶を引寄せつゝ、「ドレ、ドコにある？」
「左の頤の下……」と言ふより早く南彌六は隠し持つたる匕首をキラリと拔いて飛蒐つた。素藤は前額を斫られて阿と叫んで仰反返つた。滿座は驚いて總立ちとなり、スワ曲者と沙雁太麻嘉六、疊掛けて素藤を擊たんとする南彌六の前後から組みついた。邪魔ひろぐなと怒氣奮然、焦つて拂ふ鋭い刃先に、沙雁大の細頸飛んで麻嘉六も返す刃に重傷を負つてバッタリ倒れた。出來助も素早く懷劍拔持つて、前後左右から群がり蒐る力士ばらを當るを幸ひ切拂ふ。獅子奮迅の二人の働きに本膳椀九、願八盆作狼も度を失つて、シドロモドロと尻込し、南彌六は踏込み〳〵素藤にアワヤ再度の一擊を加へんとした折しも忽然として屏風の蔭から現はれたる妙椿、この爲體を見て印を結んで咒文を誦へた。この妖尼めと南彌六が曳ッと喚いて斫下さんとした手先が不思議や俄に痺れて目眩めき、踉々として尻居に蹉と倒れた。響に驚く出來助も術に中てられ度を失つて、勦斗つて仰反返つた。衆賊どもは思掛けない妙椿の助けに俄に強がり出し、魔術に枷を掛けられた出來助南彌六を押取圍んで突刺した。憐れや二人の俠客は膾の如くに切りさいなまれた。
跡には各自が勇敢の武勇談、狼狽廻つて逃出さうとしたのを忘れて、素藤さへも妙椿の手當で息を吹返すと、「下郎推參な！」と立ちはだかつて力味返つた。
「尼公の法力でもう退治てしまひました。」

「ホウ、最う斫つてしまつたか？」と次圍太踏んで、「嬲殺しにして成敗すべき奴だつたが、首は獄門に梟けて死骸は取棄てい！」と言ひつゝ奥へと退出した。

十三　靈狐政木

妙椿はこの日、寄手が暫らく押寄せて來ない休戰狀態に退屈した素藤に、いつ濱路を連れて來ると迫まれて、今宵こそ攫つて來ると、晝間から影を潛した留守中の出來事だつた。南彌六が獄門首を窃んで逃出した時に遭逢つた怪しい尼は妙椿で、幻術で南彌六を眩まして刺さうとした途端に、神女が降臨されて南彌六も刺し損なつたが、濱路も取返され、マンマと失損なつて子の刻過ぎてから歸つたのが、丁度素藤主從が斬立てられた危い瀬戸際であつた。
稻村城の大奥では出來助佳橘に下知狀を下されたその晩、五の姫が何處へか見えなくならせられたと上を下への騒ぎだつた。奥方吾嬬前は館の御前へ出て、濱路の往方大凡は見當がつきました。まだ九歳の童とばかり思つて油斷した親兵衛の跡を正しく慕つて忍び出たものと存じます。實は唯今姫の部屋を調べて鼻紙臺に親兵衛の艶書が挾んであるのを發見しましたと申上げた。
それならば余にも思當る事があると、義成卿は、先頃の深夜に濱路の寢所を見舞はれた時の出來事を云々斯々と吾嬬前に物語られ、その晩親兵衛の宿直の部屋に落ちてゐた濱路の艶書は直ぐ火中して

しまつたが、今宵御身が濱路の鼻紙臺に挾んであつたを見附けたといふ親兵衛の文を見せ給へと、君嬬前が帶の間から出して館に參らしたを請取られ、サラ〳〵と廣げられると、こは如何に、墨の痕さへも無い無字の白紙であつた。

「ヤ、ヤ、」と吾嬬前も驚かれた。正しく親兵衛の筆跡で認められてあつたので、吾嬬前も手紙の内外を何遍となく飜されて見て不思議に驚かれた。暫らくして義成卿は、先宵親兵衛の宿直の部屋で拾つた濱路の文も、その時直ちに火中したが、今にして思ふと矢張り白紙であつかも知れぬと仰せられた。扨ては妖術をもて我が眼を眩まして親兵衛を疑はして遠ざけ、濱路を奪はんとする妖賊の計略であつたかも計られない。今宵俄に見えなくなつたのも亦妖賊に誘拐されたので、斯る手紙を殘したのは飽くまでも疑惑を親兵衛に詫けて、姫の踪跡を晦ます手段であらうと、義成卿も初めて無明の眠りを醒まされた。

斯ろ處へ姫の部屋なる小座敷が俄に噪がしうなつて考女がアタフタと飛んで來た。唯今お庭の木立深き邊から五の姫君樣が忽然お出ましになりましたと、老女は息せき奥方樣へ申上げた。方も右くも姫を連れて來よと吾嬬前は仰せられ、義成卿との間に姫君を挾んで夜前の始末をお尋ねになつた。

眞夜中頃と覺しき頃、姫は屏風の外にて喚ばせ給ふ母君のお聲に目を覺し、急ぎ身を起して屏風の外へ出られると看慣れぬ怪しい尼が立つてゐた。驚いて聲を立てようとすると、矢庭に猿轡を喰ませ

られて、翌々と小脇に引抱へられ、いつか御殿を拔け出して眞暗な夜道を何處となく連れて行かれた。彼是小一里も來た時、怪しの曲者に呼咎められ、非人と覺しき男に六尺棒にて打つて蒐られたが、尼は姫を小脇に抱へたまゝ二人と渡り合つた。その時虛空から犬に跨がつた神女が忽然舞下られて驚く尼の胸を蹴られ阿と叫んで姫を投出したのを犬に乘せて再び虛空へ舞登られ、宙宇を翔つて遠い〳〵高嶺の巖窟に姫を伴れて行かれた。これぞ正しく富山の伏姫神で、御身を誘き出したは妖賊京藤の軍師と賴む妙椿であるが、妙椿素藤の二兒を退治するは親兵衛の外に無い。元來親兵衛を遠ざけたのは妙椿の反間に乘せられをので、これほどの事に氣附かぬ義成では無いが、心の鏡が曇つたのは畢竟は妙椿の幻術のためであるから早々親兵衛を呼迎へよと宣はせられ、再び姫を犬の脊に乘せて宙を飛んで行かれた。斯くて暫らく宙を飛ぶほどに、道程遠く犬の脊に乘るに堪へないで、姫は憶はず犬の脊から轉び落ちて空を外したかと思つたのはこの稻村城の奥庭であつたと、姫は恰も長い夢から目覺めたやうに、一期の大難に遭逢つた恐ろしさから伏姫神の冥助を蒙むつた段々を、父君母君に巨細お打明けになつた。

吾嬬前は今更に伏姫神の冥助を畏くお思召されて富山の方を伏拜まれた。義成卿は姫の無難を喜び給ふと同時に、幻術に昧まされたとは言へ、功ある親兵衛を疑つて遠ざけられた短慮を深く後悔された。

斯くてその日の政務を濟まされると、義成卿は杉倉、堀内、東の三家老を別席に召されて、昨宵から今曉へ掛けての五の君に纏はる出來事の一伍一什、取分けて伏姫神から素藤を退治するものは親兵衛の外に無いから、早々親兵衛を呼迎へよといふ宣示があつた由を申聞けられた。それに就き親兵衛を至急呼戻したいと思ふが、親兵衛は今所在が解らぬが如何にすべきかと仰せられた。

三家老は、親兵衛を遠ざけられた賢慮を臣らは初めから不審に堪へなかつたのであるが、既に伏姫神の宣示がある以上は素藤征伐を親兵衛に仰付けられるは本よりであると言上した。親兵衛の所在は不明であつても行先きは略定つてをるから、旅馴れた照文に追はせれば何處かで追付きませう。就ては申すも憚りであるが親兵衛を遠ざけられたは妙椿が反間の幻術にせよ君の賢慮であるから、親兵衛は縱令君臣の誼に厚くて上意に背くもので無いにしろ心に多少の蟠りが無いとは限らない。それには六稔親兵衛に守傳いた與四郎を照文と共に差遣はされて、御錠を傳へられるが萬事に便よからんと三人は代る〴〵に申述べた。就ては兩人共に瀧田にをればと、東六郎は進んで、それがし御使を承はりて委細を大殿に言上仕らんと願つた。義成卿は何れも道理と滿足にお思召され、早速東六郎を瀧田へ急使に遣はされた。

入れ違ひに蜑崎十一郎照文は與四郎諸侶瀧田から參着した。義成卿は不思議にお思召し、照文を早速召されて東六郎には途中で會はなかつたかとお訊きになつた。照文は東氏には會はなかつたが瀧田

では伏姫の奇瑞があつて照文と與四郎とが親兵衛の迎へに遣はされる旨を知らし召され、疾く稻村へ參るやうに大殿からの御沙汰で兩人參着仕りましたと言上した。義成卿は伏姫神の應驗を今更に感歎されて與四郎をも遠侍から召されて、この度の一伍一什を照文共々申聞けられた。親兵衛を遠ざけたのは余が一生の愆、與四郎、その方からも親兵衛に和解して呉れと仰せられた。今に初めぬ事ながら二人は明君の謙德に感激して親兵衛召喚の御使をお受けした。

斯くて二人は親兵衛を召される御教書と路銀を賜はりて、與四郎は親兵衛の鄕里なる市川へ、照文は左も右くも先づ穗北を尋ねて七犬士とも再會し、豫て上命を受けて〻大の結城の法養に兩館の御名代として參列するつもりで、各々道を分つて發足した。

十四　親兵衛再び素藤を伐つ

親兵衛は身に覺えない君の御不興が何故であるかは解らなかつたが、俄に遊歷のお暇を賜はると主命通り瀧田にも一日逗留しないで、大母の妙眞に門口で暇乞ひして直ぐ市川に便船して依介夫婦を尋ねた。初對面ではあるが親兵衛の實家の犬江屋を相續さした關係であるし、親兵衛の事は妙眞から精しく消息して知らしてあるので、思掛けない俄の音づれを喜んで夫婦してマメ〳〵しく款待した。何は措いても兩親の墓參や法養に一日を暮したが、四歲の時に神隱しになつた犬江屋の大八が六年目で

戻つて來て、また九歳だといふのにドエライ大手柄をして、里見のお家の立派なお侍に出世して先祖の佛事に歸つたといふ評判がパッと立つた。乳呑の時分に抱いたり負つたりしたものが死んだ子の蘇生つたやうに喜んで來るのや、大江山の酒顚童子よりも恐ろしい大盜賊をたつた九歳で退治た前代未聞の大手柄に肖似りたいと言つて來るのもあつた。思ひ〳〵の祝ひ物を持込んだが、中には詩だか歌だか鹿角菜や折釘を列べて得意で送つて呉れるものもあつた。貰ひ放しも出來ないので餅を搗いて配つたがそれだけでは足りないので、重立つたものを招いて大盤振舞をした。そんなこんなに二三日を無駄にして、依介夫婦が頻りに留めるのを振拂つて市川を立つた。

斯くて行德へ行き、外祖父文五兵衞の菩提所へ墓詣りして香花料を寄進した。代換りした古那屋の家を餘所ながら瞻めて、家紋のついた棟瓦に母に抱かれて、古那屋へ來た昔を夢のやうに憶出した。

丁度江戸の兩國へ歸る早舟があつたので、三四里の舟路を一氣に艫らして江戸へ着き、舟から上つて上野の原まで來て、老りたる松の下に兩三脚の床几を竝べた葭簀圍ひの出茶屋に休んだ。

主人は根岸金曾木あたりの農家の妻か隱居媼樣のホマチに客を待つのであらう。親兵衞は朝から六七里を來たので、暫らく憩はんと腰を卸す間もなく俄に甍音噪がしく、幾個となく不忍の池の岡を指を指して駈けて行つた。

「媼御、何の騷ぎだ？」

「向の岡で打首になるものが御座ります。」と老婆は眉を顰めて、「お武家樣、お聞き下さいまし、世にも氣の毒なは今日打首になる忠孝節義の武士で御座います……」

と、今日斬られようとする扇谷家の二代の忠臣と聞えた、河鯉佐太郎孝嗣の身の上から冤罪を着せられた顚末を話した。孝嗣の父の權佐守如といふは奥方附の家令であつたが、新參の佞臣龍山緣連といふもの本は奥方の實家長尾家の舊臣であつて、己れが舊惡の暴露を恐れて、兎角に長尾家を疎隔し、剩つさへ北條氏と通じて長尾家を亡ぼすの祕計を君に薦め、愈々自ら上杉氏に使ひして謀議を進める事になつた。蟹目前は心配して守如と謀つて先づ首謀の奸人龍山緣連を除かんとし、智勇の士を物色して湯嶋祠頭に物賣する居合師物四郎の武勇凡ならず、人品亦尋常勝れたを見拔いて守如と二人して祕密を打明けて語らつた。然るに物四郎といふは石濱の對牛樓で馬加一家を斬つて棄てた犬坂毛野が猶も馬加の餘類籠山逸東太の往方を尋ねるために世を忍ぶ假の名であつて、蟹目前から窃に亡き者にして呉れと賴まれた龍山緣連が籠山逸東太である事を計らずも知つて密議は忽ち調ひ、物四郎の犬坂毛野は緣連が北條氏へ使ひする途を要して鈴の茂林に不意を襲つて首尾能く本懷を遂げた。然るに龍山の一行は三四十人で、聞ゆる猛者も多く隨伴し、毛野にも亦犬士の助太刀があつたのみならず變事と聞いた扇谷定正は赫怒して三百騎の兵を率ゐて出動し、搗てゝ加へてこの仇討を小耳に入れた犬山道節は短氣の定正が寵臣を打たれて必ず出馬すべきを豫想して落鮎有種等一味を集め、義に依つ

て助ける同憂の犬士と共に手ぐすね引いて定正を待構へてゐた。一人の犬士の仇討が意外な練馬の殘黨の猛烈な復讐戰となつて、定正は思ひも寄らない敵の要擊を受けて敗北し、逃ぐるを追はれて兜を射飛ばされ兜を拾ふ間も無く命からく〳〵五十子へ逃込まうとした時、城は既に別手の敵に燒討ちされて、取つて返してホウ〳〵の體で辛くも忍ケ岡へ落ち延びた。蟹目前は物四郎の手を借りて奸臣を除かうとしたばかりであつたのが意外の經過となつたので申譯の爲め自刃し、守如も亦物四郎との密談を道節に立聽されたための練馬の殘黨の偶然の要擊となつたとは知らぬから、毛野を怨んで奥方に殉死した。佐太郎孝嗣は父の遺骸を擁して義に怨へて犬士の追擊を喰ひ止め、斯くてその翌日は道節に約束したのだから高畷に晒した兜を取卸して忍ケ岡に行き、定正に返上して亡き奥方と父守如の苦衷を陳べて群小に誤まられる定正の輕擧を苦諫した。定正も今は恥ぢ且つ悔いて蟹目前の賢明を偲び守如の忠死を惜んで幾度となく嘆息した。が、その當座こそ孝嗣を重用して一々その言葉を聽いてゐたが、暫らくするとソロ〳〵疎んじ初めて五十子へ歸城の隨從をも許されないで、忍ケ岡の留守居役を吩咐つた。孝嗣の能を娟み直を喜ばざる小人どもは緣連の餘類と心を合して孝嗣が陰謀を企だてゝると讒したので獄に下され、何度も痛め吟味に掛けられた擧句に證據も無いのに今日首を刎ねられる事になつたのであると、茶店の媼さんは鼻を拭みながら逐一話して聽かした。

親兵衞は何とかしてこの孝子を助ける工風は無いもの哉と思つた。善惡邪正は大抵外貌で察せられ

るものだから、左も右くも人品を見、餘所ながら刑の執行をも窺視しようと、人の駈行く踵から從いて行つた。最早言渡しも濟んだと見えて、二十歳ばかりの眉目秀でた色白の若者が兩手を後に縛られて、朱鞘の兩刀苛かしく床几に腰を掛けた實檢使の前に引据ゑられ、キラリと拔いた刀を持つた高股立ちの武士に今や斬られんとしてゐた。一見國を賣る奸人とは誰にも見えない可惜忠孝の武士を、罪なき罪に死なすとは天道眞に是耶非耶と親兵衞は憶はず嘆息し、助ける術の無いものなら切めて首級を奪ひ取つて、最寄の寺へ人知れず葬むつて回向して取らせんものと思つた。

斯る處へ、暫らく〳〵と高らかに聲を掛けつゝ飛んで來た旅裝束の武士があつた。箙大刀自の御意である。暫らく待てとの仰であると言つた。箙大刀自といふのは、蟹目前の母で女儀ではあるが男勝りの氣嵩者で、定正も一目も二目も置いて、頭が上らんのだから、箙大刀自と聞くと一堪りもなく縮み上つて、首斬役も急いて刀を鞘に收め、實檢使も小さくなつて平つく張つてゐた。軈て弓鐵砲を先頭に陣笠野袴籠手臑當の武裝の供揃ひ嚴かしい行列を肅々と練らして來た。實檢使を初め警固の雜兵が恭やしく額突いて迎ふる前に行列がピタッと駐つて乘物を据ゑると、輿側の郎黨が左右に整々と別れて中腰に居列んだ。實檢使は恐る〳〵躁り出て土下座をすると、乘物の戸は開いて箙大刀自は顏を出され、昨夜旅寐の枕に湯嶋天滿宮現はれ給ひ、河鯉佐太郎孝嗣冤枉の罪に陷されて、命危きに由り早々救へといふ夢想の御告にて道を急がした處、果して忍ケ岡にて首を刎ねられるといふ町々

の噂、佐太郎は娘蟹目の先途を見送つた父子二代の忠臣、蟹目の墓の土のまだ乾かぬ中に讒者の言を信じて處刑するとは以ての外、早々繩を解いて放免せよと仰せられた。實檢使は恐る〳〵大切の囚人なれば一先づ上意を伺つてからと言はせも果てず、簸が放ちてやれと申すに兎や角申すなら是非に及ばぬ、汝らを斬つて棄てゝも孝嗣を免してやらずば娘の菩提にならぬと氣色ばみて、定正には自らが理解して遣はす、二代の忠臣を罪なきに殺しては鄰國への外聞、神佛の冥罰も恐ろし、定正の無道人外この上も無いが、主の過失を助くる汝らの姦曲も棄置き難いゆゑ、先づ汝らの首を刎ねて扇谷の政道を糾すから覺悟して返事をしやと威丈高に極め付けた。

簸大刀自の利かぬ氣は定正さへもヤリ込められてグウの音も出ないのだから、實檢使は慄へ上つて承服し、早速孝嗣の繩を解いて大刀自の伴當に渡した。これから五十子へ歸つてその趣きをお屆けするから、お母公樣から五十子へ渡らせられたら御披露下されて、小臣どもの粗相にならぬやうお斡旋を願ひまするとと、鼠の如くにコソ〳〵と尻尾を卷いて逃げて行つた。思ひもよらぬ助命の沙汰に孝嗣は幾度となく額突いて恩を謝すると、大刀自は笑ましげに、汝の父が娘に殉死した忠義に報ふので恩といふでは無いと、傍に侍する伴當に豫て準備したらしい黃金作りの大小を廣蓋に載せて出さし、武士が丸腰では表を歩けぬから兩刀を取らせる。爰らあたりを徘徊しては追手が蒐らぬとも限らないから、少しも早く他國へ遯れ主取りせよと言つた。孝嗣は只管感涙に咽んで兩刀を押戴いて暫ら

く頭を下げてゐたが、四方が何となく靜まり返つたので、不斗氣が付いて頭を上げると、今の今まで居列んだ百人餘りの供揃ひは簸大刀自諸侶に搔消す如く消えてしまつて、兩刀だけが手の中に殘つてゐた。孝嗣は茫然として夢に夢見る如くであつて、幻しの大刀自から拜領した大小も不斗氣が付けば下獄した時沒收された家重代の佩料であつた。全く以て父の陰德の報ふ所と今更に父の恩を偲んで合掌しつゝ暫らくは零丁寄る處が無い孤獨の身の上を墓なんで感慨した。

親兵衞は目のあたりにこの不思議を見て、誰とも知らぬ孝嗣の影身に添ふ神靈の加護を喜んだが、この忠孝の志がありながら天涯浮浪の孤獨となつたのを氣の毒に思つた。犬坂毛野がその父權佐守如に導かれて父の仇を報じたのも淺からぬ緣、道節がこの機に乘じて定正を要擊したは恩に背くが如くであるが、守如の柩に禮して軍を收めたのは孝嗣も亦犬士を德とするならん。所詮定正は孝嗣が主君と賴む器で無いから將て歸つて里見のお家に推擧しようと決心した。左も右くも武術のほどを試みようと僞はつて孝嗣を怒らせ、兩雄力を較して後名乘合ひ、一見舊知の如く志を明かして、その獄衣では道中も出來ぬから着更を一着參らせようと再び前の出茶屋へ同行して來た。

折から前の老婆は見えなかつたが、暫らくすると何處からか歸つて來た。見ると、それまでは氣が付かなかつたが、何處やら面差が孝嗣を助けた簸大刀自に似てゐたので、親兵衞も怪み、孝嗣も怪訝な顏をした。二人が不思議な顏をすると老婆は早くも見て取つてホ、、と打笑み、お二人樣、お氣

付きになりましたか、今の今こちらの旦那様をお助け申したのはこの老媼めで御座りますと言つた。二人はアッと驚いて暫らくは言葉が無く、幽鬼か狐狸かと老婆の顔を睨と凝視めてゐた。

犬江様とやらは初めのお目通りだから何にも御存じありますまいがと、驚き呆れる二人の顔を瞻めながら、河鯉の若旦那様は御承知の筈、お忘れ遊ばしたか、お邸に永らく御奉公申上げた政木をと言つた。政木といふ名は聞覺えがあるやうだが、ハッキリ胸に浮んで來なかつたのを暫らくするとふッと憶出した。母亡き孝嗣を五歳の時まで添乳して育てた乳媼が五歳の時に突然家出してしまつたと、父から或時聞いた事があるが、その乳媼が政木であつたと今憶出した。

政木であつたか、和子様お眷かしう御座いますと二人は互に手を取合つて再會の涙に暮れた。が、孝嗣は政木が自分を育てた乳母で五歳の時に突然影を隱してしまつたといふより外に何も知らなかつたが、政木が今は包むに及ばぬからと、人間ならぬ非類の身の上であるのが不斗した事から露顯れたので姿を隱してしまつたのだと解つた。

その頃孝嗣の父の權佐守如は忍ケ岡の城預りの頭人であつたが、公用で京都へ旅立つた留守中に若黨の掛田和奈三といふが狐の足跡を庭で見付け、早速弦繩に掛けて一匹の雄狐を殺した。根が殺生好きの良からぬ男だから猶飽きず更に穴を搜して子狐を獵出さうとしたのを、孝嗣の母が聞付けて和奈三を叱り懲らし、雄を喪つた雌狐親子を不便がつて氣質の柔しい奴婢に吩咐けて日毎に食餌を狐の穴

へ運ばせた。その中に守如が旅から歸ると早速和奈三の事を咄したので、常から良からぬ男だから直ぐ暇を出した。然るに孝嗣の乳母に政木といふがあつて和奈三は豫て私通してゐたが、暇を出されると幾何もなく和奈三は政木を唆かして連出してしまつた。和奈三に雄を殺されて何時かは怨を返さうと覘つてゐた雌狐は爰ぞと途中に待受けて散三に道を迷はし、一身を二人の追剝と見せ、前後から拔刀で男女を嚇して益々狼狽へさせ、暗がり道の川岸を慌て、踏外さして急流に陷めて溺死さした。

が、當の仇討はしたが、和奈三にこそ恨はあれ政木をまで卷添へさして、和子様のお乳を奪つて了つては日毎に食餌を賜はつて我が子を安々と育て上げた御恩を仇で返すやうなもの、政木の逐電を知るものゝ無いこそ幸ひとその晩直ぐ城内へ歸つて政木に化身して和子様に添寢してゐた。政木が不義をして家出したのも流に落ちて溺れたのも誰一人知るものは無いから、政木が何時の間にか狐の化けた二代目となつてるのを氣が付くものは一人も無かつた。その中に孝嗣の母は物故つたので二代目政木は愈々孝嗣が愛しくなつて人畜の境を忘れ育む内に或日夏の日盛りについ添乳してトロ〳〵と假寐し、いつになく生體もなく睡込んで本性を露してしまつた。まだ無邪氣い孝嗣は變つた乳母の面影を不思議に思つて、父様、ばアやがワン〳〵になつたと鄰の部屋の父親を呼ぶ聲に驚き覺めてガバと跳起き、緣から庭へ飛出してそれきり往方を晦ましてしまつた。扨ては政木は狐の化身で、亡妻の恩を報いに乳母と姿を更へてゐたかと思つたが、武士の子が非類に育てられたと言つては世の聞え

も如何と心に祕して、政木は仔細あつて暇を出したと家人にさへも言拵へて誰にも打明けなかつた。

その内に守如は五十子へ轉役した。政木狐は忍ケ岡から上野の原に移つたが、齢既に數百歳を重ぬるゆゑ、更に德を積み善根を施こせば靈狐となつて通力自在であらうと、出茶屋を作つて夏は暑熱に喘ぐものを憩はし、冬は寒氣に凍ゆるものに焚火を管待し、非人乞丐の饑ゑたるに施こし、道の壞れたるを修練し、橋の落ちたるを架し、男女の思ひ迫りて情死せんとするものには意見を加へて、無事に纏め貧に艱み病に苦んで縊れんとし或は淵川に身を投げんとするものには、醫藥金錢を惠みて禍を轉じて福とし、憂ひを變じて喜びの笑顏となつて歸るもの數を知らず。この陰德の甲斐あつて白毛九尾の形を備へ、靈狐の數に入つて神通を得たので、今日計らずも和子樣の危急の場に廻り合ひて俄に眷族の狐共を集め、扇谷殿の御威勢をも拉く箙大刀自どのに化身して和子樣をお助け申して昔の御恩返しをした次第と、一伍一什の長物語に孝嗣は非類と雖ども母に等しい哺乳の舊恩に加へて一期の大難を救はれた再生の大恩に感激した。親兵衞も亦、非類と雖ども一千年の壽命を重ねた神通自在の靈能を幾度となく感歎して止まなかつた。

犬江樣、里見のお家の事、伏姫神と未生以前の宿緣ある八犬士の事、お家に仇する妙椿の事、妙椿の幻術が稻村殿を迷はして功あるお前樣を遠ざけられた事。皆老婆が存じてをりまする。が、お前樣が安房を舟出し給ふと直ぐ素藤は旗揚げをして再び館山を乘取り、東六郎御名代として征伐に向へど

妙椿の幻術に寄手殊の外難義して唯今は遠卷きをして時節を待つてをられます。稻村殿も後悔されて蜑崎氏と與四郎どのとをお前樣のお迎へに出されたから、お兩人にお會ひなされずともこれから直ぐ館山へお歸り遊ばせ。和子樣はまだ里見のお御内ではなくとも一天下に和子樣が主君と頼むは稻村殿の外に無いから、犬江樣、和子樣をお連れ下すつてこの上ともお引立を願ひまする。それにつけて妙椿の素性をお咄し申上げんが、犬江樣は御承知であらう。安房の犬懸里の技平といふ家の親無し子犬を牝狸が乳を呑まして育てたのが後の八房で、八房は伏姫君の御經を聽聞した功德で成佛して乘移つてる玉梓の怨念も解脱したが、同じく玉梓の餘怨が結ぼりついてる八房を育んだ牝狸には供養の御沙汰が無いから里見を怨んでお家の仇をする。素藤はお前樣の智略で直ぐ退治られますが、妙椿を逃がしたら何時までもお家に祟りますから、妙椿を押へたら直ぐ役行者の靈玉でお照らしなさい。妙椿の魔術は破れて忽ち本體を現はし、玉梓の執念も晴れて怨靈解脱、里見のお家もそれからは御安泰になります。必ず妙椿をお逃がしなさる勿と、神佛の示現に等しい靈狐の言葉に親兵衞も孝嗣も隨喜感嘆して幾度となく點頭いた。

犬江樣、和子樣と、老婆は暫らくして二人に向ひ、和子樣をお助け申したは昔の御恩に報つたのであるが、人命を救つたのが和子樣で丁度一千人に達したので、天帝のお思召に適つて今日からは狐龍となつて昇天します。お名殘惜しいがもう昇天の時刻、さらばお二方樣、御機嫌能うと嫣然笑つて會

釋しつゝ葭簀の外へ出て、傍に聳ゆる松ケ枝に手を掛けヒラリと身を飜し、池へザンブと飛入つたかと思ふと忽ち黒雲舞下つて天地晦冥、迅雷疾電、盆を傾くるの豪雨降注ぐと共に池水逆巻きて鮒や鯉が木葉の風に卷かれる如くに八方へ散亂し、黒雲渦巻く中空に白龍陰顯して次第々々に雲間に包まれてしまつた。

十四　素藤誅に伏す

斯くて親兵衛は上總へ引還さうと、孝嗣を伴つて兩國河原の船宿へ來た。風も惡く潮も宜しくないので何處からも便船が無い。仕方が無いので追風の吹くといふ眞夜中頃まで待つ事にして富士筑波を左右に葛飾一圓を見晴らす三觀鼻をブラ〳〵した。六十路あまりのデップリ肥つた旅商人が二十ばかりの弟子を對手に相撲の型を人寄せにして膏藥を賣つてゐた。辯舌爽やかな口上と四十八手の立合ひが面白いので周圍に人垣を作つてゐたが、親兵衛も面白さに興じて小判を一枚祝義に與つた處へ、土地の遊び人が暴れ込んで、誰にことわつて他の繩張を荒らした。お侍もお侍だ、何處の椋鳥か解らねエ乞食藝人に大枚な小判を纏頭に呉れるタア物を知らねエにも程がある。案本丹の兵六玉と旅商人に喧嘩を賣つた。擧句が矢庭に親兵衛に喰つて掛つて手籠にしようとしたので、親兵衛は怒つて口ほどにも無い遊び人を手玉に取つて投飛ばすと、それッ、この青二才から片附ッちまへと、何處から

集まつたか三四十人の破落戸が親兵衛を追取圍んで一度に打つて蒐つた。親兵衛は勃然と怒つて里見の御内人の犬江仁を知らぬ乎と孝嗣諸侶猛然として手當り任せに蹴倒し投飛ばした。二人の旅商人も俄に勢ひを得て片端から撲飛ばしたので、破落戸どもは忽ちに雲を霞と逃散つた。

親兵衛は旅商人を犒つて、左も右くも便船を待つ間の休息に借りた船宿の奥座敷へと連れて來た。段々と話すと膏藥賣の旅商人は小文吾に由緣ある小千谷の石龜屋次團太と子分の百堀鯽三で、親兵衛が小文吾の甥であると聞いてこれは〳〵と許り奇遇を驚いた。次團太は小文吾莊介が簸大刀自の憎しみから思ひも寄らない冤罪を着せられた事から、次團太が淫婦の僞りの密告から連累へされてついこの頃まで獄に繫がれてゐたのを蟹目前の自刃から簸大刀自の氣强い頑固が折れて漸く罪が釋りた事を語つた。親兵衛は一々點頭いて長物語を聞きつゝ孝嗣を顧盼つて次團太に向ひ、爰におはすお武家こそ蟹目前に殉死した河鯉權佐の御子息であると紹介して、孝嗣が父の墳墓の土の乾かざるに讒者に陷れられてアワヤ刑せられようとした不運、宿緣深き靈狐が簸大刀自に化身して危き瀨戸際に救つた顚末を精しく物語つた。次團太は一々奇なり妙なりと感嘆しつゝも孝嗣の父子二代の忠義が報はれないで終に浪々の身となつた不幸に太く同情した。

その時隔ての襖が靜かに開いて思掛けない蛮崎照文がヌウと入つて來た。鄰室に泊客があるのは最前來た時から親兵衛は知つてゐたが、臥てゐる後姿を隙見したゞけで照文だとは知らなかつた。孝

嗣や次團太は初對面だから本より知る筈は無かつたので、親兵衛は一々紹介して犬士に因緣あるは勿論里見のお家に二心が無い御内に等しいものであると安心さした。照文も聞覺えある聲音であると隙見して親兵衛なのを知つたが、同行の武家や町人の素性が解らぬので、實は襖へ耳を當て一伍一什を聞取つて正しくお家の味方をする方達と安心して襖を開けた次第と、先づ親兵衛に一別以來の挨拶をして、御邊がお暇を賜はつて國を去つてからの異變は政木狐から精しく聞かれて照文に會はないでも上總へ引還される赴きは襖越しに承はつたから、クド〳〵繰返す必要は無いが、お館からの御敎書を更めてお渡しすると、御奉書を下されたのを親兵衛は恭やしく頂戴した。

斯くて素藤退治やら七犬士が必ず參列する筈の結城の法養に就て語り合ふ折しも、表の方が俄にガヤガヤして船宿の若い者が周章て臭つて飛込んだ。

「お武家樣、」と顏色變へて親兵衛に向ひ、「あんた方は三觀鼻で土地の若い衆と喧嘩をさッしやつたらう。あんた方は自分の勝手だが、俺の家は迷惑する。若い衆たちが押寄せて來た……」

「心配する勿、汝の家には迷惑掛けぬ。」と親兵衛は笑ひながら、「ドレ、破落戸どもを追拂つて來よう。」とヤオラ座を起つ親兵衛の踵から照文、孝嗣、次團太、鯔三を初め照文の組子がドヤ〳〵從いて來て、戸外を固めて破落戸どもの押寄せるのを待受けてゐた。

最先きに立つたのは三觀鼻で看覺えのある土地の遊び人、町人なれど戰國の習ひで近所に合戰があ

る度毎に落人の武具を剝ぎもし拾ひもして蓄へた籠手腹甲に身を固め、思ひ〳〵の兵器を持つた五六十人が押寄せて來た。親兵衛初め一同は少しも動ずる氣色なく、破落戸どもが何をするかと見てゐると、親兵衛の姿を見るや忽ち武器を伏せ、鎖頭巾を脫ぎ棄てゝ腰を屈めて何度も叩頭した。鯱て黑革縅の腹甲に小鎖の籠手脛當に身を固めた二個の武士が隊を離れ、親兵衛に會釋して近寄るを見れば、素藤が二度の旗揚をして一擧に館山を乘取つた晩、早くも戰場から出奔して往方を晦ましたと聞いて面白からず思つた田稅逸時と苫屋景能の二人であつた。

「オウ田稅苫屋の兩氏か、」と親兵衛は苦り切つて、「貴公らは親兵衛と知つて來たのか、素藤の烏合の勢に脆くも負けて城を奪られ、切めて人がましう討死でもする事か戰場から逐電して影を隱したのは親兵衛は能く存じてをる。破落戸どもの尻押してゐるのを見ると、貴公らも渠等の仲間入したか用心棒にでもなつてるのだらう。能くオメ〳〵と親兵衛の前へ出て來られた？」

「犬江氏、面目もござらぬ、」と二人は暫らく顏を得上げなかつた。が、聞けば素藤の夜襲は迅雷疾風の漸く鎭まつた眞夜中で、二の廓まで闖入して鯨波を擧げるまで誰も知らなかつたのは景能らの油斷ばかりでも無かつた。その時討死しなかつたのは徒らに犬死するよりは暫らく恥を忍んでも徐ろに前罪を償ふ功を立てようと、心ならずも落延びて、漁時との舊緣に賴つたのがこの土地の漁師の向水五十三太、枝獨鈷素手吉の兄弟である、三觀鼻で狼藉に及んだのはこの兄弟を先棒とする一黨で、兄弟

攝つて命知らずの暴れ者だが、力味たがつて出しや張るのと喧嘩早くて直ぐ手を出すのが病の毒も針も無いアレッきりの男。親兵衛の武勇は逸て聞かせてあつたので、旅の竪子と輕侮つて呑んで掛つたので意外の力量を現はして、犬江仁と名乘つたから喫驚敗亡して雲を霞と逃出して逸時景能に告知らしたのだ。無禮をしたのが怪我の功名となつて兩國河原に親兵衛が便船を待つてると聞くと、素藤再度の反逆の前一日に親兵衛が君命で遊歷の旅に上つたのを知つてる逸時景能は、君命で俄に召還されて素藤征伐に向うのだと察した。左も右くも正銘の親兵衛である乎、否乎を五十三太の子分に探らして愈々親兵衛と解つたので、俄に五十三太素手吉以下六十餘人を引俱して館山脱出の前罪を償ひに討手の中に加へられたいと願ひに出たのであるといふ。

それに就て五十三太素手吉は漁師の渡世から俗に鯨船と呼ぶ八挺櫓の快船を常から操縱してをる。子分子方は軍旅の役には立たないでも櫓を繰らしたら日本一、風にも潮にも頓着なく十里や二十里は瞬く間である。風の都合や潮の加減で進退するソコラの便船とは同一の談では無い。五十三太素手吉がこの快船の御用を勤めたいと只管願ふのを聞屆けられたなら、我々共も面目であると逸時景能が歎願する言葉のあとから、五十三太素手吉の子分子方までが皆誠實を面に現はして額突いた。

照文も頻りに快船の利を說いて、逸時景能が前罪を償ふための御奉公を嘆願するのも無理ならねばと親兵衛に執成した。蛋崎氏までが執成されるを無下に斥けるは親兵衛が餘りに意地を張るに等しい

し、素藤征伐は一刻をも緩ふし難いから五十三太素手吉の願ふに任せよう。さりながら二十餘城を管領する大諸侯が一郡一城の叛賊を平げるに漁師方の力を借りたと言つては御威光に關する。渡船は賴むが五十三太素手吉を初め篙工どもは一人たりとも上陸してはならぬ。進退愬て軍令を守れと嚴かに下知した。五十三太素手吉を初め篙工どもは躍上つて俄に噪氣出し、各々手を分けて準備に着手して、近くに繫いだ八挺櫓を廻して來た。第一番の船に乘つたのは親兵衛一行の四人に加へて逸時景能、照文から借りた組子の二人、五十三太素手吉が自ら揖取をした。續いて二番、三番と六十何人が各々分乘して櫓拍子勇ましく曳さッさと漕出した。照文は親兵衛に訣別を告げ、暫らく河原に立つて見送つた。

斯くて一行は船の中にて五十三太素手吉が準備した酒飯に腹を拵へ、人數に合はして持込んだ腹甲冑手脛當の武裝を整へ、箭を射る如くに波を蹴つて白々明けた館山からは程遠からぬ夷灣の浦に着いた。各々用意の手槍提げて五十三太素手吉らを船に留めて上陸し、夷灣の出身だといふ照文の組子に案内さして館山近くへ來ると、船中で認めた書面を二名に渡して殿臺の荒川の陣へ屆けさせ、逸時景能、孝嗣次團太鯽三の六人を伴れて搦手へと差蒐つた。その時夜は既に明放れたが朝霧深く立罩めて鶏も晨はず鴉も鳴かず、この頃寄手の攻伐つ事も無いので、番卒共は皆居汚なく眠つて六人の敵が近づいたのを知るものは無かつた。驚て政木狐の教へたまゝに城戸から艮に當る巖石連なる岡の半腹

へ登ると、果して半ば上に埋もれて蔦蔓に蓋はれた大石があつた。爰なんめりと點頭いて靈玉を收めた守袋を懷ろから出し、窃に打念じて石を拊でると不思議や石は眞二つに割れて三尺ばかりの道が開いた。逸時景能を初め、政木狐が語るを傍聞した孝嗣も、次團太も鯽三も肝を潰して覗込むと、親兵衛は先きへ立つて天井も高く凸凹も無い平らな道を、凡そ二町あまりも行くと地道を塞ぐ同じ大きさの石があつた、親兵衛は再び前の如く守袋を念じて拊でると忽ち石は二つに割れて、館山の城内なる二の廓の高塀の下へ出た。

案内知つた逸時景能は早くも用意の火藥に、燃殘つた篝の火を點して柴薪庫へ火を放ちつゝ哄と鯨波の聲を揚げた。それッ、敵が討入つたぞと眼こすりなますの賊兵どもは狼狽騒いて飛出すのを、田稅逸時爰に在り、苦屋景能爰に在りと、各々名乘を揚げて見る間に四五人突伏せた。周章てながらも敵は小人數、押取籠めて皆擊取れと鬪く折しも、犬江親兵衛仁、素藤を手取りにせんずと打向つたと聲高らかに呼ばゝるを聞くと等しく群賊はワッと言つて度肝を失ひ、それッ親兵衛が來た。犬江が來た。逃出せ〳〵と、宛ながら群羊の虎に追はるゝ如く逸足出して逃出した。

その時城内に俘はれてゐた登桐良干と浦安友勝は、俄に城中に鯨波が起つて手に取る如く矢叫びが聞え、獄卒共が周章てふためき逃失せたのを見て、裏切者が城内に生じたか、寄手が俄に攻入つたか、ドチラにしても破牢の機會と雀躍した。今飛出して寄手に加はつて目星しい敵の一人や二人を生捕

らなければ恥を雪める時が無いと、曳々聲して牢を破つて拔けようとしても、八寸角の堅固な格子はビクともしないので焦立つ時しも、前面の番小屋に火が移つて、忽ち蹧と倒れて來た機に獄舍の入口の扉が破壞れた。天の助けと二人は喜んで飛出して、獄卒共が置去りした二本の槍を素早く拾つて好き敵來たらば突かんと四方を見廻した 然うとも知らずに二人の賊兵が逃げて來たのを見ると、忽ち二人の勇士は躍蒐つて忽ち突伏せ、物具剝いで敏捷く身を固めた。折から十數人の雜兵と入れ交つて頭人の平田張盆作、奥利本膳が寄手に追はれて逃げて來たのを見ると、二人は勇んで躍り出し、先きなる雜兵を追拂つてから友勝は本膳と、良干は盆作と渡り合ひ、二人は忽ち二人を突伏せて半死半生に叫くを早くも引括つてしまつた。

これより先き親兵衛は味方の勇士に賊徒を任し、案内知つた城内の奥深くへと進んで書院から間毎間毎を搜索した。軈て奥まつた樓の下まで來ると宿直の女房が兩三人、今起きようとする處で親兵衛を見るとアナヤと驚いて聲を擧げようとした。親兵衛は屹と睨まへ、聲を立てると命が無いぞ、素藤は何處にゐる？ 有處を言へと嚇しつけた。女房はワナ〳〵慄へて齒の根も合はず、疾には返事が出來なかつたが、稍年長けた一人が聲を慄はして階段の上を指しつゝ、お上は昨宵も遲くまで御酒宴で、マダお二階に尼公樣と御寐なつていらせられますと、ガタ〳〵慄へながら生命ばかりはお助け下されと手を合はした。親兵衛は點頭いて、その方らには關係無いから暫らく聲を立てる勿と言ひ棄

てつゝ階段をトン〳〵と登つた。

素藤は丑満過ぎに臥床に入つてマダ眼が覺めなかつたが、最前からの尋常ならぬ人聲、喧ましい物音に枕を竝べた妙椿は目敏く耳を傾けたが、相公、起き給はずや、城内に火事でもあるか、俄に敵が押寄せでもしたらしい怪しい物音が致しますと素藤を搖起した。素藤はガバと跳起き耳澄ましたが、途端に階段を昇る跫音がしたので、

「誰だ？」と、まだ言ひ切らぬ中に屏風をハタと反ね除けて、突入したは誰有らう、犬江親兵衛であつた。

アッと驚き色を變へ、刀の束へ手を掛けて寄らば切らんと睨まへた。さしもの妙椿も親兵衛を見ると忽ち縮み上つて、スッポリ夜着を被つてワナ〳〵と慄へてゐた。素藤怯へず拔擊にスパッと親兵衛の向脛を拂はんとしたのを、親兵衛は素早く足を揚げてハタと蹴つて、逃げんと駈出す領髮を無圖と摑んで引寄せようとした。その時、妙椿はスルリと裾を拔出して戸障子蹴開き疾風の如く逃出さうとしたのを親兵衛透さず、素藤を手玉に取つて階下へ蹴と投付けた。その手で妙椿の肩先きを無圖と摑んで動かさず、素早く拿出した靈玉の錦の袋を妙椿に差翳した。不思議や、一道の光は流れて妙椿の全身を照らすと、妙椿はギャッと叫んで寢衣を親兵衛の手に殘してヒラリと二階から轉落した。その時、一朶の黑氣は油然として立昇るとともに、青白き鬼燐がパッと燃えて西へ流れて何方ともなく消

え失せた

「政木氏、政木氏、」と親兵衛は恰も奥庭に賊徒を捕へに來た孝嗣を呼留め、「今投り出したのが素藤だ。縛つて吳れ。」と二階から下知した。（爰には省いたが、孝嗣は兩國河原の船宿で故主を遠慮して再生の恩ある靈狐を偲ぶために政木大全と改名したのである）

「オウ。」と答へて孝嗣は起きんと蠢めく素藤を取つて押へて傍なる車井戸の釣瓶索を引寄せて高手小手に縛めた。

殘れる賊徒の面々は逃出せばとて逃終せるもので無いので、破れかぶれと一度にドッと親兵衛へ打つて掛ると七八人、手玉に取つて二階から大地を目掛けて叩きつけた。恁る處へ荒川の本陣へ書面を屆けさした二個の雜兵が清澄攻伐隊に加はつて城に攻入り、親兵衛を搜しに奥庭まで來蒐つたのを孝嗣見るより呼留めて、親兵衛に二階から投出されて半死半生に折重なつてる賊徒を片端から縛り上げさした。その時ヒラリと庭へ飛下りた親兵衛は首尾よく賊魁を手捕にした喜びを孝嗣から述べられつつも妙椿の行方を知るものゝ無いのを物足らなく思つて手を分けて搜さした。その内に荒川清澄、小森高宗を先きにして逸時、良干、友勝、景能、次團太、鯽三等各々願八、本膳、盆作、狼之介らの捕虜を牽ゐて集まつて互に戰勝を喜び合ふ中、孝嗣までが組子と一緒に搜してゐた妙椿が簷下の石の淨水盤に本性露はして死んでゐたのを發見した。

「在た在た、こんな處で死んでゐた。何處かで死んでるとは思つたが、こんな處で死んでるとは思はなかつた、」と親兵衞は淨手盤に手を差入れて、大きな牝狸の死骸の頸を掴んでヅル〳〵と引出した。不思議や脊中の毛が烙印されたやうに焦げて如是畜生發菩提心と讀まれた。親兵衞は政木狐から聞いた因果の一伍一什を語つて　これぞ八房に乳を飲ました富山の牝狸で、玉梓の怨念が結ばり憑いてゐたが、靈玉の奇特で怨念解脱して佛果を得たはこの如是畜生發菩提心の八字で明かであると、政木狐が咄した通りを清澄らに語り聞かした。一同は怨念の恐ろしさに怖氣を震ひつゝも親兵衞の武勇と伏姫神の靈驗とを感嘆して止まず、玉梓の怨念得脱したからにはお家は最早安泰と、清澄初め一同は久しい間の愁眉を開いて御代長久を祝し合つた。

斯くて親兵衞は妙椿の遺骸を燒いて厚く弔はせ、素藤に强制された軍民の解放、窮民の賑恤等殘る隈なく清澄と談合して後、素藤征伐の御敎書を授けられたが七犬士召會の先命はマダ解かれたので無いから、素藤を平らげたからには結城の法會には最早間に合はないでも犬士を中途まで出迎へて君命を達してから後に歸參仕らんと清澄に別れを告げた。孝嗣、次圍太、鯽三らも七犬士らに先立つて附驥の微功の恩賞に與かるは望ましからずと清澄の慇ろな推擧を固く辭退して親兵衞諸侶五十三太素手吉の船に乘つて關宿まで引還した。一と足遲れて稻村からのお使番が來たので萬事は御沙汰通りに殘る隈なく處理して後、素藤以下の捕虜を牽かして數日後に稻村へ凱旋した。妖雲爰に一掃されて

房總一圓靜謐に歸した。

× × × × × × × × × ×

結城の五十回忌法會は所期の如く四月十六日里見の代番使蜑崎照文、及び七犬士以下參列して結城の古戰場に石塔婆を建てゝ嚴かに修し、施餓鬼を行うて近鄕近村を賑はして滯りなく濟ました。然るに結城の菩提寺逸正寺の住持德用和尙は佞奸邪智の惡僧にて、大が德用に何の沙汰もなく法養を修し且つ盛んな施餓鬼を營んだのを嫉視し、里見が結城の恩誼を貌視し、佛事に托して非謀を企らむと誣ひ、腹心の徒弟堅削と謀り、同氣相求むる結城の家臣長城、堅名、根生野の三人を語らひ、先住未得の忠言を容れず、大の草庵を不意に燒擊して眼に物見せんと企てた。この風聞が耳に入つたので犬士の方でも應戰の支度をしたが、そんな事とも知らずにゝ大は照文、與四郎を隨へて信乃と共に發し、六犬士が踏留まつて敵を待受けて散三に破り、堅名、根生野を初め一味の惡僧惡武士原を生擒し足た。一足先きへ發足したゝ大の一行は、結城の町を離れる一里半ばかり大利根の枝流の左右川へ差蒐ると長城惴利を大將とした惡武士の一隊に待伏せられた。殿りをした信乃が惡僧德用を對手に鬪ふ間に照文、與四郎は不意を伐たれて俘にされ、ゝ大法師の身の上も危急に迫つた折も折、關宿で五十三太素手吉に別れた親兵衞の一行が來蒐つたので釣瓶打の銃砲の中を潛つて敵を追散らし、危ふい處

を救つたが、敵の大將惣利を落馬さして左右川の急流に入水さした代りに、孝嗣と次團太郎三の三人をも銃に打だして左右川に落込ました。親兵衛は敵を散三に追散らして照文與四郎の繩を解き、〻大と名乘合つて三人の往方を搜しに河縁を縫つて行く中に信乃と再會し、六犬士の身の上も案じられるので再び結城へ引還した。その時は最う惡僧惡人原も重だつたものは引捉へ殘れるものは追散らしたあとなので、親兵衛は肉親の小文吾初め一同と互に舊歡を叙し初見の會釋をする中に、伐洩らされの雜兵から事の赴きが結城の城へ聞えたので、結城の重臣小山朝重が事件の顚末を調べに七犬士に會ひに來た。本より非は先方に在るので、犬士らは喧嘩を賣られて據ろなく應戰したのでこの度の法會に就ては疎漏も懈怠も手ぬかりも無いのが明白となり、犬士の方にも德用一人の嫉妬に根生野らが左擔したので結城の君臣は少しも聞知せず、この度の法會を感謝して喜びこそすれ決して惡感を抱いてゐなかつたのが解つたから、雙方共に釋然として朝重の陳謝となり、根生野堅名の兩人は重い咎目を受けて入牢されて牢死し、德用堅削は追放され、長崎惣利はあの時に溺れようとしたのを助けられて後、酩酊して人に殺されたのが解つたが一件落着した。續いて〻大の法會に奇蹟を現はした石地藏を祀つた廢寺能化院は德用に代つて逸疋寺の後住に直つた名僧榮西に再建され、この再建を機會として結城騷亂以後暫らく隔絶した里見結城の兩家は互に使節を交換し、相互の菩提所に供養をし、雨降つて地固まるまで互に舊交を復して唇齒輔車の關係を新たにした。

斯くて〻大は照文と與四郎とを具して、結城から齎らした里見の先君季基酬臣の遺骨の御供をして安房へ歸つた。これより先き里見義實義成父子に里見家代々の菩提所として白濱に一宇を建立し、寺號を延命院と命じて〻大を開山第一世とする意志があつたので、〻大の供奉した。先君の遺骨を埋葬して盛んな法會を行ふと共に〻大に旨を諭して延命院の住持とした。八犬士は前年からの緣故に由つて一先づ武州穗北の豪士氷垣の家に落着いたが、延命院の法養を濟まして後、〻大は照文と共に穗北へ行つて、新めて義實義成兩卿の召命を傳へ、大船を艤裝して犬士へ迎へさせ、瀧田へ着いて數日後一同打揃つて稻村へ參候して、兩侯同座にて里見家家例の點茶の式を行はせられた。

× × × × × × × × × ×

さて八犬士が揃つて歸參したので兩卿は〻大の功勞と、その先人金碗八郎孝吉の建國の殊勳を顯彰するため特に犬士に賜ふに金碗の姓を以てした。然るに四姓以外の姓を名乘るには勅諚を請はねばならぬので特に犬江親兵衛を正使とし、蜑崎照文を副使として數多の貢物を齎らして時の執權細川政元の手を經て勅諚を請はした。然るに宣示御敎書は滯りなく下げられて使命を無事に果したが、政元は親兵衛の文武の才に秀でたるを惜み、副使の照文に宣示御敎書を奉じて先へ歸らしめて、親兵衛を事に托して私邸に留めて何時までも返さず、或時は物を賜ひ、或時は仕官を薦めて親兵衛の志を

移さうとしたが、管領の恩威を以て高官榮職を啖はしても親兵衛を動かす事が出來なかつた。爰に町畫師巽風なるものがあつて、傳金岡と稱する無瞳の虎の一軸を、東山殿の内覽に入れたいと管領家へ願出た。巽風は管領家へ召され、如何に名畫でも無瞳では貴人の御覽に供へる事は出來ぬがらと巽風に點睛を命ぜられた。巽風は點睛して若し虎が拔出たなら一大事、拔出なかつたら傳金岡が僞りで凡畫を裏書きするのだから痛し痒しで頗る窮した。が、政元の嚴命もだし難いので思切つて大膽に點睛した。不思議や、畫面に疾風起つて虎は忽ち拔け出で、躍然跳蒐つて巽風の吭笛に喰ひついた。素破一大事と政元の周圍を固めて上を下へと騷動する中に虎は忽ち疾風の如く何れへか去つてしまつた。左らぬだに市に三虎を出だすの喩、洛中洛外は震慴して途に安んずるものが無かつた。政元は莫大な賞を懸けて北面の武士、名だゝる武藝者、狩人にまで下知して虎を退治させようとしたが、虎と聞くと皆尻込して、虎が時折現はれると噂される白川山に近づくものだに無かつた。中には畫から拔出た靈物で、本來形の無いものだから、弓鐵砲よりは加持祈禱が效驗があらうといふものがあるので、名ある修驗者に調伏さしたが、何の效も無かつた。百計盡きて政元は終に親兵衛の武勇を借りようとした。親兵衛は爰ぞとばかり、千金の寶は愚か高祿榮官も望ましくないが若しその功を以て身の暇を賜はるなら必ず猛虎を退治仕らん、就ては御威光に幸ひ虎を射留める事が出來たら、改めてお暇乞ひを申上げず、その場から直ちに歸東仕りますから闕の手形を賜はりたいと願つた。政元も今は最早

親兵衛を引留める辭柄も無く、禁裡からも虎狩の御督促が嚴しいので、親兵衛の望むまゝに任すより外無かつた。恁くて親兵衛はその日賜はつた名馬走帆に跨がつて政元にお暇乞申上げ、照文が殘し置いた若黨直塚紀二六に萬事を申含めてその夜單騎白川山に向つた。この夜の中に虎に遭はざれば何時下山出來るかも期し難かつたが、運能く虎に遭逢つて山中の隘路を縱横に馬を驅けめぐらしつゝ眼を瞋らし牙を鳴らして飛蒐らんとするを、矢頃を測つて矢繼早に射た二條の獵箭が覘ひ誤たず兩眼を射貫いて箆深く後ろの老木に縫ひつけた。有繫の猛虎も窮所の痛みに低く吼つた弱り行くのを、早くも馬から下りた親兵衛は拳を固めて兩眼の間をシタ、カに撲つたので脆くも忽ち落入つてしまつた。折から親兵衛の踵を追つて來た紀二六が追付いたので、親兵衛は虎の屍體を示して首尾よく虎を射留めた顚末を語り聞かせた。前途を急ぐからと紀二六に虎の屍骸の張番をさせ、善後の處分を申含めて單騎坂本（近江）へ降りた。政元の手形通りに虎の耳を證據に關所を通り拔けようとしたのが、確かに削取つて懷ろへ入れて來た隻耳が何處へか紛失したのが間違ひで、關所の役人に通過を沮まれて一場の葛藤を起した。が、事件は程無く收まつて大津の町端れまで馬を飛ばして追つて來た政元に訣別を告げ、與四郎紀二六らの馬廻りを揃へて一行無事に歸東の途に就いた。

親兵衛京都に使ひする一條は本筋には餘り關係が無く、些か贅疣に等しい感があるが、親

兵衛は九歳の神童にて、この旅中（爰には省筆したが）海賊と出遭ひ、數多の武藝者と武技を角し、最後に虎狩までも點出した冒險談、武勇談、スポーツ談にて些か長物語に倦んだ讀者に活を入れる八犬傳中の最も花やかな英雄談である。「八犬傳」は實に百三十一回の八犬具足にて終局を結んでゐるが、この全く目先きを變へた京洛の卷にて一轉回をし、最後の大戰爭の壯大なる大舞臺を以て終るのは作者の大手筆である。この親兵衛の武勇談は九卷十八回に渉る可成の長物語で、爰には梗概をだに說盡せないが、又決して無用の贅疣として棄つべからざる一節である。

× × × × × × × × × × × ×

終局　里見對聯合軍の大決勝戰

「八犬傳」は兩上杉及び滸我公方を盟主とする、房總鄰接諸侯伯の水陸大聯合軍に對する里見の大決勝戰を以て終結する。終局といふ條、全部の四分一以上を占め、獨立して一部戰記を作るに足る量があつて、その荒筋を搔摘むだに容易で無いから、その原因と結果だけを若干行に撮要して以て梗概の

結尾としよう。

× × × × × × × × × × × ×

「八犬傳」は里見の勃興史であると同時に扇谷定正に對する豐島練馬の殘黨の復讐史である。八犬士の面々の生立ちは各々個々の歷史を持つてゐるが、最も長い最も複雜した波瀾を作つてゐるは道節を中心とする豐島練馬の殘黨の臥薪嘗膽史で最も多くの犬士がこれに交渉してゐる。道節の復讐の第一次は白井の城下に於ける要擊でこの時はマンマと巨田助友に讐定正の首を喝はされた。第二次の復讐は高畷に於ける要擊で、その時も不意に起つて奇利を制したのであるが、矢張り遠矢で兜を射落したのを切めてもの勝利として當の本尊は惜しい處で逃がしてしまつた。道節の復讐は二度とも最後の一擊に失敗したが、定正は深く道節を恐れて怖氣を震つた。且つ荒芽山以來道節に一味して定正を苦めた犬士を憎み、陰に陽に犬士を庇護する里見を快からず思つた。痩浪人の道節一人にさへ散三辛い目を見せられて肝を冷したのだから、八犬士を一束にしてつい鼻の先で里見に威武を張られては脅威を感ぜずにはゐられなかつた。

そこへ持つて來て近頃奇怪な取沙汰を耳にした。定正の家臣河鯉佐太郎孝嗣、隱謀露顯して將に首刎ねられんとした時、定正の岳母 簸 大刀自と僞はつて刑吏根角谷中二を欺いて罪人佐太郎孝嗣を赦

免解放したものがあつた。定正は大に怒つて、日を限つて孝嗣を逃がした一味連累を取押へよと谷中二に嚴命した。谷中二は慾り間違へば禍ひ身に掛るので、組子を引率して必死となつて偵察する中、道節の一味たる豐島の殘黨落魚有種の小者が醉に乘じて定正襲撃の手柄咄をするのを引捕へて、有種の村の穗北が一鄕豐島の殘黨で、道節初め定正を仇と覘ふ一群の根據地で、信乃、毛野、その他の犬士も穗北に潛れてゐた事、谷中二を欺いて孝嗣を奪つたのは亦犬士の一人なる犬江親兵衛と呼ぶ惡少年で、孝嗣はまだ正式に召抱へられないが素藤退治の功勞もあつて、親兵衛の推擧で既に里見の有司の默諾を得てゐる事、孝嗣と同樣に親兵衛に推擧された、石龜屋次圓太百堀鯽三の兩人は證據不十分でこの頃放免されたが 箙 大刀自の片貝の獄舍に暫らく繫がれてゐた罪人である事が明白になつた。孝嗣や次圓太らは親城衛に具して結城へ行く途中、左右川ら川緣にて結城の匪徒に襲はれ、狙撃されて河へ墮ちて往方知れずとなつたが、里見に由緣ある惡少年に誑かされて君家に仇する罪人を奪はれたのは事實である。扇谷に敵意を抱く道節ら一味が里見に庇護されるは本より明々白々にて、彼と言ひ是と言ひ、里見が公々然と尻押するので無くても、扇谷の叛賊或は怨敵を擁護する下心は推測られる。兎ても角ても里見が扇谷に敵意を抱く八犬士を擁してつい眼と鼻の間で嵎を負ふの虎の如く盤居する間は一日も枕を高くしてはゐれない。この上根を張り枝を伸ばされては扇谷は戰はずして座がらにして亡びる。

この脅威は管扇谷ばかりで無く、山内もまた同樣である。豐島練馬の殘黨が敵と目指すのは定正ばかりでは無い、里見の武力を借りて怨を定正に返したならその勢ひに乘じて直ちに山内に迫るは愈々掌を指すよりも明かである。脣亡びて齒寒きの喩、扇谷の危きを見て山内は豈夫安閑としてはゐられないだらう。

上杉兩家ばかりでは無い、滸我と雖ども亦里見の武威を張るは鄰家の火である。悠々としてノンキな顏をしてはゐられない筈である。昔は片腕と賴んだ方人でも結城以來その關係は疏隔してをる。その上に昔は無二の忠臣でも今では却つて怨を結んでる二犬士が帷幄に參してをる。滸我も亦決して安心してはゐられない。その他千葉兩家、越の長尾景春、女儀ではあるが片貝の 箙 大刀自扇谷の御内の大身大石父子、甲斐の武田、相模の三浦、皆惡犬士に怨を結んでをる。上杉兩家が一と度大旆を立てゝ麾けば聲に應じて集まるは知るべきである。里見父子が如何に噂に背かぬ名將であつても、犬士が如何に武勇絕倫でもこれ等の大小名を連衡して里見に當つたなら、拳石を以て卵殼を碎くよりも容易であらうと、定正は終に機先を制して諸侯を遊說して里見を伐つの 計 を立てた。

山内顯定は直ちに同意した。定正ほどに脅威を感じないでも房總を分割して勢力を伸ぶるは益々上杉の武力を強くする所以だから食指を動かさずにはゐられなかつた。成氏も亦滸我を以て盟主とするの甘言を啗はされて容易に動かされた。愈々勢揃ひをした時、上杉兩家が約に違ひて總帥の印綬を渡

さず自ら盟主の位置に坐するを見て心窃に樂まなかつたが、内には佞臣槿堀在村が一時を糊塗して和むるあり、本來優柔の煮え切らない上に、信乃現八が共に背いて里見に走つたのを深く含むが故に初めほどには乘氣にならないでも上杉の指令をも甘んじた。大石父子は本より扇谷の御内、殊に信乃、莊助、小文吾、現八らには散三愚弄された恨もあるから定正の決意を聞くと益々焚付け、自ら進んで說客の役目までも勤めた。石濱の千葉は寵臣馬加常武の一家が毛野に戮殺された恨みがある上に、傳家の寶刀を小文吾に奪はれた疑ひが、猶ほ解けなかつたから里見に對して餘り好感を持たなかつた。越の長尾母子も白井以來扇谷に關聯して里見及び犬士に對する誤解がマダ十分解けなかつたから、去らぬだに秦晉の關係上多少の兵を動かすのを惜まなかつた。甲斐の武田、相模の三浦は管領の催促に應ずるほどの敵意を里見に挾まなかつたが里見の旭日冲天の勢ひと、虛心坦懷で見て安座するわけには行かなかつた。但だ下總の結城は極めて巧妙な辭禮を盡して卽時の催促に應じなかつたが、これをしも聯盟の數に入れて上杉兩家は八州の草木風に靡くが如く鼻息を荒くし、房總五十餘城唯一揉みに踏潰さんづと犇いた。

里見側でも亦上杉兩家との確執が段々濃厚になつて來たのを知つた。進んで事を構へるを好むわけでは無いが、早晩一戰爭しなければ決して解決されまいと信じたからより〳〵形勢を觀望すると少しも油斷しなかつた。犬江屋の依助は回漕業の商賣から房總武常野を絕えず往復するから敵の動靜を探

るには極めて便宜で、小才の利いた機敏な男だからと犬士らの推擧するまゝ、間諜として諸國の情報を偵知さした。有種の小者が氣焰を揚げて谷中二に捕へられたのを早速注進に及んだのは依助であつた。續いて定正が諸國の軍勢を催促して頻りに戰備を整ふるを聞きて里見側にて亦軍議を凝らし、各各部署を定めて率と言はゞ何時にても直ぐ應戰出來る攻防兩樣の支度をし、定正が水軍の主力、顯正が野戰の主將であるを偵知して、戰未だ開けざる中に早くも謀計を旋らし水陸二方面の策戰に着手した。

戰爭は先づ前線の小ぜり合から初まつて、安房は洲崎から武藏石濱まで水陸二十里に涉つて開かれた。決勝戰は十二月八日の唯の一日であつて、陸は墨田川を距てた葛西金町一帶を舞臺とし、山内顯定、滸我成氏を主將とし、千葉自胤、長尾景春が裨將であつた。里見側では御曹子義通を主將とし、犬塚信乃、犬飼現八、犬川莊助、犬田小文吾、その日に辛うじて間に合つて參加した犬江親兵衞を防禦使とした。水上は品川から房總に到る海面を舞臺として一擧に稻村瀧田を衝くの戰路で、扇谷定正自ら總帥となつた。里見側は義成自ら衝に當つて犬坂毛野を軍師、犬山犬村二犬士を防禦使とした。陸上では敵も亦勇敢に戰ひ、各防禦使も善戰能く勤めたが、水上では攻防共に戰略で終始し、内に在つては毛野が方略を建て、外に出でゝは大角が自ら策動した。實際に戰つたのは道節一人であつたが、戰爭の中心は自然力を利用した機略の逐次的發動であつて個人の武勇が餘り與かつてゐない。道節が

盲龜の浮木、優曇華の花咲く春と待ちに待つた定正との機會も、寧ろ敵の思ふ坪に陷つてマンマと助友に邪魔をされて首尾よく機を逸し、却つて小湊目輩をして名を成さしめた。が、陸上には五十子、石濱、忍岡、大塚の四城を陷れ、十二將を擒にし、山内扇谷の兩管領を初め數將を走らして水陸共に里見側の大捷となつた、里見は本より兩管領を亡ぼして關東に覊たらんと志あるわけでなく、兩管領から挑まれて止むを得ざるに戰つたのだから、再び起つ能はざるまでに致命的の打擊を與へようとは思はなかつた。千葉の一城、扇谷の三城を攻略したのも戰爭の過程上一時占領したので、邊陲の房總から中原の武藏に進出する大志があつたのでは無い。が、戰爭の主盟たる兩管領が遠く脱奔したので和議を講ずる道が無かつたので、一部を武藏に駐屯せしめて全軍を收めて安房に凱旋した。

恰も戰前京都へ使ひした蜑崎照文が歸國した。兩度の獻上を嘉みせられて禁裡及び柳營から遣はされる使節が照文と共に安房へ下つて義成父子の官位を陞す宣旨を齎らした。この策命使が和睦の仲介者となつて房總武相の海上に盛んな平和克復の式が擧げられた。これに先立つて里見家では水陸の施餓鬼を營み、戰禍を蒙むつた窮民を賑恤した。平和が克復してから洽く恩賞を行ひ、戰爭に參加した遊俠義民の仕へを求めるものは士分に取立て、或は厚く賞賜して功に酬いた。

斯くて犬士は各々一族を賜ひ家老上席に列せられて八女を妻合はせられ、富貴顯榮到らざる無かつた。犬士に次いで正木大全も亦一城を賜ひ、里見の緣家眞利谷の一女を妻合はせられて四家老次席に

列せられた。、大は犬士と共に京都へ御禮に上洛した時、禁裡から禪師を賜ひ、伏姫神へ賜はつた勅額を奉じて歸房し、盛んな祭典を行つて後法燈を弟子念戌に讓つて退隱を願ひ、富山の伏姫の石窟を塞いで入定してしまつた。幾何もなく義實も下世し、八犬各々兒孫を儲けて老を告ぐるに及んで半知を返上し、致仕して相挈へて富山に入つて老を樂み、後の八犬士登山して父に會うて歸るを最後として終る處を知らずといふので局を結んでをる。

八犬傳年表

永享十一年
後花園天皇
將軍足利義教

○二月十日、鎌倉管領足利持氏、宰臣上杉憲實と確執を生じ、事破れて永安寺に幽せられ、此日終に自刃す。

同　十二年

○正月、結城氏朝、持氏の遺孤を擁し結城城に據つて兵を擧ぐ。

嘉吉元年
六月將軍義清弑せらる

○四月十六日、結城城落つ。結城の方人里見季基これに殉ず。季基の子義實老臣二人を隨へて亡命す○十八日安房に渡る、途次三浦にて白龍を見る○十九日、館山城主安西景連に賴らんとして容れられず○二十一日、白箸河畔にて金碗八郎に面會、この夜小湊にて土民を集め、神餘の逆臣山下定包討伐の義兵を擧げ、一擧東條を屠つて直ちに瀧田の城に迫る。

○五月上旬、瀧田城陷り逆臣定包毒婦玉梓を初め一黨誅に伏し、義實平郡長狹二郡

を領す○麻呂信時亡ぶ。
○五月十六日、美濃垂井金蓮寺にて持氏の遺孤斬らる。信乃の祖父大塚匠作難に殉ず。匠作の子番作刑場に亂入して幼主及父の首を奪うて逃ぐ○十七日、吉蘇の御坂の麓の道場に首を葬らんとして計らずも許嫁の妻手束を惡僧の手より救うて共に伴ひ去る。
○七月七日、金碗八郎孝吉自殺す。
○秋、義實上總椎津の城主、萬里屋入道の女、五十子を

同　一年　十一月義勝將軍宣下
同　三年　七月義勝薨　義政嗣
文安元年より康正二年まで

娶る。
○夏、義實の女伏姫生る。
○義實の嗣子義成生る。
○信乃父番作、舊采地武州大塚に歸る。これより先、番作性を犬塚と改む。
●●●●●●●十三年間記事なし。猛犬八房が富山の山麓に生れ里見の家に養はれたは伏姫十一二歳の頃と言へば、享德元年又は二年の頃ならん。
○秋、安西景連八房のため首を嚙取られて亡ぶ○伏姫八房に伴はれ富山に入る。

長祿元年

同　二年　○伏姫自害、十七歳。金碗八郎の子、大輔孝德二十二歳、桑門に入つて、大と法名す。回國行脚の途に上る。
同　三年　○八月義實隱居義成繼ぐ。
○九月、犬山道節生る。幼名道松。
○十月二十日、犬飼現八生る。幼名玄吉。
○十一月、犬田小文吾生る。
○十二月朔、犬川莊助生る。
○犬村大角生る、(月日不詳)
幼名角太郎。

寛正元年

○音音、力二尺八を生む。
○七月、犬塚信乃生る。

同　二年　記事なし。
同　三年　○正月、濱路生る。
同　四年　記事なし。
同　五年　○十月三日、大角父赤岩一角庚申山にて怪猫に殺さる。
○九月十一日、莊助の父衛二則任死す。
同　六年　○十一月二十九日、莊助の母大塚にて死す。それより以後莊助、額藏と呼ばれ大塚の莊官墓六の小厮となる。
○十一月、毛野の父粟飯原首胤度欺かれて殺さる。妻子皆難に殉ず。胤度愛妾調布相州足柄郡犬坂の里に遁れ

て毛野を生む。
○大角伯父犬村氏に養はれその姓を冒す。

文正元年　記事無し。
應仁元年　記事無し。
同　二年　○信乃の母手束死す○九月、義成五の姫濱路鷲に攫はれ、甲州猿石の四六城木工作に助けられて養はる。
文明元年　記事無し。
同　二年　○信乃の父番作切腹四十五歳
同三年、四年、五年、六年、七年　記事なし。
同　八年　○小文吾の妹沼蘭山林房八に嫁し、その冬、犬江親兵衛を生む。幼名眞平。大八と諢名さる○角太郎雛衣と婚す。
同　九年　○四月十二日、力二尺八、曳手單節と婚す。
○四月十三日、豐島練馬亡び道節の父道策、扇谷定正の臣竈門三寶平のために討たる。
○七月二十二日、現八の實父糠助死す。六十一歳。
○六月十八日。信乃滸我へ行く。
○六月十九日、蟇六・龜篠・

簸上宮六等に斬らる。
○同日、圓塚山に濱路左母二郎に殺され、左母二郎は道節に殺さる。
○六月二十日、朝、額藏背助召捕らる。
○六月二十一日、芳流閣の角闘。
○六月二十二日、山林房八死す。
○六月二十四日、小文吾信乃現八の三人大塚へ行く。
○七月二日、丶大大塚を指して行徳を船出す。
○七月二日、額藏庚申塚に刑せられんとして三犬士に救はれ、追はれて戸田川に到り、猎平の義に助けられて大塚を立退く。力二尺八追手と闘つて死す。
○七月五日、蜑崎照文、妙眞親兵衛を伴うて安房に赴かんとして悪漢舵九郎に阻止せらる。舵九郎は天罰に由つて横死し、親兵衛は神隱しとなる。
○七月六日、道節計られて質定正を刺す○七月七日荒芽山に五犬士猎平等邂逅し上杉勢に包圍せらる。

○七月六日、文五兵衛大塚へ行き、九日行德に歸り、十一日安房に赴く。
○此秋大角の義母死。
○七月、小文吾惡漢竝四郎を刺し、捕へられて馬加大記邸に抑留せらる。
○七月二十三四日、現八古那屋に到る。
○九月中淀、妙眞文五兵衛行德市川の處理を盡く濟まして安房に轉任す。
○二月十五日、文吾兵衛安房に死す。
○五月十六日、對牛樓上、犬

同　十一年

坂毛野復讐。
○五月十七日、犬田小文吾石濱城を脫れ、依助の舟に助けられて市川に來る。暫らく滯留して後依助に別れて先づ鎌倉を指して出發す。
○春、犬村角太郎、義父蟹守儀清死す。
○九月六日、犬飼現八奥羽を志して行く途次、野州網亭の里を過ぐ。その夜庚申山に迷うて赤岩一角の亡靈に遭ふ。
○九月七日、現八、角太郎を訪ふ。その夜一角を尋ねて

一泊す。
○九月八日、雛衣舅姑に迫られて自害す。角太郎父の讎を報ず。
○四月中旬、角太郎別宴の席上大角と改名の披露をす。その翌々日、現八と共に赤岩を去る。
○十月下旬、犬塚信乃甲州石和を過ぎ、泡雪奈四郎に狙撃され、怒つて奈四郎を殺さんとして舊緣四六城木工作に和解され、暫らく木工作許に逗留す。
○十一月中旬、奈四郎木工作

同　十三年

を銃殺して、木工作妻夏引と計つて下手人として信乃を訴ふ。偶々石和指月院に滯留中の犬山道節、眼代と僞はつて信乃を救ふ。指月院にて信乃、大法師、蜑崎照文、犬山道節と邂逅す。
○十一月二十一日、二犬士照文と共に木工作に養はれたる里見の息女濱路姫を護衛して石和を出立す。
○二十三日、泡雪奈四郎出奔して、四谷街道にて從僕媼内に斬らる。怒つて媼内を追はんとしたところへ、來